相紀垂三生

天素江

049
0·18
049-018ウ
1200500724448

始

232

049
0.18

帝國圖書館藏

大江素天著

人生三世紀相

河原書店發行

昭和五年
帝國圖書館藏

915
42

はしがき

その日、その時の心持を、筆に任せて書きとめた卽興賦、隨筆、寸感、物語、分別くさい論議、事實譚、あつめて一くゝりにするのに、時代らしい氣持で一ぱいではあつたが、古いスクラップ・ブックを書庫の中から探り出して、血に燃えた青年時代、今の若者などまだ生れてゐない、日露戰爭前後までを懷しく偲んだばかりに、死んだ兒を甦らしたい未練もわき、朱筆を入れて、この中へ挿しこんだ。そのためスフ入りのタオルのやうになつて肌觸りはあまりさらりとしない。殊に我ながら煩さいのは、若い者の胸に問へる訓誡めいた繰言の多いことである。けれども書齋に古書の紙魚を拂うて、先人の書きのこした雜話に新らしい感激を覺えるのも、緊張を缺いてはならぬ大切な時代だからと思ふと、滅多とさういふものを讀まれさうにもない青年達に、新しいこの本の裝禎が物をいつて、せめて一人にでも讀まれたら、精神上の糧にもならうか、少くも中年者、老年者には微笑まれることもあらうと、餘計の頁を取つてしまつた。

武庫・浦風山莊にて

著者記す

目次

一、金と衣裳と米と蠟燭……一頁
＝秀吉と家康＝君臣不和の和＝若州と西山公＝
二、お炙と犬としがんだ……九頁
＝古い落し咄と運慶作の仁王さん＝
三、一襟の浮華、奢りの末路……一三頁
＝大阪の料理がなぜ發達した？＝一汁一菜談＝
四、天下の法度と煙草……二〇頁
＝上様もご存じのないおから飯＝
五、武將と蝸牛と酒と……二五頁
＝遁げ腰政治＝彈丸も通らぬ兜＝心得ぬこと＝

六、老人の世界、若い者の世界……三四頁
＝獨逸の總統ヒットラーの飛躍＝
七、理想と實際の喰違ひ……四〇頁
＝相貌によつて知る人の性格＝
八、防空隨筆 我に劔あり魂あり……四六頁
九、古紙帖の城廓と蚊の製藥……五七頁
一〇、轉び出た桶の人間……六三頁
＝請待の拔け殼とカメラ狂＝
一一、遺聞丹波義民傳……六九頁
＝光秀の居城と軍法松＝御定法＝死骸の打首＝
一二、大江山鬼退治の道筋……八七頁
＝傳說の跡を傳ふて京から丹後へ＝

一三、夏と浴衣と美女……九二頁
一四、旅に病む日の宿の料理……九九頁
一五、新聞特ダネ苦勞物語……一〇三頁
＝大阪二代目の知事＝海を紫に染めた醬油＝
＝櫻島の大爆發＝青島戰＝
一六、信仰と健康と良心……一一六頁
一七、古器物愛翫＝文化と武備……一二三頁
一八、曲直二つの道＝言葉と行ひ……一二六頁
一九、知らなかつた世界＝鮨詰列車の一夜……一二九頁
二〇、その日の深き感激……一三三頁
二一、文人としての菅公と空海……一三五頁

＝詩文の力＝產業の戰士と牧民官＝遣唐使＝
＝天神さま、お大師さま＝溫かい光り＝
二二、天明綺談『紅緒の箱』……一七四頁
＝正直要助＝柴野栗山＝六兵衞燒＝
二三、人生三世紀相……二三〇頁
＝醉楊妃（青年時代）＝嵐の渦（中年時代）＝
拔萃帖と簑虫（老境時代）
二四、寸感雜筆……二六七頁
二五、蛇腹の繰言……二八四頁
二六、藝術寫眞と新體制……二九二頁
＝國家意識、民族意識の昂揚＝

人生三世紀相

大江素天著

一、金と衣裳と米と蠟燭

＝秀吉と家康＝君臣不和の和＝若州と西山公＝

豐臣秀吉が關白になつて、天下に號令した時分には、戰後の疲弊も大分立直つて、金を借るほどの人もなく、金持は倉の中に唸つてゐる小判の處置に頭をひねつたといふ話であるが、間もなく金貸屋が生れて、いろ〳〵な手段で金を貸し始め、高い利息をとつた。太閤はそれを聞いて、怪しからぬ奴原と、刑罰に付したが、借りた者が若しも武士であつたら、何のために天下の祿を食んでゐるのか、平素の心掛が惡いからだ、左樣なものに知行をやるのは勿體ない

と、忽ち首にしてしまつた。

それを逆に行つたのが徳川家康である。俺も昔は貧乏だつた。貧ほど辛いものはない、刀槍馬具の用意にも相當金がかゝる、されば富んでゐるものが、何ういふ名義であらうとも、これを償つてやるのが天の道である。さういつて内密に二十金、三十金と用立をしたといふ話が扶桑太平記にのつてゐる。

政治の要諦、民心の收攬には、理論としては正しい太閤のやり口よりも、仁慈に近く見えさうな家康のやり口の方が賢こさうである。財政的には一向差障りのない職名を與へて、虚榮心を滿足させ、股肱の臣にしておかうといふ秀吉以上の賢なる策が、今日民間のあちらこちらに見受けられる。佛に仕へる僧侶を緇衣一色にしないで、赤、紫、金襴と、いろ〳〵法則づけたところにも、一切空を空にした、賢なる策があるのだと、金襴の袈裟の問題がいろ〳〵言はれてゐるとき、モンペ姿の私を見て、私はひとり微笑んだ。

◎

三代將軍徳川家光が、ある日、ある風流な遊びをして一日を樂まうといふことになつた、そして譜代大名や旗本に、けふはなるべく華やかな伊達衣裳をつけて登城するやうにと布令を廻した。喧ましい家光にしては珍らしいことである。賢い春日局あたりの指圖だらうと囁くものもあつた。

將軍の命令は七ッ道具を負うた武藏坊よりも強い。彦根の藩主で老中の井伊掃部頭直孝のやうな「儉約」の申し子にも均しい、質素を一生の規範とした人たちまで、紅裏の染小袖を着て、變な調子で登城した。

それだのに井上筑後守政重といふ大目付、天草の切支丹騒動に上使になつて督軍に出かけたり、長崎へ異國船の吟味に行つたり、生駒高俊が菽麥を辨へぬ魯鈍から讃岐高松城を沒收された時、いやな命令を傳へに行つた氣骨ものは熨斗目の裃に威儀を正して出仕した。

家光はそれを見て『あれだけいつておいたのにナゼひとり、そんな堅苦しいみなりをして出たか』といつた。筑後守は『お布令は確かに拜承いたしましたが、家臣どもが、お布令通りにはしない方が世上の風儀の爲よろしからうと申すので尤の儀と存じ伊達衣裳は着けずに參りました』と答へた。家光は腹を立てゝ『予の申すことに耳をかさぬ不屆者、定めし亂氣でもいたしたのであらう』と激しい語氣だつた。筑後守は苦々しさうに眉をよせて『拙者は亂氣いたしてをりませぬが、婦女子、猿樂どもの眞似をいたす老中たちこそ亂氣をいたしてをるものと存

じます』といつた。家光はいよ〳〵不機嫌になつて、遂に座を立つてしまつた。

伊達に飾つた老中どもは心配して『あまり御意に逆らふやうなことは申されぬがよからう』と懇切に耳打ちすると、『筑後は不調法な御挨拶を申上げ、恐縮いたしたが、さて〳〵御慈悲、何とも忝い。今にも御手討と存じ首さし延べてゐたところ、その儀もなくお立ち遊ばされた。この上は、老中方より何分の御沙汰下さいますやう』といつてスーと下つた。

それから三月ばかりの後、筑後守は五千石加増になつた。

『君臣不和の和』だと三省録の筆者は評してゐるが、かうした諫爭を氣持よく受け入れるほどの雅量を持つたものが、上に立てば、政治、經濟、何でも健實に發展する。

◎

若狹の國主酒井讃岐守忠勝(幕府の老中)は名君言行錄の中に特筆されたほどの賢者で、政治向から私行上のことについて、多くの逸話が傳へられてゐるが、一年、若州が飢饉で、村の小百姓たちの中には一粒の米も取入れることができず、ぼつ〳〵餓死するものも出きかけたので、留守居の家老たちは心配しお倉の救ひ米を出すにしても、何分澤山のことだから、一應は殿にお伺ひしてからでなければなるまいと、早飛脚を江戸に出すと忠勝以ての外と腹を立て

『金銀米穀を常々から貯へてゐるのは何のためだと思ふ。まことに國事を預けておくのも心許ない者ばかりだ。伺ひを立てるにも事にこそよれで、一人でも餓死さしたらその方たちの落度だ』と、自分に筆をとつて嚴しい返事をよこした。

これを逆に行つたら『何故命令を待たず、そのやうなことをしたか』と出るのが頃日官界や民間の會社などによくあつて、折角覇氣ある忠實な若い官吏や社員たちの氣を腐らせてゐるのを往々見受ける。

一つの事に對して、二つの違つた行動が同時に一つの結果を見せることはないのだから、權力を握つてゐるものは、勝手に「結果の評者」となつて、善ければ自分の「腕」とし、惡ければ他人の「責任」に歸するといふこともあり勝なものである。氣儘な主人が女中の料理の鹽加減の辛い水臭いを叱りつけるやうには行かぬことを上に立つものは常に心がけてをるべきである。

若州の場合でも、或は留守居の家老が、罷り違つたら腹切る積りでお倉米を早く出せば、忠勝から、屹度一度は僭越をいつて叱つてからでもほめたであらう。鹽噌奉行の何某が、この頃鹽や味噌を私用に取り遣つてゐるといふ噂が立つたので、忠勝が直々に調べて見ると「味噌の上肌は桶肌の香ひがしていけませぬから、捨てるには勿體なく、仲間のものに取らせ、中のよ

ろしきところを諸士の料理に用ひてをります。かやうなことを私曲と申すのでござりませうか」と眞顏になつて答へたので、忠勝は「さもあらう愈々念を入れてやれ」といつたといふ。鑑みてよい一挿話である。

◎

水戸西山公(光圀)がある日輕卒の一人を呼んでどんなものを平生食つてゐるか聞いて見た。輕卒は毎朝味噌汁を冷飯にかけて食つてをりますと答へると、西山公「味噌汁とはなか〳〵の贅澤ぢや、豆はどこから取り寄せてをる?」「ハイ、毎朝お馬に與へまする豆を一握りづつ取りまして――」西山公思はず失笑して「馬を痩せさすなよ」。

◎

金地院崇傳は天海僧正とともに德川幕府の隱然たる政治勢力であつたことは誰も知つてゐるが、大坂陣にも始終家康の側近にゐて謀事(はかりごと)を練つた參謀でもあつた。その金地院の正月元日の祝ひといふのが大變で、朝は白粥、晩には首取餅と稱へて大きな丸餅に籤を着たまゝの里芋を加へて鹽煮にしたものと、馬の豆を湯出たまゝ食ふ、たゞそれだけだつたのである。その心は陣中の不自由を思ひ出すにあつたらしい。

◎

石炭、瓦斯、電氣の節約、ことしの正月も溫まれまい。暖房など贅澤だよといひながら、年とつた加減に火鉢を抱く。伏見城の留守居日下部兵右衞門定好は、五寸ばかりの煙管を木綿袋の中から出し、反古に包んだ煙草をついでのんだ。火を所望した時、手燭の蠟燭に火をつけて出すと、まだ蠟燭の火で煙草を呑むやうな贅澤をしたことがない、臺所の燒火の燠を下されといつて、蠟燭の火を消さうとした、まアさう御遠慮なさらずにといふと「イヤ〳〵珍客の時に點しなされ」といつた話を讀んで、ひどく感心しながら、私は卷煙草の「光」を一寸吸つたばかりで灰皿の上に燻べてゐた。

◎

年を積んで、小金が溜ると、せめて一代のうちにと、資材が乏しいのを苦勞して文化住宅を建てやうとする。これがインテリ級の一つの樂しみでもあれば一世一代の願望でもあらう。金持とても矢張ソレだ、まことに可愛い話なのだけれど御三家の一、紀州の德川賴宣は立派な人であつたらしいが、隱居所の作事まことに粗末で、繩からげ、手塗の壁、人に語つて「人間は知死期といふことが大切である、六十に餘つて、何程生きようとて萬事の謀事をするか、身の

程を知らず、命のほどを知らず、後人の好むとも定められぬ我が好みの作事に意匠をつくすいはれはない筈。それが分らずして何うして人を知り、人を使ふことができるか」といつた。明記しておいてよい教訓と思ふ。

二、お灸と犬とこしがんだ

＝古い落し咄と運慶作の仁王さん＝

黄門光圀卿の時代であつたか、水戸に犬塚新五郎といふ家臣があつて、上總の田舍から一人の若い召使女を雇ひ入れた。正月元日のことである「これがオラが在所の習慣だ」といつて、丸太ン棒のやうな脛を臺所の爐の前に投げ出し、三里に灸をすへ始めた。無作法なことをする女だと思つたが田舍者のことではあり、來てから間もなし、元日のことだからまア叱らずに置かうと默つて見てゐると、不器用なやつで、火をつけては何度もコロ〳〵と落す。あまり度々やるので、「氣をつけてしつかりすへろ」といふと「この御家中は何でも節儉をして吝いところと聞いて來たが、灸の三つ五つ落したからとて、さほどに言はるゝこともあるまいに」

寛政以前の古い落し咄の一つである。

◎

聖戰は續く。物資需給について一段の緊張を必要とすることはいふまでもない。合理的だからとて、指の先の一もみほどの物資でも、笑つて粗末にはならないのである。ある日にさういふ話から、土井利勝が小姓に預けておいた一尺あまりの絲屑を何年かの後に思ひ出して刀の下緒が解けたとき、それを出せといつたら、小姓がちやんと印籠の中に藏つてゐた昔語りを二三人の子供の前でしてやると、一人の敏捷さうな子供が直ぐに言つた「僕いつも鉛筆の先の削つた粉をしまつてるよ、電池にならんかなア」さうしたら一人が「炭團になるよ」もう一人は「姉ちやんの眉墨にしたらいゝよ、屹度」

◎

戰地に行つて皇軍の將士とともに素晴らしい働きをするセパードの敏俊を愛して、愛飼家が一時何うなるのかと思ふほど殖えたが、元祿享保の時代にも、犬が流行つて、米がなくても犬は減らず、夜ふけてウカ〳〵街を歩いてゐると、八方から吠え集まつて來て、中には咬犬もゐることだし、何うにもならなかつた。犬嫌ひのある男が何とかこれを防ぐ方法がないだらうかと相談すると「あるよ、君、俺もそれに弱つていゝことを考へ出した。犬が吠え出してワン〳〵集まつて來たら、すぐ四ッ這になつて同じやうにワン〳〵やることだ。仲間と思つて皆散るよ」成程と、その翌夜、更けて吉原から辻斬を警戒しながらの歸りがけ、あるところまで來ると犬が寄つて來た。早速四ッ這になつて「ワン、〳〵」群犬は途方もない大きな犬とびつくりして逃げ去つたが、一匹、後ろの方にゐた獰猛なやつがお臀のところに咬みついた、その男思はず「キヤン、〳〵」時勢を思はず、強い信念を持たないものには、かういふ悲劇の喜劇が生くものだ。

◎

京都奈良に、殊に多い寺院に行つてみると運慶湛慶の作になる仁王さんが、野球ボールのやうな目を剝き、瘤だらけの腕を天地にひらき、脚を突張つて山門の兩脇に頑張つてゐる。それへ「願ひごと叶ふ」言ひ傳へから、矢鱈と「しがんだ」を吐きつける。關東の人たちに「しがんだ」は分らないかも知れぬが、鼻紙をクシヤ〳〵にかんで程よく丸くなつた時、息の力を一ぱいにこめて仁王さんの顏、手、腹、脚、病氣があつて治してほしいと思へば、ソコを目がけて吹きつけるのである。仁王さんが潔癖だつたら迚も我慢は出來ない筈だが、そこは慈悲圓滿の佛性、恐ろしい顏をしてゐても堪へてゐる。或日大阪船場のある商家の美しくて若い番頭さんが、臍下何寸のある部に向つてブツと見事に吹きつけてから「あゝしもた、五十錢銀貨一つあいつにやろともて包んどつた」仁王手を動かして身體中の「しがんだ」を小口からひねり出した——。

ふとこんな作り咄を讀んで、嘗てベルリンに行つた時、大戰後始めて開かれた競馬を北海道に勤めてゐるKといふ馬政官と一緒に見に行つて、Kが「馬は分つてゐる」といひ〳〵損を續け、ドイツの元氣なファンたちの多勢も、當らないと見え「お前は何うだ」と損の道連を求めるやうに言ひながらヤケにビールを呷り、だめになつた馬券をパチンと地に投げうつのを、記念のためと拾つて歸つた時の我ながらおかしい光景を思ひ出した。

それから後、ウキーンに行つて五十萬クローネの紙幣を、これも記念のためと一圓か出して求めて歸り、ブックを開けて見る度び、二三十萬兩にならんかなアと、何うもこれはなりさうでない。唯「しがんだ」をひねり出した仁王さんを笑つてはならぬと思ふだけのことである。

三、一襟の浮華、奢りの末路

＝大阪の料理がナゼ發達した？＝一汁一菜談＝

嘗て白河樂翁公（松平定信）が老中となり勤儉の令を布き自ら範を示したとき、江戸の町に、

黒棒が、泥坊どもを逐ひまわし
後に殘るは吝ん坊なり

といふ落首を貼られた。その時だつたか、口の悪い川柳子は、

お妾をとつてのけての御儉約

といつた。全くひどい諷刺でもあり厭味でもある。

口ばかり人にすゝめて團扇かな

今日でも、全くこの時代と同じやうな矛盾が見られぬことはないといふ。乃木大將夫妻の簡素な私生活を敬慕し、二宮尊徳の篤行に感激を新たにして、時艱の嶮路を突破しやうと、眞劍

になつて考へこんでゐる時「君、國家躍進のチャンスは今だといふことを知つとるか」と糟臭い息を吹きかけられたりすると、淺墓なのは人間である「正直だけが馬鹿か」になり易い虞がある。

◎

商都大阪に、昔から小料理屋や飲食店が、まんべんなく散在して、大阪料理と今に東京で評判されるまで、小さつぱりした料理が發達したのは、茶漬か香の物、鰯か河内大根の一菜、主人も御寮人も、大番頭も、丁稚もいつしよになつて箸を取り、一寸商用にと主人だけが外に出て、こつそり小料理屋で、榮養を取り直し、素知らぬ顏をして歸る、次で御寮人がやる、大番頭もやつたのが原因だといふことである。

この手が一國一府縣の政治に携はるほどの人に、影ほどあつても大變である。

政黨華やかなりし頃「待合政治」といふのが能く行はれた。今はもうあるまい。少くも「あるまい」と信じたい。

だが般賑産業の中には、昔に倍したそれがあり、簡單な小商取引まで、盃盤の間に行はれ、當然な習慣だといふ風に說く人があつて、偶々憤慨したりすると「庖厨を小にすれば家產を大にす」といつたのは昔のことで、今は「庖厨を大にすれば家產ます〳〵大なり」の時代だと笑ふ。

時代か、時代か。

何もかも「時代」が負荷して、安心してゐてよいか。政事要略によると「男女道俗美服を着るを禁ずるの事、明かに神護景雲四年格、天暦元年符にあり、而して年紀推移し、人心驕逸となり、上下を辨たず綾羅を以て身の裝ひとなし、正私を論せず、紅紫を以て褻服となし、是に繇うて十家の產も一襟の浮華に盡き、數年の貯も半日の眩耀に糜らす」とあり、嚴しく官民の服制が定められた。本朝文粹にも「京洛浮食の輩、衣服飲食の奢り、賓客饗宴の費へ、日に以て侈糜、紀極知るなし——その源を塞かずして何ぞその俗を救はん。方今高堂連閣、貴賤共にその居を壯にし、麗服美衣、貧富同じくその製を寬かにし、陸海を窮めて珍を盡す、私門に媚を求むるの饋、綾羅を剪ち器を敷く、富者は產業を傾け、貧者は家資を失ふ、而して且つ愁ひ且つ好む」とあつて天下風俗の宜しからざるを誡めてゐる一文がある。

時代か、時代か。時代とは何か。凡てを時代の罪に嫁して、當然の宿命であるかの如く辨ずるのは惡への遁避であり、「頼冠り」である。昔し貞任宗任が謀叛を起したとき、頼義の郎等日置九郎が乘りつけた馬の物の具の華麗なのを見て氣色を損じ、黑革縅の古いのを着けてくるまで何度も換へさせた武人らしい話は、逸話とし殘つてゐるが、遠征の將士を見よ、どこに華麗

があるか、奢侈があるか、一身をさゝげて汗にまみれ、垢によごれ、野に伏し山に寢る、汚水に渴を醫して、それで新東亞建設の最も新しい「時代」を勇敢に突進してゐるではないか。時代をいふなら、正確に「時代」を認識せねばならぬ。いつの時代でも惡いことだけ負はされて、個々人にのみ勝手な「時代」を許してゐることはない。

歴史を見よ、「時代」といふ言葉に正義感を去つての「時代」は昔から一度もあつたことはない筈である。

◎

淀屋辰五郎は何うなつた。茨木幸齋の末路は何うなつた？。紀の國屋文左衛門は？。柳澤吉保は？。大内義隆は？。田沼意次は？。三井淨貞は？。錢屋五兵衛は？。石川六兵衛は？。

その人ひとりの行ひには、藝術の方面から見て面白いと思ふこともあつたらうし、貿易發展の方面、商取引、利潤の方面から見て龜鑑となすに足るやうなこともあつたらう。吉保が甲州の居城に武器を蒐集したからとて、必ずしも家宣に對する隱謀ばかりでなく、治にゐて亂を忘れぬ幕府の首班としてのよい心懸けであつたかも知れぬ。けれど何れも、心の弛みから生じた目にあまる奢侈が、さうした功績に棒を引いた。

◎

新太郎少將と呼ばれた岡山の藩主池田光政は、經世家熊澤蕃山を登用したほどの明主だけに、積極的に殖産の途を計る一方、消費の方面にも細心の注意を拂ひ、食膳に五菜七菜の料理が出ても決して一菜の外は箸をつけなかつた。料理人は心配して「それではこれから一汁一菜に限り御調理申上げませうか」と伺つたが、さうしろとも言はない。

不思議でならぬので「料理が不調法なためでございませうか」と恐る〳〵老臣が聞くと「さうではない。質素儉約を常に奬勵してゐて、いよ〳〵予が一菜に限るといへば家來どもは鹽も舐められまい。予が一菜を限り箸をとるのは、身の奢を慎むために外ならぬ。若し一菜と決めてそれが氣に入らず箸をつけぬやうなことがあれば料理人は氣を採み、果ては一皿に色々なものを盛り上げて出すやうになるだらう、それでは少しも儉約にならぬ、さればこそ一菜に限れとは言はぬのだ」といつた。興亞奉公日に一汁一菜を限るといつて魚肉野菜を山盛にし、分りやせんよとひそかに酒盃を手にする、時局を辨へぬ人たちには、正に頂門の一針である。

◎

家光を輔佐して名大老と呼ばれた松平伊豆守信綱は、年老いての或日、一家のものを悉く呼

び集めておいて、衣服大小、とても異様な贅を盡して正面の座に現はれた。常に質素儉約を喧ましくいふ主人が、思ひも寄らぬ扮裝に、一同は目を剝いて不審したが、信綱はこの時一子甲斐守に向ひ「その方日頃から人のふりを見て我がふりを直すと能く申すが、この父のこのなりを見て何う思うか」といつた。まことに皮肉な痛い意見である。

それから更に苦虫を咬み潰したやうな澁面を作つて見せて「これで人が親しむ氣になるか、慕はしいと思ふか」といつた。甲斐守は默つて頭をさげた。信綱はやがて一同に向ひ「甲斐守の行末、よろしく賴み入る」と、ッと立つた。奢侈禁止に、上に立つもの、人間の感情の至微をこれまでにつかみ得てをれば、どんな示達もよく一般に徹底するだらう。

◎

寛文の頃可笑記といふ假名書の双紙が出版されて評判になつた。時の幕府の役人がこれを手にして、信綱の前へ持出し「この中には幕府のなすことをとやかくと諷刺したものがござります、上の御威光を蔑にすると申すもの、絶版の處分になされては如何」と伺つた。信綱は篤と見て「天下の政治をとやかくと申したといつても道理のあることならば聞いてやつてよい、それが若し言ふものゝ愚なることならば捨てゝおいても一向政道の構ひにはならぬ」と絶版は命

じなかつた。自信が强かつたのである。

◎

文化は都市に發達し、やがてそれが爛熟すると人心が弛緩し、奢侈が生れ、士氣が衰へて、フランスのやうな最期を見ることになる。彦根の藩主井伊直孝は江戸の風俗を慨歎して、連れて行つた家來に見習はせないため、屋敷以外の外出を容易に許さず、人との交際も禁じ、江戸邸には外を見ぬため窓も設けなかつたといふことである。官給のパッカードに乘つたり、輸入のできぬウキスキーを啜つてゐてならぬ理は、かうした古い物語からも見つけられる。

四、天下の法度と煙草

＝上様もごぞんじないおからめし＝

慶長年間に南蠻からはいつて來た煙草が忽ち上下の嗜好に叶ひ、これを吸ふもの著しく、弊害甚しといつて德川家康は元和二年十二月、栽培と賣買を禁止したが、その頃江戸の白木屋ににがしが柳原の土堤を通つてゐたところ飢ゑつかれた乞食が孤の下に隱れ煙草をのんでゐるのを見て、これではいかに嚴しい禁令が出ても、食に飢ゑてゐながらなほ喫煙をしてゐるやうではとても長くすたるものではないと、江戸から京大阪に捨てものにされた煙管、煙具を買ひあつめ土藏に藏つておいたところ、果して間もなく禁令が解かれ、一時にこれを賣り出して巨富を得た、現在の白木屋の祖だといふことが翁草といふ隨筆に出てゐる。寛永年間三代將軍家光の時代にもあまり煙草の流行が甚しくて、上田を潰し煙草の苗を植ゑるものが多く自然米作にも影響し、入らざる天下の費へと、禁制になつたが、ある日老中の土井大炊頭利勝が出仕して將軍の前へ出るためお次の間まで通ると近侍のものがひそかに煙草をくゆらしてゐた、周章て袂に隱したが臭い煙が立ちこめてゐる。利勝はさり氣ない體でその近侍に「煙草をのんでゐられたさうだな、イヤ俺もこれが好で辛抱がならぬ、一服所望いたしたい」といつた。近侍は赤面しながら袂の中から煙草入れと煙管を出した。利勝はそれを取つて靜かに一服吸ひおはり「御禁制になつてゐるものを、かう御城内から犯しては天下の規律が立ち憎い、あゝ申譯のないことをいたした、穴賢々々、向後はお互に屹度慎しみませうぞ」といつて座を立つた。これがためその後城中で禁を破るやうなものは一人もなかつた、といふ話である。

さすがに名老中といはれた大炊頭のやり方、政治はかういふ心持がいつの世でも必要であらうし、またこれを傳へる心持も、よくその心持を傳へるだけの心構へが必要であらうと思ふ。

◎

家康の眼は鷹狩に馴らされた鷹のやうに鋭かつた。駿府宮ケ崎の町人瀧善右衛門といふのが才あつて口がうまく、時々眞面目な顏をして剽輕なことをいふので、よく碁の相手に呼ばれた。ある日家康は、鷹狩に出た途次（みちすがら）、善右衛門の家の前を通つたので、ツカ〳〵と內に入り、『供をしろ、けふはしつかり獲物があるぞ』といつた。その時善右衛門一家は、揃つて飯をくつ

てゐたが、びつくりして膳をしまひ、早速供に加はつた。

そのあくるひ、碁の相手に出ると『きさまは、やがて家の相續もできなくなるぞ』と家康はむづかしい顔をして叱りつけるやうにいつた。

『それはまた、何ういふことでござりませう』と恐る〳〵聞くと『きさまらの分際で家内揃つて白米の飯を食つてゐるとは大變な心得違ひ、とてもソレでは相續できぬ』といふのである。

痛いところを刺されて善右衛門、一度は赤くなつたが、早速答へた『さすがは上つ方、私ども下素のものゝ食物は御存知ござりませぬ、昨日計らずお目にとまりし飯は豆腐滓を米に混ぜて炊いたおからめしと申すもので、そのため一入白く見えたのでござりませう』まんまと言ひ紛らされた家康は『それならよい』と面色も和らぎ、いつもの通り碁の相手をさした。

善右衛門は家に歸つて、勿體なくも上さまを欺き恐入つた次第である。これからは此の言違へてはならぬと、必ず豆腐滓を飯にまぜて炊くやうにし、子孫へもこの掟を守るように、言ひのこしたといふことである。

◎

外米、糯米のカクテル、食へたものでないと、八方に手を廻し、純日本米を探し求めて、それを自慢に食つてゐた戰時國策への反逆者に、善右衛門だけの反省力があれば、お米の飢饉も事なく濟まう。

だが、これもお米のことばかりではない。

◎

前田利常が加賀小松の城にゐた時分、郡宰井上左京をつれて、領内の田面視察に出かけた。その時左京が、次々に田面を指して「これは上田でござります」「これは中田でござります」「これは下田でござります」といつた。利常が「何うしてソレが分るか」と聞くと「土を舐めて見まするに上田は甘く、中田は酸く、下田は苦うございます」と答へた。利常は代官の苦勞も一通りでないと感心したが、その時騎馬の足音が上田、中田、下田によつて違うことを知得したと見えて、後日再び檢分に出かけた時、利常のいふ處少しも違はず左京はびつくりして貢米の徵納を一層正しくしたといふことである。農林省で米の需給を考へてゐる若い官僚に聞かしてあげたい話である。

◎

子供の時分、田舍にゐて、村の鎭守にお參りをする時には、母が米櫃から淸らかな一握りの

米を出してくれた。それを神前にバラリと蒔くと、杜の中から小雀が飛んで來て啄む。「神さまが小鳥になつて食べられる」と、とても嬉しいものだつた。今はお賽錢を白衣の祠官が箒でかき集めて社務所へ持ちこみ、お札にも價をつけて、大きいほど高いのが、誰も怪まぬ通例になつてゐる。お寺さんでも、その通り。これで厚い信仰がわきさへすればよいけれど——と田舍育ちの私は思ふ。この年になつて、まだ思ふ。

五、武將と蝸牛と酒と

＝遁げ腰政治＝彈丸も通らぬ兜＝心得ぬこと＝

大江元就が毎年元旦になると早く起きて、清めの手水をつかい、東方に向つて暫らくじつと默座してゐた。一晌ばかり經つてから近習の粟屋彌次郎といふ美少年が靜かに傍によつて「元日の御祝儀の用意が整ひましてござります、お召上り下さいますやうに」と慇懃にいふが、返事がない。それから又暫らくして同じやうにいつて見るが、矢張り默座してゐる。

四度目になつて元就、やつと座を起ちて「彌次郎、そちは元日の御祝儀を幾度も知らせに來たが、その御祝儀といふことを知つてゐるか」だしぬけての尋ねである。彌次郎返答に困つて、たゞ謹んで俯向いてゐると、元就は嚴肅な聲で「世間の者は惠方を拜し、昆布かち栗を取り、屠蘇を汲んで壽命長久、子孫無事、商賣繁昌と祈願し、雜煮を食う外に深い思慮はない樣であるが、予の志すところは、元旦は年の始め、月の始め、日の始めであるから、寅の一點より起

き出でゝ一年中の工夫をする。例へば去年のことから今年のことを考へて、東國は豐作であつたが西國は旱魃で誰もが米の問題に頭を惱ましてゐる、萬一不慮に兵亂が起つた時、糧米を事缺かぬやうにするには何うしたらよいか、武器馬具は滯りなく揃つてゐるか、農民たちは高い年貢に困つてゐるやうなことはないか、今年の取立を何ういふ風にするか、代官に何といふ命令を出すか、困窮の難民をいかにして救ふか、さういふことを能く〳〵考へてから、神明の前に、儉を守り、身を堅固に持し、家臣を勞り、誡しめんことを誓ひ、國家の安全を祈る。これが予の元旦の祝儀だ」といつて開かせた(栄根百事談)。

名將といはれた程の人の言行は、今日のこされてゐる史乘において、恐らく一つも誦するに足らぬものはないであらう。

殊に、好んで隨筆の筆をとり、裏から、横から、人間を描かうとした儒者も、國學者も、戲作者も、德川期の儒教精神を、決して踏み外すやうなことはなく、殊に上を尙ぶことによつて下を愛する善政の鑑ともしやうと謀つて書いたのだから、登場の名將、實際以上にエラい、賢い、完全無缺に近い人にもされてはゐるが、しかし表面だけのことにもしろ、善言善行の記錄は、たとへ時代が隔り、時勢の違ふ今日においても、讀んで決して惡い心持のするものではない。そしてこれが實行に移せるものなら移して見たいといふ氣にもなる。

◎

「天下國家を治める人、とかくに身を入れぬ故に善きもできず、それと申すも、仕損じ候時逃れんとすること先になり候故に候、愚意に、事を成す時深く入るべきことゝ存じ候、此の事の成ると成らざるとは、識を以て斷じ申候、見切申し候てズッと深入り致し、四方八面みな押し放し、獨立致すべく候はゞ、大事はなし難からまじく候、兵法の死地に入るの論、治道にも用ゆべきやに存候、好きことの妨げは、半途にして止まるにあり候」

これは、安中侯板倉伊豫守(白雲)が幕府の儒官林大學頭(墨水)に向つて尋ねた政治の要諦についての一節である。讀んでゐると、何だか今日の政治家や官僚の一部、銀行、會社あたりの責任を持つてゐる人々の仕事振を昔に批評し、皮肉つてゐるやうにも思はれる。

これに對して墨水が答へたのは「これは英雄偉男子のするところにして、庸常人のなし得ざるところに候、何事もかくあつては成らぬことはなき理に候、今より見れば成し難きことを能く成し終せたるやうに見ゆるも、多く候、今人は成し易きこと皆成し得ず、若し成す時は仕損じ候、成事多きも皆身をはめて成すと遁げ足ながら成すとの差より起ること高見の如くに候、

識を以て斷ずるに至りては天禀と學力の二つの外これなく候、己の禀賦を頼まずして學を勵むこそ識見を厚くし大事を成すの基なるべけれ」

末節、いかにも學者らしい言ひ分であるが、これも今の時代を言つてゐると思はれぬこともないやうである。勇氣の缺乏、遁げ足政治、遁げ足事業――國民はどこへも遁げては行けず、善い政治を望むことは、善い政治をしやうといふことを望むものよりも一層切實であることを思はねばならぬ。

◎

蝸牛をすり潰して糊となし、紙を幾枚もいためて、この糊で張り重ねたものを鎧の胴にすれば矢も通らず、銃丸も通らぬといふことが或る書物に書いてあつた。大阪陣豐臣方の花形武者木村重成の兜に、銃丸が二つも當つて、鉛が柿の蔕(へた)のやうにヘシヤゲて止つてゐた時代のことだからチェッコの機銃が唸る戰線で役立つとは考へられぬが、通を誇る洋食堂あたりで「乙だよ」などいつて二本爪の長いホークで引張り出して珍料理として味はつてゐるよりは確かに軍國的だらう。武備においてあらゆる大名とひけを取らず老中の模範といはれた彦根の井伊掃部頭直孝は、無暗に飾り立てゝゐる誰かの城を見て「いざ戰場といふ時、馬のやうに、あの城に

跨つては出かけられまいに」といつたさうだ。わが蝸牛は、二刀をふり〳〵家をかついでどこまでも行く武將である。たしかに銃丸よけの胴着になつてくれさうでもある。

◎

前九年の役は長かつた。頼朝も奥州の習俗に馴れて、鎌倉ッ兒でなくなりかけた。そこで川柳子は、

もう歸るべいと頼朝御凱陣

後三年の役は、九年の三分の一でも、短かいとはいはれぬ。

雜兵はまた來ましたと後三年

長征の勞苦は、このユーモアに富んだ句の中にも悲壯な感じが滲み出てゐる。深く思ふべきである。

武將としての典型的な伊達政宗が入洛のとき、田舍々々した風貌におかしみを感じた公卿衆が櫻花一枝を手折つて政宗に示し、一句を、と望むと、

大宮人梅にも懲りず櫻かな

これには公卿衆も驚いて政宗の武將としてのエラさと、文雅のたしなみあるを知つて輕侮の

念を去つたといふことである。

眞の武人は、眞の文事を知るが、とかく文人は眞の武を知らぬ。雪片を拾つて和蘭舶來の顯微鏡で一々これを覗き美しい六片のいろ〳〵な結晶體を繪師に描かせ板におこして配つたのは土井大炊頭ではなかつたか。

◎

「一、酒茶買呑み申間敷候、妻子同然のこと」慶安御觸書の中にこの一項がある。昭和十四年の早魃から飯米配給の安全を期するため節米をして、造酒は夥しい減石になつた。或夜深更、愛酒黨が二人が押しかけて來た、酒の本場の西宮にゐて、馳走は何より酒であつたが、今ではさうは行かない。でも愛酒黨は潤澤時代を思つてゐる。呑まぬ私だが氣はついて「さア燗をしろ」と元氣よく喚いた。女中と嫁が笑つて臺所の角から手をふる、忍び足に覗ひよつて見ると一升瓶の底に二寸ばかりしかない。そこで「それでもいゝよ、時遲く、店は皆しめてゐる、あるだけだ」さういつて、客に譯を話した「當り前さ」ソコで燗瓶二本に溫めて、半分ばかり呑んだところへ、何としたことか又二人、ハイキングの歸りで遲くなつたと押かけて來た。「隱せ〳〵」あたら燗をしてまだ幾らか殘つてゐるのを引こめしまつた。いよ〳〵無いとなると、かういふ喜劇も生れるのである。

「呑む」といふことについて何かしつかりした規準が定まらぬと、今年もまた隨分な場面が出來ると思ふ。

◎

大正の末年ドイツへ行つた時ベルリンで「警察展覽會」といふのが開かれてゐた。いろ〳〵な犯罪に供した材料や寫眞が恐ろしいほど澤山陳列してあつたが、その中に酒の密造や密輸に關するものが相當澤山あつたのを戰慄しながらも興味深く見たことであつた。一つは床屋の模型であつたが、頭を洗ふ洗面器の一つのカランをひねるとソコから酒がサツと流れる、壁の後ろが大きな酒の貯藏甕なのである。

日本の電信柱の太さで五メートルばかりの材木が轉がしてあつた。二つに割つた中は空筒でウキスキーの瓶が一ぱい詰つてゐたのである。それを筏に組んで海を流して來たものだといふやうな說明がついてゐた。

携帶用タイプライターがおいてある、開けて見るとこれもウキスキーの瓶が二本チヤンと並んでゐる。ドライのアメリカで左黨の無邪氣なおつさんがこんなものを白晝提げてニューヨー

クの街を濶歩してゐたのである。

チと太過ると思ふやうなステツキがある、握りのところを廻すとソコが呑口で、長い杖身は酒をのんで一ぱいなのだ。

何とでも智恵の出るものと、とてもおかしくなつた。

横の方に祕密室があつて、新聞記者とドクトルに限り見せることになつてゐた。這入つて見ると淫賣婦と、酒と、痴情からの犯罪資料で一ぱいであつた。その物凄さは、勿論筆にすることもできず、人間の世界といふものはこれほどひどいものかと呆れさせた。

◎

アメリカへ行つたら、巡禮者は必ず行くナイヤガラの瀑布見物に行つた。その瀧の上の落口に一隻の大きなガソリンボートが岩に引かゝつて横倒しになつたまゝブカ〳〵浮いてゐた。私の行つた時はまだドライが解けてゐなかつたが、ツマリ加奈陀から酒を密輸入のボートが、慌てゝ、暗に針路を誤まり、そんなところへ漕いで顚覆してしまつたのである。犯人は遁げたが、ボートは見せしめのためいつまでもそのまゝにしておいてあるのであつた。

ニューヨークの街に行つて見ると、酒は高いだけで、いくらでも呑める狀態だつた。

◎

兼好法師は「世には心得ぬことの多きなり、友ある毎には先づ酒をすゝめて、强ひ呑せたるを興とすること、いかなる故とも心得ず」といつた。酒を嗜まぬものはいつもこの感じをもつてゐる。蜀山人は「樂しみ悲しみ往きかふとも天さへ醉へる花の朝、あたまもふらつく月の夕、雨の降る日も雪の夜も日々醉て泥の如く一年三百六十五日一日も此君なかるべけんや」といつた、左黨の盟主にしておけばよいかも知れない。「世のうさも忘るゝ酒に醉ひしれて身の憂へそふ人もありけり」の蘆菴はさすがに眞面目である。

要は、酒も家庭を出ぬところに眞の悅樂があるのではないか。そして大した罪もつくらず、酒なき世など思ふこともないのではないか。

六、老人の世界、若い者の世界

＝獨逸の總統ヒットラーの飛躍＝

尾張黄門吉通は、まだ年の若い頃であつたが、先代の遺訓による質素儉約の掟を破らないやうと、家老たちを集めていろ〳〵評議をさせた時に、輕卒どもの中で「年を取つた者は格別のお役にも立たず、言はゞ飼ひ殺しにも均しい無用のものだから、數も二百名ばかりあつて少くはなし、これに暇をやつたのが一番よからう」といふことに決めると吉通はびつくりして「たとへ輕卒の輩であつても先代から眞面目に勤めて、それ〴〵功勞のあつたものではないか、人の壯なる間だけ勝手に使つて、年をとつたら暇をやる、そんな無慈悲をしてよいと思ふか、尾張藩六十萬石の身上でさへソレが持ちかねるといつて、いろ〳〵節約の方法に首をひねつてゐるのに、僅かな扶持で勤めて來たものが、今浪人になつて、何うして妻子が養へるか、老後の用意など出來てゐるものは一人もない。殊にまた、年を取つたから役に立たぬといふやうなものを先代が抱えられたといふことになれば、自分の代になつて先代の不明を世間に告げ、先代に恥をかゝせるやうなものだ。若い内ならともかくも、年取つてから浪人しては、誰も抱へてくれるものがあるまい。藩の財政がそれで樂になるといふて、言はゞ一人の安樂が何百人、何千人の難儀となる。凡そこれほどの不仁はあるまい。輕輩の者ほど實はお家のため眞正直に働いて來たのである。重立つた皆の者の評議の結果ではあらうが、これだけは考へ直してくれ、敷居があつてこそ鴨居も役に立つて戸の開け閉めが出來る」といつたので家老どもゝ涙を流して首切帳に棒を引いたといふ話である。

◎

時代は進む。若いものでなければ新らしい時代の正しい解釋はできず、また何日までも老人が上位の椅子に頑張つてゐては、若いものゝうだつが上らず、折角の新智識、新手腕も施しやうがないといふ譯で、官界ばかりでなく實業界にも、新陳代謝を條文によつて劃する停年制が出來、それで國運は三段跳のやうにピョン〳〵跳ね上つて行く筈であつたが、經驗は書籍や試驗管の中から生れる結論ほど安價なものでなく、歴史は一日にして成るものでないといふことが、複雜を極める現下の狀勢から、ぼつ〳〵分り出して來て、壯者尊重の一面に老者重用の一

面が芽を吹いて來たのは、さても移り變りの激しい世の中ではある。武田勝頼沒落のみぎり、陣中食給せず、幾度となく杉菜飯を食つたといふ眞田伊豆守信幸の、若い家臣への述懐も、老人の愚痴や自慢ではなく、家康が鷹野に出て、麥の穗が右向きによれてゐるのは豐年の兆だといつたのも、一年二年の經驗をしやれにいつたのではなかつた。爰で言ひたいことがある——。

◎

張子の虎でも踏みにぢるやうな勢ひでヒツトラー獨總統は英佛聯合軍を滅茶々々に擊破し、フランスを完全に屈服せしめた。これについて、軍事以外に、我々は教へられることが極めて多い。昂奮狀態で感情的に快哉を叫ぶまでに、我々は先づ小さく自分たちの身邊を顧みて、靜思しなければならないだらう。

危險千萬、眞の萬死に一生を賭した落下傘部隊を最初に活用したり、不落を誇る堅塞を素晴らしい祕密の新武器でアツといふまに叩き潰したり、意外な戰地ニユースを間斷なく齎らされて、而かもそれが試驗的な暴擧といふのではなく、どこまでも底力のある、持續的生命をもつた、周到な計畫の下になされたことであるのを、戰局の進むにつれて段々强く認識しなければならぬやうになつてから、世界中の、どんなエラいものも、驚歎の眼をみはらずにはゐられなかつた。

だが、決して一日にしてヒツトラーは奇蹟的な力を得たものでない。一九一九年「七人黨」として南獨の一都市ミユンヘンに發生したナチスが、グン〳〵その勢力を擴げて今日になる道程には色々派生的な障碍の多かつたのは勿論だが、よくこれを排除して一本道を直進して來たヒツトラーには、何ものにも搖がされない「信念」が巖のやうに胸中に抱かれてゐたのだ。

あれだけ痛めつけられた全ドイツを背負つて起つて、よく今日聯合軍をあれまでに手際よく叩きつける軍備を何うして整へたか?。武器の問題の外に、國內の政治、經濟、想像以上の困難があつたのを、グン〳〵處理して來たヒツトラーの手腕は大奈翁を三倍にしても追つくことではあるまい。チエツコの問題が片付き、オーストリヤの問題が片付き、ポーランドの問題が片づいてからデンマークが一ペンに降り、ノールエーが怪しくなつても、まだ世界は——少くとも英佛は今日のドイツを想像しないほど、ドイツの大戰後二十餘年間に養はれた本當の力を窺ひ知らずにゐた。

ヒツトラーは政治、經濟、軍事、殊に戰略において、飛躍的な新基礎の下に凡てを進めたかのやうに見えてゐるが、過る第一次大戰の苦い經驗が、根本基礎となつて、その缺陷をいやと

いふ程知りぬいてから、新らしい第一歩を進めたのである。聯合軍は第一次大戰の勝利の跡に基礎を置いて、そのまゝ軍備を進めたが、ヒツトラーは敗戰の跡に基礎を置いた。こゝに聯合軍と獨軍との軍備進行の道筋と進行の程度が丸で違つてしまつた。

一は缺陷を塞いでから新らしい道を擇んで飛躍し、一は滿足感に基礎を置いて、舊態のまゝ古い道を進んで來た。一旦それがブツツかつて古いものが新らしい力に敗け瓦壞するのは自然の理であつた。

◎

經驗のないものに小型の旋盤一つ當がつたとて釘一本削れるものではない、若しヒツトラーにして前大戰の體驗がなく、學校を出たばかりの青年で、一旦の理想に燃えてナチを組織し雄たけびを擧げたゞけのものであつたら、いかに奇蹟が生れ、運命の神が氣まぐれな采配をふつたとて、今日の如き英雄的な一國の指揮者になり得ることはなかつたであらう。

經驗は、これに安んずることによつてその進路が阻まれ、その長短を不斷に反省しながら新らしく活かすことによつて更に新らしい進路が開けて行く。日本の古い諺に「傲るもの久しからず」といふのがあるが決して「傲る」ことばかりでなく「經驗に安ずる」「經驗以上に出ることを考慮しない」ことも「傲る」のと、精神においては同じである。英佛は前大戰の勝利に「傲り」且つ「前大戰の經驗に安んじ」てゐた。そのため、苦い經驗から復讐心に燃え切つてゐるヒツトラーに、見事叩きつけられてしまつたのである。

◎

かうした世界的な出來事を、一身一家の上に引當てゝ考へて見ることは、時局柄、殊に大切なことであらうと思ふ。新らしい時代に生れて、古い時代を知らず、新らしい時代の浮薄な、享樂的な部分のみを、我世と心得、歴史に讀み、長老に聞く昔語りを陳腐とのみ嘲笑して、何の經驗もない基礎の上に生々しい理想の樓閣を築き、飜譯思想の肉臭を知らずして唯一無上のものゝやうに妄信し、それ以上の生活は——文化はないものだと思つてゐた青年たちは、今こそほんたうに、靜かにヒツトラーが何故歐洲の檜舞臺に躍り出して光榮に滿ちた歡呼喝采を博してゐるかを知るべきである。「苦しみ」を知らず經驗を尙ばずして光榮など、どこにも決してあることはない。

七、理想と實際の喰ひ違ひ

＝相貌によつて知る人の性格＝

ある小さな工業に關して、試練的な一つの體驗を嚴肅に持つて見なければならぬ機會が與へられた。それは私にとつて決して幸福なことではなかつたが、結果においては必ずしも不幸でなかつた。謎のやうな言葉ではあるが、この押し迫つた重大時局に、想像以上青年の氣持が引き締つてをらず、何もかもが、當の本人にあたりまへのことゝして、一向自覺のない間に、放漫へ放縱へと流れ〳〵てゐることであつた。

◎

指導精神といふことを能く云はれるが、指導をしようとする舊人の精神と、指導をうける新人の精神の基調をなすものに、根本的なといふほどでなくとも、大きな喰違ひがあれば、いくら指導者が頑張つても、新人の頭の中へハツキリとは浸みこまない、これほど眞劍になつてゐるのに、ナゼ何所にどんな不都合があるのかと、譯分らぬ不平が持たれるだけのことで、その又不平は精神の基調に喰ひ違ひのある舊人には一向解せないといふことになるのである。

◎

これを單なる新舊思想の衝突と見て、時代だから〳〵と新人にのみ多くのものが手を擧げるやうになつては、まさに思想の破綻であり、經濟の破綻であり、生活の破綻であらうと思ふ。舊人には經驗が生命であり、新人には時代の直觀が生命であるかも知れず、その何れもが各々にとつては大切であらうけれども、新らしい時代は舊人の經驗が洗練されて生み出されたものであり新人が突如として茲に產み出したものでは斷じてない。されば舊人が新人の新らしい意見を聞く必要以上、新人は舊人の貴い經驗を敬虔な氣持でもつて聞かねばならぬ筈である。

◎

新人は組織を愛し組織を好み組織を歡ぶが如くに見えて、ある場合、ある場合、どうもその組織に綿密な科學的根據を持つてゐない場合が多い。理想をひたすら貴いもの〻やうにいつて組織に權威づけやうとしたりするけれど、第一經驗に年月の乏しさがある悲しさには、せつかくの理想の足許が、霧でも踏んでゐるやうな危なつかしいもので、經驗に富むもの〻目からは

全く見てゐられぬ他愛のないものであり、惡くすると、理想の文字に誤られて、自らを誤まり、人を誤まる。

◎

新人が新らしい佳い言葉、優美な言葉、藝術的な言葉で說くものだから、スツカリさうかと思つてゐたら、それは大きな錯誤であつて、彼等の言葉は唯言葉だけのものであり、事實は全く目を掩ひたいほどの放漫であり放逸であつた。これが實業の世界、殊に實質的な工業の世界となると、どうにもかうにもならないのである。

◎

謎のやうな話を續ける。「顏は心の鏡」とはよく言ふことだが、顏の調子ばかりで、人の心の奥底がハツキリ分りかねる場合が多いため、口を衝いて出る言葉の調子と併せ稽え、人の善否を判斷するやうな習慣をつけられてゐた。大方の人はさうだらうと思ふ。だが、矢張り、どのやうにも捻ぢ廻すことのできる言葉の調子には危險が多く、言葉は顏ほど質のよい鏡でないことが六十餘年の經驗で、ハツキリ分つて來たやうな氣がする。

◎

唐の白樂天が長安の都にゐた宮廷の繪かきである李放に始めて自分の肖像を描かしめたとき、つく〴〵その相の貧弱なのを見て、今は君寵を得て宮廷にあるが、この相ではやがて災禍を蒙る、早く官を罷めて田舍に歸り餘生を養はうといつた意味の詩を讀んでゐるが、朝な〳〵鏡面に映る自分の顏を見て、自分の持つてゐる運命と心靜かに照合して見ると、矢張り何うも顏は心の鏡であると同時に、自分の一生の運命を隱しもなく表現してゐるものと泌々思ふ。

◎

恐ろしい惡相な俳優はなく、恐ろしく曲りくねつた鼻を持ち目を持つ歌妓はないものだ。美人に生れたがために薄命だと、昔からよくこの種の女をいふけれど、薄命か薄命でないかは別として、美人なるが故に衆人を樂しましめる歌妓になる宿命を持つてゐたのだと言はれぬこともない。だが――職業が人の相貌を變へて行くのではなく職業が心理狀態にいろ〳〵な影響を與へるため、心の鏡の相貌が變ると見るが本當だらう。

◎

勿論偶にはこの例外もある、貴族のやうな上品らしい相貌をしたものが、案外さうでなかつ

たり、恐ろしく獰猛な顔をしてゐる人がとても優しい溫和な仁慈に富んだ人であつたりして、意外の感に打たれることはよくある。忍辱を生命の緇衣の人にナゼかと思ふほど恐ろしい顔をしてゐるのをよく見るが、不動明王や、仁王さんを見ろでは、一寸解決のできぬ不思議である。これは或は職業が必ずしも人の相貌を變へるものでないといふ說明かも知れぬ。

◎

人を見て法を說けといふ。相貌によつてその人の持つ缺點を觀破せよといふことだらう、こゝにも人の相貌は人の心を映してゐるといふ長い經驗から生れた俚諺が存在してゐるやうだ。若し以上のことが大した誤りでないとするなら、私たちは人相見になるのでなくて、今少し眞劍に、綿密に、合理的、科學的、而して直覺的に、人の相貌によつて、その人の人爲を判斷する經驗と習慣を積まねばならぬ。

それがだん〳〵精妙に出來るやうになつて來たら、人から僞を持ちこまれることもなく、持ちこまれてもこれに惑はされることはない筈である。廣い社會に起るいろ〳〵の暗い事實は、多く人を見るの明なき點に發足するか、若くば人を見るの明なき虛につけ入る惡から發足して、だん〳〵それに根が生へ枝を張るためである。

◎

柔道五段の猛者があつて、ある相當な事業をやつてゐる。十年からの愛撫で信任しきつてゐた若者が、酒と女のため、それを裏切るやうなことをした。腹が立つて堪らず、實否を糺すまでに背負投げで三べん投げて横面を三つ張つたら、平蜘蛛のやうになつて謝まり、萬事を告白した、痛快だつたといつて來た。家庭の武力解決といふやつである。慈悲忍辱では「信仰心」のない今の若者はだめですよとエライ見幕。さうかも知れぬ。

◎

それにて思ひ合はすのは、名奉行大岡越前守が、算術の名人といはれた野田文藏といふのを呼出して、勘定役を命ずるため口答試問をやり『百を二つに割ればいくつになるか』と聞いた。文藏は算盤を乞うて法に二、實に一と置き『二一天作の五で五十宛に相成ります』と答へた。名人は易いからとて輕忽にせぬと直ちに支配勘定にしたといふ話がある。人を用ゆるまでの一つの面白い試みでもある。

八、防空隨筆　我に劔あり、魂あり

滿を持してゐたヒツトラー總統が、『今日初まつた戰鬪はドイツの運命を一千年に亙つて決するものだ。英佛はバルカン方面に注意を集中せしめながら、ベルギー、オランダを通つてルール地方に侵入せんとしてをる。三百年來英佛の目的はドイツを包圍せんとするにあつた。今や問題は「死」か「生」かにある。西部戰線の將兵よ、決戰の時は遂に來た、汝等の義務を盡せ』と悲壯な叫びをあげてから、オランダを降し、ベルギーを蹂躙し、フランスを叩きつけるまでの早業は目にも止まらぬ早さであつた。

◎

去年植木市で買つて植えこんで置いた一年藤は、友達のWが「何うも冬は越し憎いぞ」といつたに拘らず、よく根を下して、スル〳〵と伸びあがり、あらかじめ造つて置いた藤の棚に、髯のやうな細い蔓をいくつも〳〵からみつかせた。伸びて伸びゆく姿が思ひなしか、ドイツの

戰線のやうにキビ〳〵してゐる。これがもう一年もしたら、立派な防空施設の一つになるなど思ふのも、時なればこそであらう。非情の草木にしろ、生ひ立つて行く姿は貴くも勇ましいものである。今日本は、東亞の廣い新天地に、數千年の歴史の、強い翼を張らうとしてゐる。その姿が貴くも勇ましいものでなくて何であらう。

◎

ヒツトラーは「ドイツ國民の死か生かの問題だ、ドイツの運命を一千年に亙つて決する」と叫んだ。だが日本は、東亞の新建設、民族の福祉と、永遠の平和のために、鉾をとつて起つてゐる。齎らすところの一時の戰禍が彼に大にして、我には小さく、しかもその目的は、我に大にして、彼には小さいともいひ得る。歴史に輝きのある我が帝國に、生を享けたものゝ光榮を今更のやうに感ずる――。

かうした感慨に耽つてゐる間にもロンドンはドイツ空軍の大編隊に、夜毎日毎爆擊されて、殆ど荒廢に歸せんとしてゐる。サーペンテインの澄んだ流れに愛のさゝやきを交した若い同士も別れ〳〵になつて、防空壕の中に慄えてゐるのだ。ハイド・パークのビクトリヤ女王記念碑の周圍に刻みつけた世界の藝術家の像がいつ大理石のかけらになつて飛び散るか――。もう宮

殿には穴が明いた。十三世紀にヘンリー三世によつて再建されたウエストミンスターアツベイの藝術的なステンドグラスが粉な〳〵になつたといふことよりも、エドワード、ゼ、コンフエツサー王以下歴代の王以下の墳墓は何うなつたか。幕末前後から日本特有の漆器、陶器、彫刻物、繪畫の類を腹の立つほど揃へてこれ見よとばかり陳列してゐた大英博物館も爆撃された。買物に行つて日本人と見れば碧い眼でにらみつけてゐた大通りの百貨店も崩れたといふ。それでも映畫がありダンスがあるといふニユースに、驚くよりも呆れてしまう。だが私たちも聖戰のさなか、銃後の守りの大切な今日の、銀座を思ひ、京極を思ひ、道頓堀を思ひ、元町を思ひ、大連、奉天を思つて「矢張り、さうもあらうか」と首領く。心せねばならぬことだ。

◎

それにしても飛行機の威力は、僅か三十年あまりの間に、めざましく發達したものである。大正三年、第一次世界大戰のとき、青島攻圍戰に從軍して、彼我空軍の實戰を初めて目にした時には、これによつて戰ひの運命を決する、といふやうな感じは全く抱いてゐなかつた。獨軍は鷲のやうな姿をしたルンプラー二機、日本は、今日に比べると蝶の飛んでもゐさうな、輕やかなフアルマンと、快速といはれた白鳩のやうなニユーポール。空中に擊ち合ふ玉の光りが流星のやうに見えて、まだ宙返りもなく、二三度舞ふて上下すれば、さつと分れた。五メートルも風が吹いてをれば樂には飛べず、その翌年であつたか、名古屋で大演習が行はれた時、一機がふうわりと小松林の枝の上に降りて、それで小松も折れず、飛行將校も傷かず、新聞の號外を賑はしたゞけのやうなこともあつた。

◎

もつと前の明治四十四年三月には、米人のマースが朝日新聞の招聘をうけて、大阪城東練兵場で、十分間ばかり飛んで見せたが、その時の飛行機の馬力が四十馬力で二三メートルの微風が吹いてゐたが、練兵場の西北隅に惡氣流があるといふやうなことをいつて、翼を二三度ゆさぶつて、數十萬の見物人の心膽を寒からしめた。この十分間の飛行記事を、新聞四頁にぎつしり詰めて、埋めなければならなかつた苦しみは、今に忘れない。

その後武石浩玻君がアメリカから歸つて來て、鳴尾から京都まで、四十キロばかり飛ぶのに「都市聯絡大飛行」——と。創造期といふものは、本當に可愛らしいものである。

その頃は、勿論、飛行機はたゞ偵察用として、その任務に主要目的がおかれてゐたのであつて、青島戰の時にも爆擊に用ひられはしたが、投彈裝置など、極めて初歩のものであつた。

急激にそれが發達したのは、第一次歐洲戰のためである。隨つて防空についての用意、施設、深刻な研究も始められて來た。

◎

私は今でも、よく悔ゆることであるが、八年前、小さな家を建てる時には、防空についての觀念が缺けてゐたゝめ、通風のことばかり念頭において「煙の都に息ついてゐるのだから、切めて家庭に歸つてからは、眠つてゐても、清澄な空氣を吸ふていくらかでも健康である快適な生活ができるやうに」と、無暗に窓をつくり、壁面を可能なだけ省いてしまつた。

ところが、この時代になつて、しば〳〵防空訓練が行はれる。その主旨に忠實に從ふやうにと、眞劍に心がけると、上中下三段になつてゐる家の周圍の窓を、屋内燈火の完全に遮斷されるやう、其都度工夫することは、容易ならぬ苦心である。二重の黑布を窓毎にかければ、それでよいことは知つてゐるが、常の日に黑布の目につくのは好い感じでなく、またこれほど物資の乏しい、纖維製品の高價な時に、時たま使ふ窓掛を作つておくのも、贅澤なやうに思はれ、ツイ古新聞を合はして張りつけたり、戸の隙目に目張りをしたりして、急場を凌ぐ。いざとなれば小さな家庭のことだ、工場とは違ふ、のう〳〵火をつけてもゐられまいからと、自問自答で過ぎて行く。建築の當初に、防空についての經驗があり、觀念があつたら、恐らく樣式も變つてゐたであらうに、大戰後歐米を一巡しながら、そんなことにはちつとも氣をつけて來なかつた私を、ひそかに悔む外はない。

空襲となれば、高射砲火を避けるため、自然高度もとられて、外れ彈丸がないとはいはれないし、況して不案内の上空へ外敵が來るのだから、たとへ郊外のまばらな家建ちの中に住つてゐるのであつても、地下壕の一つ位はと、冷藏庫をかねて、床下に通ずる穴を手掘りにして見たがどうやらこれは成功のやうである。燒夷彈に對する小砂の用意も、郊外なれば、石炭箱に三ばい五はい、譯ないことであるが、市街地となれば大變だらう。砂屋に賴んで持つて來てもらう、天水桶といつても、古瓶、古桶、何もかも足らぬ時代、一軒毎に一つといつたら、京阪神だけでも素晴らしい數になつて、忽ち灘の樽屋が目を舞はす。

◎

せねばならぬこと、したいこと、山程あり、ゆめ防空思想に缺けてはゐない、といふ自信はあつても、物資不足が精神に祟り、現實に祟つて、自分の經濟の許す範圍といつても、ツイその日だけを糊塗するやうなことになるのは、よく〳〵考へておかねばならぬことである。

雲ふかきみ山の月のいでしより闇しらぬ世となりにけらしも

と有功は、闇をのがれた歡びをのべた。「寢ぐるしき窓の細目や闇の梅」と乙州もうたつたやうに、暗ほど苦しいものはなく、光りほど貴く嬉しいものはない。「闇試合そこひのやうな手つきをし」と川柳子は喝破したが、實際空襲となつて、燈火管制が行はれてをれば、そこひのやうな手つきをして、闇の高空から爆擊の目的物を搜査しなければなるまい。そこに防空施設の一つとしての、小さな家庭においてもの、各々の周到な用意が必要となり、また訓練も大切となるのである。幸ひに日本は四面環海、外敵空軍の襲來も容易でなからう、と思はれるが、朝鮮、滿洲となるとさうは行かぬ。

◎

ノモンハン事件は何を敎へたか——。

ドイツの優秀な空軍力のため、平和の天地に直先驅に大きな龜裂の入つたノールエーを、私たちは、靜かに三思すべきである。

のつとりとした靜かな海を抱いて、奇巖怪石に彩られた、屈曲の多い神聖な氣持のするフイヨールドを、いたるところに持つた北の果の國、長い脚を絡み合はして、勢ひよく語りながら

若い同志が漫歩してゐる可愛らしい國、詩聖イブセンを生んだ、そのノールエーが、國防の力なき悲しさには、中立も保てず、獨軍に叩きつけられ、國民は、今どうして、どんなところをうろついてゐるかと、そゞろに思ふ。

私はベルゲンの山上に立つて、冬の日のスキー、スケートの競技の盛觀を思ひながら、十一月といふに、不思議にポコ〳〵と溫い日光を浴び脚下に三角洲のやうに横はつた、魚漁市をじつと見下した。

この空を、爆彈を積んだり、落下傘部隊を積んだ、ドイツの飛行機が飛ぶだらうとは、夢にも思はなかつた。恐らくスキーの大きな滑走臺の上や、競技者が興に任せて積みあげた、山の頂上の變な石塔の附近には手早くドイツの高射砲が据えられて、英佛空軍の來襲に備へたことでもあらう。

◎

防空施設としての燈火管制は、消極施設に過ぎないだらうが、襲擊をうけた後の慘禍を思へば、小さな家庭としても、力一ぱいの犧牲は、常から拂つておらねばならぬことである。

「とぼしかけ貫つた國は暗になり」

といふ警句がある。凡ては、何もかも、自力でなければならぬ。同じスカンヂナビヤの小國でも、スエーデンは今に自力で中立を守つてゐる。「とぼしかけ」を貰つた國でなく、物資が相當にあつて、寧ろ「とぼしかけ」をやる國だからでもあらうが、一時の危い苦難を切りぬけたおかげで、ドイツの鉾先が、愈英佛本土に向つてから割合に混亂に陥らないで濟んだらしい。

◎

「最初の危機」を勇敢にきりぬけることは、戰法の第一要件で、武將の典型といはれた甲斐の武田信玄も、北越の上杉謙信も、始終これを唱へてゐた。光秀が本能寺に信長を斃したのも、中國へ出陣と見せて、謀計の密議を家臣の五名に限り、軍兵を桂川まで進めてから、急廻轉をしたためであつた。

◎

防空訓練のとき、飛行機が標識燈を明滅さして、快い唸りを立てる。暗の道に立つて見あげてゐると、流星のやうでもあり、螢のやうでもある。「凄い敵襲だつたら」といふやうなこともツイ忘れて、男性的な、空の勇士の誇りをすらも思ふ。だが「月夜より闇に景ある宇治の夏」のやうな、のんびりした時代でない。今の空の螢には大きな使命が託されてをり、外から飛んで

來る、お尻の火すらもつけてゐない大きな螢には、どこまでも周到な用意を以て當らねばならぬ——。

◎

徳川の末期、明治維新になるちよつと前に、八百萬の神々のお札が、國中どことなく降つたことがあつた。それから人氣が湧いて、浮かれて、おかげ參りといふことが流行り出し、伊勢道中の賑ひ、言語に絶したさうである。私の母など、よくその光景を物語つた。子供心に不思議でならず、何ういふ風にして降つたか聞いて見ると、空からヒラ〳〵舞ひ下つて來たともいひ、朝起きて見ると、庭の松の木の枝にとまつてゐたともいふ。

一都市、一町村位ならともかく、全國どこの山の中の村にも、それがあつたのだから、何人の奇計であるにしても、念が入り手間が入ることであつたと思ふ。

松浦靜山公の甲子夜話續篇には、その謎を說いて「最近江戸奉行の手に捕はつた、張本人の自白によると、團子をさした串をこしらへ、その一方にお札を結びつけ、山の中へ持ちこみ、高い松の木の枝にかけておくと、鳶や烏が來て、團子を食ひながら串を落すから、丁度空から降つたやうに、ヒラ〳〵と舞ひ落ちたのだ」と書いてゐるが、鳶や烏が萬邊なくそんなことを

してくれたか、何うか、張本人の自白も、時にとつての戯曲のやうに思はれて、成程とは思はれない。

◎

ソ聯が思ひついて、ドイツがノールエーから、ベルギー、オランダと盛に實戰に用ひた落下傘部隊が、日本のこの蒐團子から思ひついたのでもあつたら、近代戰も一入ロマンチックな色彩を帶び、勇士の天降りに、詩趣も湧いたりすることであらうが、しかし落下傘部隊は、援軍もさう容易くは得られぬ敵地に、險を冒して降下して行くのだから、決死的勇氣に滿ちてゐなければならぬこと無論である。投下されるものは、強い瞬間の破懐力をもつた爆彈と限らず、且つ動き且つ進んで敵力を破壞する人間とまでなつて來ると。これに對し、家庭人としての私たちも、亦一つの防空施設のむつかしい課題を、現實に課せられた譯である。

「我に劔あり、魂あり」だけではすまされぬ時代であるが「我に劔あり魂あり」を、夢にも忘れてはならぬ時代でもある。

九、古紙帖の城廓と蚊の製藥

空襲の話から、空襲と同じやうに私の嫌ひな蚊の話をして見たい。夏になつて小さなナリをしてゐながら、爆擊機の唸るやうなやかましい羽音を立てゝ耳もとへ寄つてくる煩さゝは凡そ世の中にこれほどイヤなやつがあるかと思ふほど腹が立つてたまらない。

私が目の中へ入つても痛くもないほど可愛がつてゐた愛犬チョビが斃れたのも、去年の夏の猛烈な蚊のためだつた。大分蚊にいぢめられてゐるなと思ひながら、蚊帳を吊つてやる譯にも行かず、犬箱をなるべく蚊のゐないやうなところに持出して、アースをまいておいたのだが、夜番を忠實にしたあとの疲れでぐつすり寢こんでゐる鼻の先、目の縁をかまれて、何とかいふムツかしい毒素が心臓に傳はり、それで十日間斗り、苦しい息をつきながら、獸醫が注射器を持つた手に凭れて息を引取つてしまつた。

◎

私たちは、あまり知らずにゐるのだらうが、手を刺され足を刺されて、その毒素で、いろ〳〵の病氣を惹起してゐることがどれほど多いか知れたものでない。蚊といふ憎い奴は菌を針の先につけて、自由自在に注射しあるいてゐる不逞至極なやつである。郊外に、有名な蚊の多いところを態と選んで建てたやうな私の家は、夏になると、家の周圍に、夕方から音樂が始まる。蚊の集團がどこでもこゝでも單調なコーラスをやるのである。來襲を防ぐため五分目の網戸を窓といふ窓に建てめぐらしたが、執拗な彼等は巧みに隙をねらつて侵入する。

◎

「ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそ聲になのりて顏のもとに飛びありく、羽風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ」行儀の惡い清少納言も、この惡虫には、おち〳〵眠れもしなかつたらしい。

「山伏が護摩ならなくに黑煙、そこたちされと煽ぐ蚊遣火」アラ、ウンケンを物凄く叫ぶ修驗者も、この小さな虫に、呪咀の祕法も役立たず、荒行をするときのやうな姿勢で大團扇をバタ〳〵やる外はなかつた。「護摩壇の蚊は追ひ拂ひ祈りのけ」と川柳子はいつてゐるけれど、恐らく蚊軍には佛罰を恐れるほどの良心もなからうと思ふ。

「蚊の聲す、惹冬の花ちるたびに」蕪村のやうな句を吐いてゐると、蚊も風流の一員に數へられ「京伏見家立つゞく蚊やりかな」と京雨のやうな苦吟をやれば、都會の殷賑を思はせることにもなるが「古袷鎧にせばや夕暮のときの聲あげ攻めてくる蚊に」と雲鯉の狂歌を味はつたりしてゐると、蚊の强さを思ふまでに今歐洲の血みどろ戰が偲ばれて、心が暗くなつて來る。

平戸の殿さま、松浦靜山公は、餘程蚊が嫌ひだつたと見えて、その著「甲子夜話」の中に「予が性殊に蚊を患ふ」と筆を起し、內寢、外堂、園裏、山林、自分の行くところへついて來る家來どもが澤山あるのに、蚊はそれらの者へはチツとも嚙みに行かないで、自分ばかりを嚙みに來る。どうも堪らない。今年(天保三)の九月にも國から人がやつて來て歸るといふので、江戸の隱栖から品川まで送つて行つて一宿した。その時計らず外邪を感じ、座にゐることができなくて臥戸に入つたが、宿のことだから、蚊帳の用意もしてをらず、間障に倚つて寢た。つれてゐた侍女たちは心配してズツと枕邊を圍んだが、不思議とその夜は自分を嚙みに來ず、侍女たちばかりを盛に刺した。思ふにこれは邪氣が膚中に充滿してゐるので、蚊もこんな血を吸つたところでウマくないと、外の若い女たちの甘い血を吸ひに行つたのだらう。小さな虫だが、どうも小賢かしいやつだ、蚤も病人はかまぬといふし蛭もできものの近所の血は吸はぬ。うんう

ん……と。それなら、夏中病氣でもしてをればだが、あまり有難いことではない。

◎

寶物集に「昔一人の愚人、父をつれて道を行くに、木の蔭に休みければ、蚊といふ虫、父が額に食ひつきたるを、大なる棒にて顏を打ちけるほどに、親もろともに打殺しけり、親を殺さんとは思はねども、愚痴なるによつて逆罪をなしけり」とあり。親の大切を忘れて蚊の憎さを思ふ憎しみがいかに强かつたかを說明した一つの作り話に過ぎないだらうけれど、事實、頰に喰ひついた蚊を平手でピシヤツとやる時には「こいつめ」と思はず叫んだりするものである。

◎

七代將軍德川吉宗は名將軍と呼ばれた人でその時代の政治は、よく民情を汲み、治安も行屆いたやうであるが、ある夏の夕まぐれに蚊が群れとんでゐるのを見て、緋子の袋を澤山つくり、近習の面々に與へて蚊を取らせ、やがて集まつたのを一纏めにして官醫の許に送り、膏藥に練らせ、腫物ができた時の吸出藥にしたところ、奇妙に效能があつた、名君の考へることはエラいものだといふやうなことが隨筆「耳囊」に出てゐる。吉宗は蚊の血を吸うところから吸出藥にさせた思付きと思ふが、本當に利目があつたとすれば、蚊のやうな嫌な奴を有效に使用した唯一のもので、匪賊に治安のことを司らせる趣にも似てゐる。どうも自然は全くこの世に「無用有害」の外に一つの取得もないものは造つてゐないのかも知れず。嫌なものゝ中から有用を發見し得る我々の力がまだ足らぬのかも知れぬ。

◎

日本歲時記には「スツポンの骨をやくと蚊が皆死ぬ、うなぎの骨もよい。すべて川魚の骨は蚊が嫌う」と書いてある。

事林廣記だつたかには「天地太淸、日月太明、陰陽太和、急々如律令」と七遍唱へると蚊は遁げるとあつた。蚊に文字が分り呪が分るなら、よい耳とよい智慧を持つてゐるともいへる。

◎

蚊柱とはよくいふし、今も小さなものは我々とても見ることであるが、宗長手記によると、伏見の津田聚情軒に一宿の時、園の竹に陣取つてゐた蚊の一團が夜に入つて押かけ、館の中に一ぱいになり、雷のやうな聲を立てた。蚊遣をどれだけくすべても退散せず、古紙帖を吊つて城廓を構へたが、それもダメになつて、夜もすがら打ち振うた團扇の骨は粉な〳〵になり、遂に曉に及んだと、大業なことである。この記を讀んで、私はまた、ロンドンの空を脅かすドイ

ツの大編隊の飛行機と、これに向ふ英機の大群を、數千メートルの空に見る凄じい蚊の大群として首を縮めた。

◎

ちつぽつけなやつだが、何といつても蚊は煩さい。一疋耳許へブーンと來ても眠られぬ。蚊の名所に居を持つ私は一年の八割を蚊帳の中で暮してゐる。うつとしい限りではある。忠勇なる皇軍將士も、恐らく敵兵よりもこの蚊が煩さく恐ろしいであらうと、そゞろに思ふ。

一〇、轉び出た桶の人間

＝請待の拔け殼とカメラ狂＝

友としては〝氣のよい男〟なのだ。彼は時間を知らない。唯カメラについての素晴らしい議論をすることだけ知つてゐる。彼が寫眞のことを話し出すと茶もさめるし、コーヒーも冬の泥水のやうになつてしまふ。煙草の吸殼が材木の置場のやうに積まれて、まだ袂の中からバットの箱を二つも三つもいつしよにつまみ出す溜煙には、たいていのものが參つてしまふ。

『ア、ア、またやつて來た』と硝子窓の中から溜息をついてゐたことなんか、ちつとも感づいてゐない。その、君、エルノ・ヴアダスは——エセル・スミスは——と、翻へる舌端は世界の果から果をフルスピードでかけめぐる。はるさめのしぶきが人の鼻柱を叩いて、臭くてたまらない思ひをさせることなんか、毫も反省してゐない。彼卽ち寫眞、寫眞卽ち彼の生命なのである。

その彼が、またやつて來た。門の戸をコト〳〵と叩く。その調子で、彼れ！と直ちに悟つた細君は、頭痛の時のやうに眉をしかめて『あれですよウ、ねえ、隠れてなさいよ』囁くにしては途方もない高い聲だが、Kはその時のつぴきならぬ急ぎの原稿を書いてゐた。『よし、うまくやれ、賴むぞ』と、いきなり應接の横の狹い三疊の間に飛びこんだものだ。

運の惡いことに、嘘といふものは、完全にはいへぬもので、細君『ちよつと出まして、その内には歸りませうけれど』といつたばかりに『それなら、今日は用もなし、待たしてもらう』と勝手馴れた應接だ、のこ〳〵上りこんでしまつた。『奥さん、どうです、氣候もよくなりました。山々の緣たまらないですよ。一ついつしよに撮影に出かけませんか、辨當は僕がかつぎますお尻も押してあげますよ。ナアにヒルムだつていくらでも手に入ります。もう決して風なんかひきやアしませんよ、僕が請合つてあげます。場所は、さうですなア、どこにしませう。瀬戸内海もいゝけれど、山陰、北陸、却つて遺利が多いかも知れませんなア、何なら、九州へ出かけてもいゝですよ。けれど禁止區域がうるさい。つまらない田舍あるきをやつて見ませうか、名もない村、鎭守の杜、何でも繪になりますよ、下呂はどうです、僕も行きたい〳〵と思つてゐるんですが』とこゝまで二百八十字、彼は一息きに喋舌つてしまつて、マツチを摺つた。

隣りの三疊に隱れたKはそろ〳〵咽喉の奥がこそばゆくなつて來た。胸元に詰つた痰が悲鳴をあげかけてゐる。拔け出さうにも二方は壁、その男のゐる應接へ勇敢に飛び出すか、植込みの中へ窓を跨いで飛び出すほかに、急難逸脫の方法はない。

ふと、Kは思ひ出した。

◎

角谷正雅といふ和歌の先生に、ある醫生の門人があつて、住んでゐる町の八幡宮の秋祭が近づいた。「その日は皆揃つて呑みに行くぞ」「オヽ來い、待つてゐる」と大勢の門弟と約束したが、忘れてしまつてゐた。祭りの日になつて六人、ぞろ〳〵やつて來て「今日はありがたう、遠慮なくやつて來ました」。吃驚したのは牛を賣損う賢婦型の細君で、「あるじはノツピキならぬ用事で出ましたが、やがて歸りませう、まア茶でも召上つてお待ち下さいませ」といつた。六人の客は「さようか」と失望しつゝもソレで歸ると思つたのである。

けれど六人は歸らなかつた、手土産まで持つて、ウンと呑まうとやつて來てゐるのである。通された奥座敷には座蒲團一枚用意してなかつた。澁茶を啜つて、てにはを論じて、契沖を語り、俊成卿を語り、猿丸を語り、小町を語り、人丸を語り、千蔭を語り、眞淵を語つて、すつ

かり飽々してしまつたが、あるじは歸つたといつて來ない、無論馳走の膳も出ない。

やがて祭太鼓の音もやんで、日はだん〳〵傾いて來た。今更、歸るともいへず、細君は斷りにも來ぬ、腹の虫は物慾の希求に素敵な鳴動を起す——。

その時一人の年とつた下僕が隣りから這入つて來て女中を呼出し「まことに御無心ながら風呂桶を一二晌貸して下さりませぬか、うちのが損じまして、俄の來客に困つてをりますので」「ひとりで擔いでお歸りなさいますか」「いや〳〵年を取つて、力もぬけてをります、憚りながら一寸片棒さし合うて下さりませ」「あるじは外出、それなら私が」と女中が手をかし古い据風呂を繩がらみにして、下僕の老人とやつとこ肩にあげたが重い。よろ〳〵とよろけた拍子に闕に躓いて、女中は膝を折り悲鳴をあげた。その時蓋が飛んで中から大入道が轉び出したのである。見るとソレが主人であつた。約束をして忘れてゐた客が大勢連れでやつて來たのに狼狽へて、隱れて見たが、容易に歸りさうもないので、風呂桶にしやがんで、擔ぎ出してもらつて、何氣ない風で外から這入つてくるつもりのカラクリがスツカリばれてしまつたのである。

◎

Kは、窓から植込みを覗いて見たが、生憎一本の熊手、一本の庭掃箒の外に据風呂は置いて

なかつた。

細君はもうあぐみきつてゐる。「けふは或ひはXさんのところへ寄つてといつてゐましたから、遲くなるかも知れません、本當にお待たせいたしまして」と驅逐劑をふりまいてゐるのだけれど、〝氣のよい男〟には通じない。何うせ今日は暇なんですからと、またカメラ自慢である「今度のサロンには特選をとつて見せます、屹度」「この間のモデル撮影には、案外な美人がゐましてね」と綿々盡きぬ。

あゝ無情。Kは……がはづんで來た。どこにも捨てどころがない。日頃から腎臓と膀胱を氣にしてゐるKには、命がけの忍苦である。持つべからざるものは長尻のカメラの友と哄歎するにしてはもう遲い。

〝死の戰線〟といふまころまで切羽詰つて來た。

ふと一枚の白い敷布が隅に疊んでおいてあるのに目がとまる。

Kは天勝と忍術をいつしよくたに思ひ出して、それを頭から冠つて見た。柱にかゝつてゐる材料商の宣傳鏡に寫して見た悲壯な顏面を咀ひながら、その時はもう、どうにも我慢ができぬまで押し詰つてゐた臍の下を、金剛力に押へて、窓からサツと植込の中へ飛んで下りた。

相當待ちくたびれて退屈してゐる〝氣のよい男〟いつも獲物を〳〵と覗ひつゞけてゐる男にそれが見つけられぬ筈はない。

「奥さん、奥さん」

立上つて、まだ肩にしてゐた速寫ケースの口をパクリとあけた。

それから後、數分にして、白衣をK自ら除いた時に始まる悲劇の喜劇は、どんな通人が企てた撮影競技會にも滅多と見られぬ課題で、內容はKの名譽のため省略するにしても〝氣のよい男〟の長尻とカメラ論の長廣舌は決して現在にも將來にも影響することはなかつたのである。

初夏の一笑話——だが實話である。

一一、遺聞丹波義民傳

＝光秀の居城と軍法松＝御定法＝死骸の打首＝

〝福知山さん葵の御紋、いかなお大名も叶やせぬ。〟福知山音頭で知られた丹波福知山城は、永祿十年（皇紀二二二七年・西暦一五六七年）織田信長の命をうけて左近將監、瀧川一益が北陸丹波方面を攻略の際、これに從ふた明智光秀が、時の城主横山氏を攻めて難なく陷落せしめ暫らく居城とした小城ながらも有名な城である。

城は福知山市街の南方にあり、麓を由良川の上流音無瀨川の流れが縫ふて北に走り、北北東には茨木童子が棲んでゐたといふ鬼ケ城山屹として聳え、西南方遙かには大江山鬼退治の際源頼光主從六人が山伏姿となり始めて法螺貝を吹いたといふ傳說のある一の貝峠が一文字を引いてゐて、相當要害の嚴しいところであるが、四面に廣い田園が開けてゐて、攻防戰術上、城兵を露出する恐れがあるので、光秀は居城とすると同時に、音無瀨川の堤に沿ふて澤山の松を植え

た。俗に〝光秀軍法の松〟と唱へてをり、今に逞ましい幹を持つた巨松が亭々として長く〳〵續いてゐるが、城中から軍兵を繰り出してもの敵の目に映ぜぬやう特殊の工夫を凝して植えたものだといふことである。

現在の城址はだん〳〵市の發展につれて石垣も壊され、濠もスツカリ埋めつくされて、頂上の天主閣址には旭神社が祠られ、素晴らしく大きな深い井戸があり、角櫓は修覆が加へられて僅かに昔の面影を殘してゐるに過ぎぬ。

光秀が本能寺に反逆の刄を揮ひ、山崎の合戰に滅んで後、豐臣秀吉がこの城を修築し、猶子秀勝の居城とし、椙原家次を輔臣として專ら事に當らしめたのは天正十年のことである。その後文祿元年九月年二十七にして秀勝が征鮮の陣に歿したゝめ、丹波八上（やかみ）の城主（兵庫縣多紀郡日置村八上）波多野秀治に屬してゐた小野木縫之助重勝が城主となり、慶長五年死亡、同十一月有馬豐（後ち久留米の城主）が德川家康のため封ぜられて城主となり六萬石を食んだ。元和七年に至り岡部長盛が龜山城から移封され寛永元年美濃の岐阜に遷るまでこの城を護つた。次で城主となつたのが大阪の役で德川のために功を樹てた稻葉紀通で丹後の國守京極左京と國境を接し互に勢力を張つてゐたが、或日稻葉が京極の許に使を送つて丹後名物の鰤を送つてくれといひやつた。京極は、テツキリ家康の幕僚たちに賂ひするためだらうと邪推し、頭を切つてしまつた鰤百尾を稻葉の許へ送つて來たので、稻葉は憤慨して何ぞ我を侮ることの甚だしや、彼れの臣若し我が國土を經ば必ず殺戮せんと、偶々京極の一兵卒が例の音無瀨川に沿ふた軍法松並木を通過するのを見て紀通は城の矢櫓に登り窓から銃を以て擊ち殺したといふ一挿話が殘つてゐる。この紀通はこれらのことが因をなし德川に對し不軌を謀るもの〻如き流言を放たれ、〝隣國我を誤る〟と慶安元年八月自ら刄に伏した。年四十六。

翌二年松平忠房城主となり居ること二十年、寛文九年朽木植綱の子植昌こゝに封ぜられ、子孫世襲明治維新になつて溝公は華族に列せられた。寛政年中の主君であつた朽木龍橋は幕府でも要路に立ち殊に蘭學を好み蘭學者を優遇して屢次資を給し長崎に留學せしめてゐる話が松浦靜山公の筆になる〝甲子夜話〟の中に〝福知山侯〟として何度も採錄されてゐる。朽木公は當時流行の愛錢家中の隨一で新撰錢譜などの著書もあり松平不昧公について石州流の茶を學んだ風流人でもあつた。

こゝに記述しやうとする義民の一件は初代朽木移封の寛文九年から約六十五年を經た享保十九年（皇紀二三九四年・西暦一七三四年）今から二百餘年前の四代目朽木植治？時代のことであ

るが藩公在府の留守を預る家老たちには善良な老人が多く、その幕下にあつた用人や、又奉行代官など三人が腹を合はせて苛斂誅求、農民をいぢめ倒したゝめ、遂に城下六十三ケ町村の庄屋が連判傲訴の騒ぎを惹起したのである。

あらゆる資料は湮滅に歸し、僅かに故老たちの口碑によつて傳へられた話柄に過ぎず、それもんだ〳〵影が薄くなつて、今では夢のやうな昔話としてたまさか話す人がある位のことであるが、當時傲訴の發頭人として犧牲になつた〝本田又左衛門〟の何の孫だかに當る勘左衛門といふのが七十餘歳にしてなほ健全であつた大正二年に、せめてさゝやかな建碑でもして、祖先勞苦のあとを殘しておきたいと、代々言ひ傳へられたロ碑の記憶をたぐり出し一枚の刷物にして有志の間を丹念に説き廻り、漸く大正五年に目的を達し福知山の城下から一里ばかり西に離れた石場村の鎭守の境内に自然石の碑を建てた。

享保十九年といへば將軍徳川吉宗時代で、十七年の夏近江以西の諸國から關東方面に亙り廣く蝗虫の害があり、そのため米價は著しく騰貴して翌年に及び、饑死するもの夥しく、幕府は廩倉を開いて給米を行つたが、これに鑑みて吉宗が青木昆陽の進言により甘藷を小石川園中に試植せしめたのはその年のことである。

福知山藩における事件はたま〳〵この年に起つたのであるが、前にもいつた通り性質の悪い用人ら三名がお人好しの家老達の目を眩ましあらゆる方法を以て農民の膏血を絞りあげ〳〵してゐるところへこの米高がやつて來たのだから、積年の鬱屈がとう〳〵爆發したのである。

〝明智光秀丹波をひろめ、ひろめ丹波の福知山〟

〝今度お江戸の若殿さまに、知行が增すげな五萬石〟

〝山家（やまが）一萬綾部が二萬、福知三萬五千石〟

と音頭にもある通り城下の人々は藩主の徳を謳歌するやうな氣持にひたつてをり、譜代といふ誇りもあり、丹波の大阪としての商業の殷賑をも自慢にしてゐた位であるが、用人の垂道金右衛門と奉行中村權六、代官由里傳吾の三人が藩主をダシにして百姓町人からひどい租稅を取り立てた。

彼等がいつも公言してゐたといつてロ碑に傳つてゐる廉々を拾つて見ると、

〝武士の權威で百姓町人を威すのは赤兒の手をねぢるよりもまだ優しい仕事だ〟

〝百姓は藁で髻を結び土間に寢起をしてゐて澤山である〟

〝百姓町人は濡れ手拭のやうなもので、もう絞り切つたと思つてもまだ絞ればいくらかの

雫は落ちるものである〃

〃藩の命令で一定の問屋を設らへ（萬事產物所と呼んだといふ言ひ傳へである）呉服、反物、金物、穀物、青物、何といはず凡てこゝに買ひ集めさせ一割の口錢を取つて商人なり百姓なりに賣渡し、その口錢全部を取上げる〃

などであつたが、百姓の年貢は、福知山の〃御定法〃によると〃三ツ八歩五厘〃といつて、作高一石に米三斗八升五合、その上にヘツ米、口米二升を加へ合せて四斗あまりを納めることになつてゐた。それを何とか名目をつけては五斗五升までせり上げる。一反の田地の收穫は平均して一石六斗内外であるが、その内五斗五升が右の上納年貢で村費や何かを加へると結局一石五斗二升あまりになつた。

假りに作柄がよくて一反に平均二石取れたとしても、その中から一石五斗二升を引くと四斗八升の米しか殘らぬ。先づ一家にして夫婦に子供二人、それに丁稚一人を加へ合計五人で五反の田は耕せるものとして、作米十石、年貢村費七石六斗を差引くと僅かに二石四斗しか殘らぬ。これを一年三百六十五日に割ると一家一日に六合七勺足らず、一人に一合二勺四才、それもそれだけ食つてしまうことができればまだ粥でも炊いて何とかなるかも知れぬが年中の交際、

升物の量り出しは相當にあるし、おまけに一人一日五勺づゝの食ひ延しをして、これを庄屋が月々集め〃歩金としてお預かりなさる〃といつて取りあげられてしまう。

まだその外に賦金、賦札を始め、身分に應じていろ〳〵名をつけて集めた封金を何れも〃預かる〃といふ名目で取りあげ、普請をするとか、婚禮、祝儀、佛事、來客の際には一汁一菜といふ布令を出しておいて、丁度膳の出た時分に藩の下役人が庄屋をつれて押かけお平の蓋を取つて中を改め、儉約金何程とその場で定め賦金にして差出さしめる。萬一家業に出精して小金を貯へ、家の一寸した雨漏りでも防ぐと〃農業出精につき貢金申付け〃と十兩二十兩と相當な稅をかける。

お上様の御說意、御法度を堅く守るやうにと役人どもは月に二回、駕籠に乘つて家來どもを召具し下に〳〵と呼ばゝりながら町から村を檢分に廻り、百姓たちが仕事に勞れて田の畔に居眠つたり、伸び欠伸でもしてゐると一々帳面につけて歸り、後日代官所に呼出し〃お上へ對し無禮をした〃と叱りつける。この時菓子箱の中へ金子を忍ばせて臺所の方からソツと出せば許してもらへるが、若し忍ばせた金子が少いと忽ち牢屋に入れてしまう。

かういふ調子で次から次へ搾取の新法を案出し、怨嗟の聲巷間に充滿するありさまであつた

が、あまりの虐政を見るに見かねて忠言する藩士の一人でもあると三人は直ぐ老職に讒訴して首にする、自然家中も正義派と不正義派の二つに岐れるやうになつたが結局いつも正義派は悪運の強い不正義派に壓せられてゐた。

こんなことから數多い六十餘ケ村の百姓たちは食ふに米なく、その上蝗の害をうけての飢饉に、露命を繋ぐことすらむつかしく草の若芽をつみ、木の若芽をむしり、遂には豆や小豆の枯葉まで粥にまぜて食つて了ひ、榮養は衰へ、餓鬼のやうになり、根氣がつきて仕事もできず、外聞を厭ひ夜間ひそかに家を出て當途もなく乞食になつて彷徨ひ歩いたのもあつたが、何處へ行つても飢饉の米高で、飯の一握りも惠んでくれるものはなく、遂に野倒死をするものが多くなつて行つた。

それでも悪用人、奉行、代官は滿足せず、荒撫地や山の懐ろに新らしく間竿を入れ否應なしに新開墾を強ひたのであつたが、斯うした悲慘な狀況をまざ〳〵と見せつけられ、何とかしてこの苦境から脱れる方法を考へねばと、石場村の庄屋本田又左衛門は同族の石坪萬右衛門と毎夜額をあつめて相談した。

〃悪辣を極めた徵税をいつまでも默つて遵守してをれば何の故障もなく百姓町人は納めることができるものだといふやうに彼等が誤解し、それが萬一全國に傳つて、他の大名までが倣ふやうになつてはいけぬ。何も知られぬ藩主に害を加へると同じだ〃といふことになつて、それから又左衛門は、深夜山中に立籠り文殊菩薩に祈願をこめ、石坪といろ〳〵案を練り次の如き個條の誓狀を認めたのであつた。

一、御定法通り年貢免除御下渡しの事
一、永く御引捨の事
一、賦札、賦金相止めの事
一、新竿新開五ケ年延期の事
一、一日一人前米五勺づゝ食延し相止めの事
一、上納米一粒より仕立つる事相止めの事
一、萬事産物所相止めの事
一、新規取立法一切御斷りの事

右の通り御聞屆被下度此段奉願候

この案文ができあがると、謀事は密なるを貴ぶといふ譯で、人を以つてするやうなことはせ

ず、又左衛門と萬右衛門は夜中忍びの姿でそれ〴〵手分けをして六十三ケ町村の庄屋々々を歴訪し、八月十五日(享保十九年)の夜福知山土師屋九左衛門方へお慈悲願ひの義につき相談をしたいからソツと集まつてくれと耳打ちをしてあるいた。

庄屋たちは藩の悪政に弱り切つてゐた折でもあり、丁度八月十五日の盂蘭盆會で、町に名高い福知山踊りのある折なので人目に疑はれるやうなことがなくて宜いと何れも喜んで承諾し、十五日の夜には頭に丸い美しい月をいたゞいて、庄屋たちは一人も殘らず土師屋へ集まつて來た。

そこで慈悲願ひの案文を讀みあげ六十三ケ町村の庄屋、それ〴〵連判をするといふ段取りになつたが、途中に注意するものがあつて、訴狀の筆頭に名を署したものが必ず謀叛の張本として打首になる、それでは又左衛門さんにも萬右衛門さんにも濟まぬからと、その頃の必ずしも新案でなかつたかは知らぬが、大きな番傘を買つて來て、それに文言を認め、誰が筆頭だか分らぬやうに骨と骨との間に一人づゝ名を連ねたのであつた。

そして翌享保十九年八月十六日六十三人の庄屋は一列になり、福知山城に押しかけ、大門の外から番卒に〝お願ひの筋があつて參りました、御家老さまに御面會のお取次を願ひます〟と

叫んだ。

番卒は驚いて早速用人の垂道金右衛門にこの由を告げると、垂水は〝さては〟といふ譯で驚くかと思ひの外〝怪しからぬ庄屋ども〟と痘(あばた)の面を眞赤に染めて門際まで走り出で〝騒々しい、引き退れ〟と怒鳴りつけた。その時又右衛門は垂道の前に進み出で頭を下げ、辭を低うして訴狀に認めた願ひの數々を手短かに口上したのであつたが、垂道は碌々耳を藉さず、刀の柄に手をかけ〝武士に向つて過言不埒なことを申すか、手打にいたすぞ〟と威した、けれど覺悟をきめた又左衛門は騒ぎもせず怯みもしなかつた〝お手打とあれば、おいぼれの命少しも惜しみはいたしませぬ。なれど願ひの筋ばかりは、御家老さまお殿さまにお取次のこと叶ひませねば、江戸へ參り天下の御老中にお願ひをいたしましてもこのまゝ止めることではございませぬ〟と言ひ放つた。

垂道の怒りは頂上に達した。どうかすると本當に手打にしさうな見幕であつたが、ソコへ坂田、高松、古川の三家老が出て來て用人の垂道を押し止め〝矢庭に大庄屋を手討にして、何う裁きがつくか〟といつになく強く言つたので、三人をいつも蔑視してゐた垂道も、傷持つ足許が危なく、面ふくらして默つてしまう。

三人の家老たちは大庄屋又左衛門陳述の筋を一通り聞き終つてから〝かく大勢が傲訴するとは穏かでないから一同静かに引取るやうに、訴狀は預つておく〟とそのまゝ奥に入つた。

庄屋たちはそれから土師屋に引揚げ、とにもかくにも老職の手に訴狀が落ちついたのを喜び合つた。

越えて十九日、本田又左衛門と石坪萬右衛門は藩庭に呼出され三人の家老職から事細かに百姓町人困惑の狀況を聞かれた。二人は少しも臆するところなく申述べたが、用人、奉行、代官たちの悪事私事は、あまり事々しく訴へず、唯饑饉と米高と徴税の重きを諄々として説いたのであつた。三人の老職たちは〝それほどまで苦しんでゐるか〟と不審さうな顔をして聞いてゐた。

藩庭において何ういふ詮議が行はれたか、その模様については一切消息が傳はつてをらぬが間もなく〝願ひの筋聞届く〟といふことになつて、庄屋たち訴願の主旨は貫徹し、百姓たちは地獄の苦しみからやつと浮びあがつたといふことである。

その後、いづれ藩内に見苦しい内訌はあつたであらう、庄屋たちの願意を聞いた三人の家老は打ち揃ふて江戸詰になり、新らしい家老が江戸の藩邸から轉勤して來た。

でも垂道たちの悪政を再びする機會は來らず、十年近くは無事に過ぎたといふことであるが、十一年目の延享元年に至り〝大庄屋又左衛門のやうな奴さへゐなければ自分たちはぬく〳〵と榮華の暮しをしてゐることができたのだ。この怨みを晴らすには人知れず又左衛門を亡き者にして、再び苛歛誅求をやるに限ると、元の三人が密議の結果、土地の侠客熊五郎の弟岩五郎といふのを代官の由里傳吉が呼んで、金を與へひそかに策を授けた。

由里は常て岩五郎の悪事を見のがしてやつたことがあるので、その恩義に感じ、大役ながら必ず無事に成し遂げると思つたのである。

ところが岩五郎は代官由里の恩義を思ふまでに大庄屋又左衛門が十一年前身命を抛つて六十三ケ町村の人々を救つた義侠と勇氣にひどく感激してゐたので、その翌夜ひそかに又左衛門の宅を訪ね、面體を頭巾に包んだまゝ聲を低うして事の仔細を告げ〝何ういふ災難が湧いてくるか分りませぬから、一時何所かに身をお隠しなさいませ〟といつた。

又左衛門は岩五郎の去つたあと、静かに目をつぶつて〝今に執拗くそのやうな邪念に捕はれ、悪い巧みばかりをしてゐるのか、この十年間の百姓町人の喜びは何うであつた。窯の煙も年一年と賑ふたではないか。傲訴が悪いといふて藩庭の白洲で糺明を受け罪を得るといふなら

是非に及ばぬが、……とは何といふ恐ろしいことだ。と、その夜直ちに石坪萬右衛門外四名の身内や友だちを招きよせ、事の急を告げ家内のものに難儀迷惑をかけないため、また隣近所、六十三ケ町村の庄屋たちに累を及ぼさぬため覺悟をきめたからと、人々の涙のうちに水盃を取りかはし、病死といふ事にして黒羽二重に白無垢を着せ二重の箱に入れて埋葬しくれと遺言までして潔よく切腹したのであつた。延享元年二月二十九日のことである。

その年の秋、土師村の次左衛門といふ百姓が京都よりの歸りがけ家中の或る侍士と道づれになり、いろ〳〵話し合つてゐるうち十一年前の傲訴の話が出て、次左衛門がうつかりあの時の訴人の頭取は今年の春に病死したと聞く石場村の本田又左衛門であつたといふことでございますといつた。次左衛門は死んだ人のことであり、別に話して惡いことでもなからうと浮つかり口を滑らしたのである。

その侍士は歸つてから、〃今まで何うしても傲訴の時訴狀を認めた發頭人が分らなかつたが、けふ始めてその筆頭を耳にした、矢張りアノ時一番先に進み出て御家老に申上げた又左衛門であつたさうな〃と家人に話したことから、段々家中に傳はつて、遂に用人の垂道や奉行中村、代官由里の耳にも入るやうになつた。

彼等三人は前から城の門前に押かけ家老の前に出ておめず臆せず口上を述べた又左衛門が訴狀連判の筆頭だらうとは思つてゐたが、訴狀が番傘に書いてあつたゝめ、誰が筆頭といふ證據が擧らず、ひそかに探りを入れても密告をするものがないので、怨みを又左衛門一つに寄せるばかり、公けに所刑の方法もつかず、とう〳〵暗殺を企てたりしたのであつたが、計らずも、〃矢張り發頭人だつた〃といふことが分つたので雀躍して、藩の政道を正しくするには何うしても所刑をせねばなりますまい〃といふ風に家老職に持ちこみ、大勢の庄屋、百姓を呼出し、白狀をさせ、いよ〳〵藩議もそれに決して、家中總出〃傲訴の頭取捕り〃と稱し何百本といふ松明をふりかざし、百姓町人への示威、町から石場村への一里、家中の松明が燃え續いたといふ話であるが、さういふ大袈裟な行列をして又左衛門の墓所へ押しかけたのであつた。

この奇怪な光景から、電波のやうに、いろ〳〵な風説が八方に擴がり、觀瀧寺の住職願哲上人は今し隱亡が代官由里の指揮をうけて又左衛門の墓を發きかゝつてゐるところへ馳けつけ、〃殿さま御存じのことでなく、唯御家來衆、中途の壓制非道から百姓どもの難儀を見るに見かねて慈悲願ひに罷り出で、御家老職のお聽入れを得た有德の仁の墓を何故發きなされますか〃と詰つたが代官は默つて一言も答へなかつた。

遂に二重棺は掘り起され、固く釘づけにした箱を開いて見ると黒羽二重に包まれた又左衛門のなきがらは不思議や腐らずミイラのやうになり剩へ眞白な髯が三寸ばかりも延びてゐた。

さすがの代官も遠巻きにして見てゐた家中の侍士もびつくりした。

ソコで直に死骸を出して打首。一切は終局に近づいたのであるが、願哲上人は何に感じたかその場から寺をすてゝ高野に上つたとのことである。

翌延享二年七月次の如き申渡しがあつた。

申渡條々の事

石場村大庄屋病死　又左衛門
又左衛門母　たかの　八十八歳
又左衛門後家　りよ　六十歳
惣領　松右衛門　廿四歳
妻　きく　二十歳
弟　桝五郎　十八歳

百姓共願の品により無據筋を申上候儀には可有之事に候然る處去る寅年願之儀につき致徒黨大勢御城下へ晝夜相詰共騒動敷共仕方御地頭を不恐躰不屆至極に候依て共節之頭取之者此度數日被遣御詮議候處石場村先大庄屋又左衛門頭取之段大勢之者致白狀候又左衛門儀當春致病死候に付御吟味別て被入御念候處又左衛門頭取之隨一に無紛候重罪之儀被命候者被處死罪に共上首獄門に可被梟候へ共致死失候故屍を掘出し首を刎取捨に被仰付候共方儀其節は末ものゝ是非を不辨へ年來に付以御慈悲追放被仰付候

江戸京大阪丹波近江徘徊仕間敷候

かくて家財は沒收され、家族たちは一時その村を立のいたが、何所に隱匿はれて、何年後に歸ることができたか、恐らくは年と共に追放の刑罰も有耶無耶になつて、祕密の裡に歸り、藩の新らしい役人たちも強いて詮議立てをしなかつたゝめ、口碑にも傳はらず分らぬまゝになつ

てしまつたのではないかと思ふ。

惡巧みをした三人は死骸打首のことがあつてから間もなく罪狀がばれてそれ〴〵處刑されたともいひ、さうでないともいひ、これも最後の模樣がハツキリ傳はつてをらぬ。或は藩の面目にも拘はることなのでコツソリ江戸詰にでもしたのではないか。こんな城下に奉行があつたか。由里代官といふものゝ跡も全く判明せず史實として辻褄の合はぬ節も大分あるが、この頃の地方の代官に惡辣なのが多かつたことは德川時代史に相當ある。

一二、大江山鬼退治の道筋

＝傳說の跡を傳ふて京から丹後へ＝

嘗て土屋大夢先生がA新聞社で、編輯の朱筆を執りながら、たま〳〵大江山の話が出た時『酒呑童子は、本朝通紀に、叡山の小僧で、容貌甚だ美麗なり、僧徒その美を愛し酒を勸めて歡を交ゆ、この童醉ふて後時々人を嚙み血を舐り酒に和してこれを飲む、遂に魅となり行いて大江山に栖むとあり、近衞家の日記を寫したといふ曉松記には、大江山惡徒御退治の御目錄、渡邊舍人綱、酒田靱負公時、碓井荒次郎貞光、卜部六郎季武、源朝臣頼光、勅命を蒙り近日丹州大江山早く朝敵を討ち歸洛せしむるのみ、宜しく執達に預るべく候——源頼光、平井保昌殿、右同道にて御出、程なく御退散、御用向御隱密にて云々、右兩人立歸り御禮、臣等旅中の有樣、願之通り山伏之裝束免許、三月廿三日出立、同廿六日退治、右正曆元庚寅年三月とあるが勿論これは文の調子から見て德川中期の擬作と思ふ。和漢三才圖會には、丹波の國に强盜あり、嶮

を渉り谿を跨え大江山中に登り棲む、その黨共だ多し、常に赤毛を首に被り丹朱を面に浸し鬼形と僞り事を妖術に藉り劫盜となると尤らしく書いてゐるが、燕居雜話に素破抜いてゐる通り內典外典によつて作爲したものであることはいふまでもなからう。しかしいくらかの事實があつたとすれば日本海の沿岸、宮津あたりに漂着したロシヤ人か何かで、大江山の巖窟の中で女の血を啜つてゐたといふのは赤葡萄でも飲んでゐたのではないか。羅生門の鬼が渡邊の綱の首筋を掴みあげたといふのも、日本人に比べて馬鹿に脊が高かつたからだらう。空中を飛んだといふのも唯跳躍がうまかつたゞけのことで、蜘蛛の糸をひねり出したといふのも船出の時にやる紙テープの投げ方がうまかつたんだらうと』大きく笑つたことがあつた。

◎

この話につりこまれて、私は壯年の頃、大江山酒顚童子退治の繪卷に興味を覺え、京都から大江山の洞窟まで、賴光征戰の道筋を歩いて見た話をした。

京都を出て西へ三里、老の坂の舊道の傍に「鬼の首塚」といふのがある。傳說には酒呑童子の首を斬つて賴光主從がそこまで引揚げた時、童子の首が火を吹きながら地の上を轉がり〳〵追かけて來て、矢庭に賴光の頸にかぶりついた。けれど賴光が七枚兜を重ねてゐたので六枚ま

では咬み破つたが最後の一枚に齒が通らず、結局鬼の方が敗けて、賴光の手でそこに埋られた、さういふ因緣から頭痛持が祈願をこめれば立處に治してもらへるといふのである。

賴光の武勇を謳ふための七枚兜、曲藝師でもちよつと冠れさうには思はれぬが、遠い京から頭痛持の參詣者が、昔は相當にあつたものである。

それから八九里の西、兵庫縣多紀日置村上宿（かみじく）の街道端に「六本柳」といふのがある。賴光主從六人がそこで晝飯を食う時、柳の枝を折りとつて箸にした。そして今度の征伐が首尾よく成し果げられるなら、この箸から芽が吹くと、神明に祈誓をこめて地に挿した。果して鬼は殺され、柳は芽を吹いたといふのである。箸を挿したのなら六本柳でなく十二本柳でありさうなものだけれど、六本柳でなくては語呂が惡くて傳說のみだしにはなり憎い。

鐘ケ坂を越して氷上郡柏原の町を僅かに離れた石生（いそ）の小驛には「鬼殺し」といふ銘酒があつて、昔から今に釀造を續けてゐる。酒に目のない童子を醉はして殺すため一行がソコで酒を求め瓢簞に入れてめい〳〵腰にさげて行つたといふのである。

氷上郡と、京都府天田郡の郡境に「一萬騎坂」がある。賴光がソコまで連れて行つた軍勢を暫らく停めておいたところ。一萬の大軍は大袈裟だが、鬼に對する戒心がそれほど深かつた說

明にならぬこともない。その上に「一の貝峠」といふのがあつて一本の笠松が空に聳えてゐる。主從六人がそこで軍裝を解き六部姿に變裝して初めて法螺貝を吹いたからその名が起つたといふのである。

福知山市の東北、音無瀬川の流れを隔てゝ歪んだ富士のやうな姿をした裸山が鬼ケ城、酒呑童子の乾兒茨木童子の洞窟があるといふ話。これらは義民傳の中にも書いたが、三四里北の雲原といふ山の中には、頼光が杉の小枝を折つて杖にし、祈誓をこめて地に挿したのが根を下したから枝が悉く逆さまに延びてゐるといふ傳へを聞いてゐたので、氣をつけて見ると、亭々たる巨木、なるほど枝が上を向いてゐるやうにも思はれた。

◎

傳へらるゝ「歴史」があり、傳へらるゝ「傳說」があつても、その歴史、傳說の匂ひが少しも殘つてゐない由緒の地ほど、これを探求するものに淋しい感じを與へるものはない。その點からいふと、酒呑童子の傳說の殘る匂ひは、まだ濃い方に屬してゐる。よしその由緒が、誤れる傳說、作爲された傳說によつて面白く拵えあげられたものであつても、平仄が合はないながらに、いかにも本當らしくなつてゐると、いくらかでも、それらしい匂ひを嗅ぐことができたやうな氣がして、興味も覺え、平凡な一丘一木にも自ら詩情が湧いたりするものである。

◎

觀光も、世とゝもに氣短かになつて、花に好く、月に好いといふのすら、もう慌しい人の動き、心の動きに忘られやうとし、瞬間的に強い印象を與へる風光であるとか、現實的な快樂を與へる施設が整つてゐるとかでない限り、古い歴史、古い傳說の匂ひを靜かに探つて、滿足を覺えやうとするやうな風雅を、多くの人は持合はさないやうになつたが、本當の事をいふと、秀麗なる山水はさう急激に著しい變化を見せるものでなく、いつでも見れば見らるゝに反して歴史の地、傳說の地、由緒の地は、慌しい人、無關心な人達から放擲されるばかりでなく、近代的な交通機關の開發や、鑛物の採取などの關係から、無殘に破壞し去られるやうな事もあり、又生活の窮迫から殊に地方の人々には忠實に之を守る餘裕がなく、從つて殊勝な心がけも起らず、偶々古い寫本や珍本稀本に發見した興味を、實地に臨んでからスツカリ無くしてしまう經驗を心ある觀光の士は泌々體得された事であらうと思ふ。

古いものを護るといふことは、大きくいふと國體の本義を護るといふことにもなるのである。

一三、夏と浴衣と美女

「絽の羽織螢が着るとしまひなり」その通りに違ひないが、「なぜ急にいるえと女房縫はぬなり」といふもに、吹き出したくもなる。

「かたびらで來るを小袖で待つてゐる」可憐な娘心。そのかたびらに湯の字をつけて「湯帷子」といつたのが、いつしか「ゆかた」に省略されてしまつた。支那では昔「明衣」と書いた。以レ布爲二沐浴衣一也といふ註までついて論語の中に隱れてゐるから、まさに鐵筋コンクリートの中に花簪のお姫様が据つてゐる形である。

しかし「浴衣」よりも「明衣」と書いて「ゆかた」と讀ませた方がたしかに實感的でもあり爽やかな氣持もわからうといふものである。應仁後記の中に、

この時しも常々政元の傍を離れず、近侍しける波々伯部といふ小性の童、何の意もなく湯明衣を持來りしところを、戸倉これをも斬りつけり、薄手なりければ後には蘇生して一命を助

かり疵も漸く癒えたりける。

とあつて明衣の字がつかはれてゐる。建武年中行事の中にも「御ゆかたびらめしていらせ給ふ」など書かれてゐるから、湯あみの後にこの輕快な衣を纏ふたのは、日本でも古い昔からのことであることが知られる。

平家物語に「年のよはひ廿ばかりなる女房の、色白く淸げにて髪のかゞりまことに美しきが、目ゆひのかたびらに染めつけのゆまきして湯殿の戸あけて參りたり」とあつて、凄しくも艶なる姿が目のあたりにちら〳〵するが、湯かたびらが美しいのか、女が美しいのか、女が美しいからゆかたびらまでが美しく見えるのか、ゆかたびらが美しいから女までが美しく見えるのか、この境界線はバルカンあたりの國境線よりもやゝこしい。だがゆかたびらも、女も、越境をしたりしないで、ぴつたり仲好く喰ツついてゐるから面倒な紛爭も起らずに濟む。

「ものさしで足らぬ〳〵と叩いてゐ」徳用向きの女房が忙しい間の針の手、切角鋏をとつて裁らうとするが尺が足らぬ。ヒステリツクに鯨尺で反物の上を憎らしさうに叩いてゐる風景はまた面白いものである。けれど浴衣となれば、一寸二寸足らずとも大して氣にはならず、溫泉宿の借浴衣、六尺ゆたかの大男も四尺何寸の豆男も、同じやつを引かけるのだから、毛脛が丸

太ン棒のやうに出るか、乃至六代君の襁のやうに地を引きずるかの違ひだけで寧ろ爆笑の好材料ともなつて、一浴のあとの銚子に狂ひができる陽氣を生まう。この點ゆかたは反物の時からまことに民衆的にできてゐる。

「乞食かな　天地を着たる夏衣」　其角の句であつたと思ふ。皮肉のやうだが着想は大きい。だが「わびしげなるもの、年老ひたる乞食、いと寒き折にも、暑きにも」と、清少納言の感じの方が本當のことは、ぴつたり來る。歌麿や春信は好んで浴後の美人を描き、細い竹の箇のやうな脚を遠慮氣もなくぼうり出してゐるが、あれに乞食の着るわかめのやうなぼろ〳〵衣を着せておいては、執着を持つ繪になるまい。俳人は實感を押しつぶして美醜觀を蝗のやうに飛び越えんとし、女詩人は、美醜觀にとりもちのやうにこべりついて、一生を鏡の前で白いものをぬたくつて暮す。「江戸中におのしばつかり女だよ」と川柳子は、そのコツを知つて、うまいことと云うて愛の獨占を考へた。

去年の夏、招かれて九州の二日市から武雄、常願寺、阿久根と一夜がけの忙しい溫泉めぐりをしたら、どの宿でも、脇が裂けたり、袖がちぎれたりした、隨分ひどい浴衣を出した。物資統制が響き切つてゐたのである。湯の中をのぞくと古い水溜の中に浮いてゐるやうな白い小さ

なものが無數に浮游してゐる。どうしたのかと聞くとスフの手拭になつてから、それが皆湯の中で溶解して、何うにも仕方がありませんと三助がいふ。無常迅速の氣も起り、不良のスフを作つて、公益を忘れたやうな紡績會社の責任が問ひたくもなり、粗末に扱つた綿糸、勿體なかつたとも泌々思つた。

冬がよいといふ、春がよいといふ、夏がよいといふ、秋がよいといふ。人さま〳〵、それは健康にもよるであらうし、生れ、育ちの季節と環境によるかも知れぬが、私は一年の内で夏を一番尚ぶ。

甲子園のほとりに居をもつてゐる仕合せに夏ともなれば、野球がふんだんに見られる。焦げつくやうな日に照らされ、辨慶を油湯げにしたやうに眞赤になつて、汗を瀧のやうに流しながら歸つたあと、さつと冷たい水浴をすまして、浴衣がけ、不自由なビールの一杯も呼んでから、滿員電車の透く間を暫らく待たしくれ、何うだ一番と、寄つてくる友を捉え、風通しのよいポーチでパチパチとやつて見る快味は、恐らく笊黨のひとり知る醍醐味であらう。

春は陽氣に、いろ〳〵の花の誇りを見て、樂まれもするが、ともすると心に動搖が起る。秋は唯徒らに淋しくて、枯れ行く木々の梢に人生があれのこれのと對照され、年を取るほどいや

になる。冬は寒い、痩身には一入こたへる。夏はその何れもがなく、天地凡てがいき〳〵してゐて、時には百雷が大喝を喰らはし、叩きつけるやうな驟雨が積る鬱屈を洗ひ流してくれる。靜かに風にゆれる蚊帳の中の讀書もおちついてよいものであり、早起きに露を踏んでステツキを空にふり廻して見るのも、夏の朝なればこそである。

帷子も元は夏の女の姿をぢかには見せぬ心やりから衝立のやうにしてそれに薄い織物を貼り圍ひにしたのをかたびらといつたのであるが、その情緒の床しいところから、遂に女の身にも男の身にも纏ふやうになり、更にそれが一轉して、人間が一番赤裸々にならうとし、一番自然美をむき出しにしやうとしてゐる時の湯上りに多く用ゆるやうになつたところから、ゆかたびらの名が湧いた——。私はさういふ風に解釋してゐる、この解釋は夏を好む私の解釋として、間違つてはゐないと思ふ。

だが、夏とて、若い女がしどけなく浴衣着の肌を見せたやうな着樣は、決して好感のもてるものではない。胸をひろげ、腕をまくし立てた男に快い涼味を覺えても、女にはさう覺えない。これが男と女の、基礎から違ふところでもあらうか。昔の人も同じ感じを持つてゐたと見えて「身の形見」といふ本のなかに「御胸に常々御心を添へられ候はねば如何に美しき襟なりとも、しどけなくはふそくにひきなされ取り外しては、胸ひろがりて、乳の下まであき通り、見にくきこと出るものにて候、肝要は御引合せに御心を添へられ候はゞ下は自らあき候まじく候左事は又如何に見苦しきものなれども襟うき〳〵と着なし候へば、目もあやに守らるゝ業なりいかに美しきものなれども、身に引き纏ひて襟の行方見えなく見え候へば、あな淺ましと目をたつるものにて候」とある。襟一つの締め鹽梅で、女のつゝましさ、だらしなさが忽ち洞見されれる、一分出るか、二分引込むかと喧ましくいへば、襟の合せ方一つでも相當むつかしいものであらう。浴衣着の夏の女の姿がよいといはれたからとて、放心に着こなして膝を崩して、それで誰も喝采しやうといふのではない。

天文年間、鎌倉武士の染小袖の遺風を繪像にとめたものゝ中に、帷子を着たのがあつて右の片身は白地に燕子花の總模樣、左の片身は二寸ばかりの辨慶縞、紋は一所に三つゞつもつけてあり、上の一つは足利の兩引、下の二つの家紋の巴二つ、相口をさして、頭は天窓、狂言の花子の衣裳そつくりのものだといふやうなことが「筆のすさび」に書いてあるのを見たことがある。力と腕で鳴らした剛氣な鎌倉武士にも、帷子一つに優にやさしい、こんなおしやれもしてゐたのである。スフに反感を持つからとて、だらしない着方をしたのでは、夏のゆかたの女の

美も發揮されはしない。

奢侈禁止の强調から、夏の宴席も減つたことだが、立てこずんだ街の中の旗亭、煽風機がいくら唸つてゐても、暑い時には暑い。そこへ化粧をした女どもが、襟かき合はせ、太い帶を締め、雛段の人形が持つやうな小さい扇をバタ〳〵さして額の上に汗を浮かせながら取り圍んでくると、暑苦しくなつて、切角の料理も不味くなる。夏の宴席ばかり、かうした女はアウトにした方がどれだけ助かるかと、しば〳〵思ふが、全くさうはなりきつてくれぬ。

南米の有名な漫畫家ペンレーが日本に來てから、ブエノス、アイレスで座談會に臨んだ時、日本の婦人は歐米の婦人のやうに着物のデザインの苦勞で一生を費すやうなことがなく、昔からの簡單な裁ちと縫で、しかも優美に着こなしてゐる。その餘裕が日本を强くしてゐるといふやうな話をした。果して然るか。着物に憂身をやつさぬ日本婦人——何うかさうありたいものではあるが、ありたいものであると言へばいふほど、逆になつて行く日本の婦人でなければ、漫畫家のいつたことにくすぐつたさを感ずることもなくて濟む。

一四、旅に病む日の宿の料理

旅に病む。凡そ世の中にこれほどいやなことはあるまいと思ふ。丸で他人事のやうに腹が立つ、それに年をとつてゐると無常の淋しさも加はつて、元氣一ぱいに走り歩き旅ほど樂しいものはないと思つた壯年時代が追慕される。宿屋が病院でないことは承知してゐながら、病氣とあまりに駈け放れたことばかりがでゝくるので厭になる。發汗をして自ら寢衣を脱いで火鉢の火に乾かさばならぬ場合もある。醫者を賴むと「何うせこの風來客が」と思つてやつて來るのではないだらうが、ソ、クサと打診聽診を片づけ不得要領なことを、時間を惜しみ〳〵話して歸つてしまう。屆けられた藥は、水藥が赤酒と苦丁のカクテル、粉末藥が重曹にアンチピリンか何か、ざつとしたもの、新藥なんかふんだんに使つて居ては、使つてゐる方のバランスが參つてしまう。

さて食事なんだが、旅館の板場に病人食の研究をなぜしてゐないと責める事は、責める方が

無理だが、腸が惡くて困つて居ることを知つて居ても、和食だといへば蛤の潮煮を出したり海老天を出したり、それにハムの一皿を加へて得々としてゐるんだから堪らない。こちらから消化のよささうなものを考へて註文すると、味が滅茶苦茶、ふだん小言の蒟蒻で手古摺らしてゐる老妻の、いかに病夫に對して忠實であるかをつく〴〵知るのである。

惡寒がするから火をくれといつても、書寢込まれてゐての御用命は宿料の割增にもならず、宿にしても實は餘計なサービスなのだからハイ〳〵といつて、二時間も經つてから眞黑な炭を繼足しにくる。

隣座敷の客が出つ入りつし、高聲に放談しても、何とも制止のしやうがない。ビン〳〵痛む頭を抑へて溜息をついてゐるばかりである。

斯樣な苦汁を嘗めながら、私はとう〳〵十日あまり旅の宿に寢込んでしまつた。唯一人、よく氣のつく親切な女中がゐて、忙しい間を見計ひ、色々と世話してゐてくれたが國許から人が來て連れていんでしまつた。あとはもう賴んだことを投げつけるやうにしておいて時間があれば映畫の話をしたり、若い客をつかまへて笑つて見たり、クソツと思つた時に「さうだ、こゝは病院じやない、宿屋ぢや」と氣がつく。

寒い滿洲の旅空で頭から風を引いた時には、暖かなホテルのラヂエーターに凭れて、バイエルのアスピリンを呑み一夜の內に見事征服してしまつた。これは國を遠く離れてゐる緊張の所爲であつたかも知れぬ。パリの宿でヘコ垂れた時も、エビアンの水ばかり呑んで治つてしまつた。生じつか內地の、無理をして家に歸れば三五時間で歸れぬこともない中距離に病むのが、どつちつかずの氣分に支配されて、はつきり病氣離脫の轉機がやつて來ぬのかも知れぬ。

さうかうしてゐる內に、見舞に來て、こちらが寢ついて一度も病院へ足を踏み入れない間に見舞つてやらねばならぬ若人は急に死んでしまつた。それも昨日まで快方といふ電話だつたのに、今朝は一時に多量の喀血をして、回診があつて「大丈夫」と云ふ宣言を聞いてから五分と經たぬ內に瞑目してしまつたのである。

私は呆氣にとられてしまつた。醫者も知死期がソレほど分らぬものだらうかと、腹も立つた。兩親を呼ぶ、跡始末を談ずる。枕に頭をつけてゐてのことだから、凡てが滑らかに行く筈がない。だん〳〵宿に厄介をかけることが殖える。

旅での不祥は凡ての煩さに輪をかける。

こゝにおいてか「健康」のありがた味も思はれる。「家庭」といふものゝありがた味も思はれ

る。家の「晩菜」のありがた味も思はれる。

米の產地だ、せめて飯だけは美味いのが食へるだらうと思つてやつて來たのに、矢張り、公平に外米が這入つてゐる。酒一ぱい呑むでなし飯ばかりが生命の男にとつて、殊に病んでは淋しいことだ。今年の出來秋、五風十雨正しかれよと瑞穗を守る神々に心からお祈りするばかりであつた。

一五、新聞特ダネ苦勞物語

＝大阪二代目の知事＝

蜘蛛の巢を額にかぶつて檢事局の緣の下に聽耳を立てたり、心中物語のお先棒になつて、紅ゐの下紐で括り合はせた二つの魂のいれものが瀨戸內海の仇浪にゆられ〳〵て舞子あたりの岸邊についた、ソレとばかり八軒長家に、その片割の美人の生みの母を訪ねて見ると、井戸端に湯文字を洗ふあさましい姿、あんまりな幻滅の悲哀にがつかりした探訪時代が夢の昔になつて思ひ出話に水洟をすゝるやうになると、人間も墓穴の近きを思ふばかりで、華やかなりし其頃の記憶が、輸血位ぢや甦つて來ない。だが世相は變つた。今の若い人たちが見たら出來損ねの落語のやうに思はれるかも知れない。

◎

薩摩隼人、福島中佐の單騎遠征錄で若人の血を沸かした西村天囚翁が時のA社の社會部長—

—宇和島藩のお藏屋敷、それが、大新聞の根城だつた——その根城の雨垂の下にションボリ立つた男一疋。二代目の大阪府知事建野郷三君が、白鷺城下の淋しい家で猫を抱いて死んだ、巨人の最期は三面を賑すに足る、逸話を拾つて來い、と只それだけだ。何の糞ッと雨垂の下まで飛び出したが、逸話は足下に落ちてやしない。明治四十一年、僕が入社の翌日だ。世相は變る、今なら郷三の生立の一くさり、部長がいつて聞かせもしようし、聞きもしようがそんなに細々しく行屆いた時代でなかつた。

歩け！といふやつで夢遊病者のやうに大川の縁傳ひだ、西の方へぶら〳〵やつてゐる内に眼についたのが府知事の官舍、もう晩めし時で、御免といつて玄關に駈け上ると、警官上りで有名な高崎親章氏、辨慶のやうな面構へで出て來た。かけ出しの記者です、建野郷三の逸話を下さいと慄へながらやつたものだが、しつかり手答へ『建野が死んだか——ふうん——猫を抱いて——二十五六年も前の知事だな。』

隣り合ひの官房主事を呼んで『この男に官歴の綴りを見せてやれ』鶴の一聲はえらいもんだと思つた。何しろ晩酌にその主事君もほろ酔機嫌、今から府廳へ出かけて二十五年も前の知事の官歴を探し出すなんか、儲け役ぢや決してない。鞠躬如として彼は出かけた、自動車なんかない時代だ、勿論テクつた。

府廳に行つて見ると、宿直は松島あたりへでも出かけたんだらう、小使ひとり火鉢に嚙りついて涎を垂らしてゐた。鍵の所在が分らぬ。

もういゝからと、少々氣の毒になつて尻込む僕をせゝら笑つて、主事君大高源吾のかけ矢を納屋の隅から探し出して『何うせ明年度の豫算には修繕することになつてるんだ』と書類倉のドアの錠前をなぐりつぶして飛び込んだ。

山成す書類の綴込が塵埃をかぶつて、まさに前人未踏の地だ。主事君、猛然としてその中を縱横に跳ね廻り、約一時間にして、煙突の掃除屋そつくりの顏をしながら一冊の古帳面を引張出して來た。初代の知事渡邊昇が自慢の筆になる表紙、墨痕すりむけた、官歴簿だ。

初陣の功名、嬉しかつた、郷三の官歴、細字で十餘枚、筋はすつかりそれで分つたが、逸話にやならない。

又官邸に引返して、寫しとつた官歴を見せた。高崎知事は勿論ベットの中から這出して來て、鋭筆で走り書の僕の手帳を見たんだが朦朧たる睡眼の中にも蛇の道は蛇だ、逸話の緒口を見附けてくれた『コヽへ行つて見ろ』『ありがたう』で白男川といふ北の區長の官宅へ行つた、

午前一時三十分。

女中がひどく待たしてから出て來て『旦那さまは肺炎でお休みになつてゐます』『肺炎でも僕はちつともコワくありません、枕頭へ參りますから、是非會はして下さい』（考へて見ると、肺病と間違へてゐたやうにも思ふ）こつちの命にかゝはるやうな無茶苦茶をいつて枕頭にすわりこむまで漕ぎつけた。

建野鄕三は當年のハイカラ男、娼妓の賦金を官費として使用するのは穢らはしいと甘い理窟をつけてポケットにねぢこみ、すつかり機密費に使つてゐた時代のことだから、豪奢の程想ふべし。それが腕車ぢや威勢が惡いと獨逸から大枚三千兩を出して二頭立の馬車を買つたが谷町の官邸から江之子島の政府（大阪の人は時々今に府廳を政府といひます）まで走らせるには、道が狹くて通らない、到頭谷町通を擴げたといふ亂暴男。露帝が皇太子で奈良へ遊びに行つて提げた獵銃に神鹿の狙ひ擊をやりかけた時、神國を知らぬのかと怒鳴つて平伏した珍談、名物天神橋の架設に四十萬圓を投じて物議を釀すと二十年後には百萬兩でも架らぬぞと議員を大喝したいきさつ、四十度の高熱を忘れて、時の腰巾着白男川がゼイ〳〵咽喉を鳴らしながら、綿々として、盡きぬ逸話を頭の鉢がやぶれるほど詰め込んで、その枕頭を辭したのが午前四時、五

時には立賣堀の四十二銀行に支店長を叩き起して、根氣のよい話だ、白男川に尋ねて見ろと云はれた三四件を追ひ詰め、五時宅に歸つて、今とは違ふ、十字野の唐紙の原稿紙に毛筆を舐めて、書いたワ〳〵、小說でも書く積りで朝の九時までに四十枚。

一眠りして午後一時、恐ろしい氣持の初陣の收穫を、天囚翁に出すと、一枚々々丁寧にまくつて見て『ハア――何うしてこんなものを取つた。こりやア面白いが長いなア。長いけれども面白いなア。だがね、君』

それから記事の要領の概說を諄々として敎へられて、夕刊はない時代だし、翌日の新聞を、胸ワク〳〵で見ると、載りも載つたり、いくら勘定して見ても六十行、しきやない。

‖ 海を紫に染めた醬油 ‖

それから三年後の話。

大阪府警察部の天野衞生部長の机に紫色をした一合そこ〳〵の瓶が一本、嚴封をしておいてあるのが、朝少しばかり早廻りの習慣をつけてゐた僕の目についた。

隙を見て、嗅ひで見ると醬油らしい。半時の後分析の技師がやつて來て部長に囁いた『全く

油斷がなりません』部長は、僕がゐるのを知つて、目で技師に沈默の合圖をした。僕は知らぬ顏をしてその部屋を出た。

それから市内の八警察を小口押しに訪問して、到頭S署でサツカリンを混入した醬油を押收した事實を知つた、がどこから押收したか分らない。

ふとその時頭をかすめたのは最新式の機械によつて一ケ月に完全な醬油の釀造をすることを吹聽してゐる一千萬圓の大會社が大阪に近い某市にあるといふことだつた。

出かけて行つた。『只今重要會議中で面會ができぬ』といふS社長の返事だ。重要會議――押收――僕の疑念はます〳〵高まる。

根氣よく『會ひたい』ことを通ずると、出て來た、滿身に戰慄が見える。印度洋の熱帶下を通過しても腐敗しなかつたといふ某省の證明書まで見せて『當社には關係なし』と意氣軒昂、でもまだ慄へは止まつてゐない。

門を出て、最近解雇されたものがないか、盲探しに探してゐると、偶然か必然か、一人めつかつた。『エ、そりやもうズツと以前からのことで一ケ月に六百ポンドは東京の丸藥から取つてゐます、帳簿にはKといふ符合で記されてゐます』

紙上、それが特ダネとなつて現はれると財界に一波紋を描いて、特融銀行が揉消運動を初める。財界と人命と何れが重いか。と世間はとても喧ましい。到頭數百石を海に流して、大阪灣を紫に染めた。どゞその工場は火を發して全滅、S社長も病魔に斃れる。これを財的に救はうとした時の巨人某の豪腹も、結局は、自己に罪して富士山麓に隱れてしまつた。

‖ 櫻島の爆發 ‖

大正三年一月――。

六十年目、安政度以來の櫻島の大爆發、九州は全滅らしい、行け、といふ命令が、眞夜中、夢心地よい炬燵の中に鳴ひこんだ。

無暗に心配する細君、母者人に元氣のよいことをいつて物々しい旅裝、廣島ですれ違ふ汽車の屋根に白い灰のたまつてゐるのを見て、何行かの驛電にしながら、博多で餅三升、驛辨十、ビールの空瓶四打に水をつめ込み、それを雇つた二人の人夫に持たせて、これなら三日は大丈夫と、大混亂の汽車に、鹿兒島に入ると、大地は絶えず踊る、櫻島は一萬尺の空に猛烈な火を吹いて、雷はためき、光景慘澹。市に居殘つたのは知事と、警察官と、電信局員と、少數の市

民。

種はざらにある、ちとあり過ぎる。だが照國神社の庭にテント張の電信局の机上には電報がまさに文字通りの山を成してウナをつきつけても、とてものことに埒があかない、電話は無論不通だ。

電話をかけるに、十六時間の汽車を往復は恐らくレコードと思ふが、僕は考へて決心した。

『さうだ熊本へ行かう。』

滿腹の詩囊を抱へて午後六時に鹿兒島を立ち、矢武の嶮を突破して熊本へ着いたのが午前二時、驛前の研屋旅館に飛び込んで大阪への直通を申込んだ。時刻が時刻だから直に出た。二時間ぶつ通しに原稿をよんで、午前四時、熊本發鹿兒島行の列車に乘つた。

ぐつすり寢てやらうといふ算段は見事に外れ、威勢のよい旅裝と腕章が祟りを爲して見舞客が箱中總立ちになり、周圍を取卷いて狀況をうるさく聞く、寢る所の騷ぎか、こちらも昂奮して面白くなつて喋りつゞけで鹿兒島だ。

冒險意識に使嗾されて降灰盛んな櫻島に船をやり、斃馬の死骸を踏んで噴火口をのぞき、燃え盛りの石炭を積み上げた熔岩の壘壁を走つて、又午後の六時には熊本行の列車だ。

研屋では女中達までが面白がつてチヤント待つてゐてくれる『昨日の成績は』と先づ聞くと、大阪から『上々吉、第一信は二頁あつたぞ、飜譯に朝の九時までかゝつた、しつかりやつてくれ』

四日目に同業もこの手を知つてやり出したが、生憎とその日から鹿兒島よりの直通電話が利き出した。

‖ 青　島　戰 ‖

同じ年の八月。

山東嶗山灣の一角に御用船福壽丸からホリあげられて、從軍記者の第一歩だ。

驢馬の背に乘つて柳樹臺を汗で越して軍司令部のある張村に着いたのが二日目、美土路春泥君が、盛に特ダネを送つて喝采を博してゐるところへ、追かけにやられた僕は、記事は書くな寫眞ばかり取れと、これは軍部の窮屈な掟がさうさせたのでもあるが、社の方でも二人に書きなぐられては紙面がないと、軍部の掟をよいことにして僕の駄文を封じたのであつた。

つまり、その軍部の掟といふのは一社から一名の記者、一名の寫眞師しか從軍させぬ『だか

らお前は寫眞師として行け』だつたんだ。

こいツ記事より樂だ。ちよんと立つて、身體を一ぺんぐるッと廻はす間に七八ぺんパチ〳〵とシヤツターを切ると、逢つた光景がそれだけ出來る、それに說明をつけて送ればいゝ。

と思つたばかりでなく、事實またそんなものだつたんだが、檢閲の關係上、いくら面倒でも現像をして軍司令部へ見せに行かなければならぬ。提げて行つたタンクで寒い夜中にゴトゴト現像をして、宿舍に貰つた土人の土間を水だらけにする——時には悲しい氣持もした。

だが、空氣は清澄、腕には二十年の覺えがあり、構圖、焦點、寫度、我ながら滿點、こいつ歸つたらアマチユアーの藝術家どもを屁古垂らしてやるぞと威張つてゐたが、歸つて見るといつも失敗八〇%、空氣の清澄が日本とは全く比べものでないのだ。只天惠そのものだつたんだ。

藪野椋十君が大親分のやうな顏をしてゐたことを、今ひよつと思ひ出した。

それから——春泥君があまりに特種をつくり過ぎて、總攻擊を目睫に見ながら引揚げてしまふ。軍司令部に政治的の氣焰ばかり吐いて、種はちつともくれない山梨將軍に見限りをつけ、戰線の壕壕に、功名心に燃え立つてゐる若い將校を歷訪することにきめた。

敵彈が隨所に炸裂する中を、走り廻る苦しさは、彈丸が恐ろしいといふことでなく、足が痛

くてたまらないんだ。

今も僕は不思議と肌を離せないやうになつて持ち續けてゐるが、全くお守札のおかげだつたか、三つの危險を免れた。

十一月三日天長の佳節に總攻擊が開始され、間もなく白旗が揚つて青島陷落、壕道の開鑿と、重砲野砲の亂射に蜂の巣のやうになつた堡壘のありさまをカメラに入れるためには否が應でも東西三里の戰線を突破して見なければならぬ。

小湛山堡壘の斜面を、夢中になつて走つて居ると、輕くちよいと靴の先に引かゝつたものがある。第六感といふ奴が猛然と動いてヒヤリとした『地雷火ぢやないか』と凝視すると正に然り、青く草色に塗つた導火線が斜面の草叢の中に長く這つてゐる。モ一歩、靴に力が入つてゐたらドーンと來て粉微塵になるところだつたが、助つた。僕はお守札にキツスした。

それから、ちとさもしいお話だが、モルトケ兵營にまで僕等の宿舍が進められた時、矢鱈に腹が減つて堪らない、鯛のひものに半白飯の配給では『總攻擊の壯觀』の名文句も生れない。何がな獨兵の殘したハムの一切も落ちてさうなもんだと、兵營の中を蚤取眼で探してゐると、見つかつた。堂積みにした落雁の棒菓子、少しじくついてはゐるがと矢庭に口に持つて行つて

一かぶりやるとピリツト辛辣に唇を刺す、舌端には甘たるいやうな味覺。變に思つてよく見るとDYNAMITE――お守札に又キツスだ。

陷落の翌々日から埋沒地雷の掘出しを始めた、捕虜士官が埋設地圖を持つて堡壘の麓を案内してあるく、見つけ出すとソレに火をつけて爆發させる。壯觀だから寫眞に取つて特ダネに と兵營の方から出かけて行くと、ある小綺麗な民家の中から頻りに僕の名を呼ぶものがある。見ると攻擊第一線に風流中隊の名を馳せて掩蓋の立派さで有名だつた中隊の隊長だ。よくその掩蓋に泊めてもらつて、敵彈飛來の轟音を耳にしながら甚句をうたつたお馴染なので、やアといつて握手する『怪我はなかつたか』『先頭第一だ』何所へ行くといふから『地雷の爆發見物だ』『そんなものを見たつて面白くない、よい風呂を立てたから是非一浴みしろ』といふ、十日のあかを流したくもあり兵營のベツト虫にかまれて脊中ぢうがムヅ〳〵してゐる。では御馳走にならうと、庭先の土を掘つて小便壺を埋めた湯壺の乳いろをした湯の中に飛び込み、しんこになつてよれて出るあかをこすつてゐると、ドーンといふ何所かそこいらに凄じい地響がした。

それから物の五分間も經つと從卒が息せき歸つて來て『隊長、發掘地雷が焚火の中で大爆發、

焚火に暖を取つてゐた將校、兵卒、軍醫、〇〇名が死傷いたしました。』

僕は湯壺を行儀の惡い蛸入道のやうに跳ね上つて、三度目にお守札のキツスだ。それから現場に行つて、あの時中隊長が湯に入れてくれなかつたらと、感慨無量、地雷爆發の前後事情を聞き、筆にして軍事郵便に出したが、屆いたのは三年目。

一六、信仰と健康と良心

信仰と健康と、人間生活の實際において、私はこの二つを決して離すことの出來ぬものと思つてゐる。神佛の前で手を合はしていろ〳〵祈誓をこめるだけが信仰だとはいはれぬが、私はそれも信仰でないといふことはできぬと思つてゐる。

信仰とは自分の持つ良心の最高度の發露であつて、少くも自分自身にとつてこれほど尊いものはない筈である。

自然を尊び、民族を崇び、國家を敬愛する。これらは皆尊い清らかな信仰であらう。それらの尊い信仰を心に抱いて、靜かに默つてゐても、誰から何ともいはれることはないであらうが、その心を嚴肅な形において外に現はすことも決して惡いことではない。

神佛の前に跪き、頭をさげて祈る。この形を、人生無上の尊い姿として私は見る。

人生といふものはさま〳〵な障碍に包まれ、さま〳〵な議論に振り舞はされ、さま〳〵なものに脅かされ、さま〳〵なものに弄ばれてゐて、ひとり靜かに心を澄し、たゞ〳〵清らかさ、美しさ、朗かさの中に生活するといふやうな勝手はできぬ。そこで教育や、修養や鍛錬が必要といふことになるのであるが、それらのものには兎角議論が絡まり易い。生れた自然のまゝのものに、長い歴史によつて精練された「善」を手とり早く吹きこんで一日でも早く立派な人間に仕立て、それで國家社會の進展に盡さしめようといふのが教育なのだけれど、さう考へるものが神でなく人間であり、その人間の思想や、教養や、生活の環境がさま〳〵であるから、たやすく一樣には行かぬ。そのため折角教育は施されてもいろ〳〵の人間ができ上る。そして何にもかにも議論がつき纏ふて止まない。

單純でなく、複雜なのが人生であり、複雜を更に複雜にして行くのが「文化」といふものだらうけれど、冷靜に判斷して見ると、我々のやうな弱い人間は、何うにもこの「文化」に堪えられなくなつて來たやうだ。殊に年を取つて、過去を顧み、理想を顧み、現在を靜觀し、餘りもう長いとは思はれぬ餘生を想像して見ると、よい加減に「文化」の持つ複雜性を、できるだけ簡潔にして貰ひたいと思ふ。

手近な話が、水道があつても斷水が頻りにあるなら井戸の方がよい。電線が引いてあつても

電氣が來ぬほどなら井戸を始めから自動ポンプにせず跳釣瓶にしておいて朝夕入るだけの水を手汲みにしておけばよかつたのだ。ガソリンカーに爭つて乘つて燒け死ぬほどなら一時間も早く起床して草鞋がけであるけばよかつた。今日のやうに南京米やラングーン米や丸糯やを混合して硬軟さま〳〵な飯をたいてたべなければならぬなら、德川以前のやうに玄米ばかり食つて精白米の一種の魅力に感染してゐねばよかつたのだ。純綿がない、砂糖がない、炭がない、マツチがないと臺所は毎日喧ましいことだけれど、いよ〳〵ないとなればこれまでの平素の使ひ方の半分も要らずに結構濟ましてゆける經驗を得た。

何もかもが「文化」の生み出した機械力によつて、我々は恐ろしい贅澤もの、怠けものにされてゐたのである。それを餘り氣がつかなかつた。

百圓落して惜み百圓盗まれて惜むのは持つてゐたからである。始めから持つてゐなければ落しも盗まれもしない。かういふ話はいやな理屈のやうに聞えるけれど眞實である。珈琲を呑み馴れ、リプトンに執着を持つやうになりしてゐたゝめ、未練たらしく今に贋珈琲をのんで不平をいつたりしてゐるのだが、私たちの少年時代には、飲物といつて番茶の煮ぐたらしより何もなかつた。それで結構大きくなつて來た。喫茶店で氣焔をあげなくても青壯年時代は青壯年時

代らしく快活に過されて來た。

思へばそんな舶來物の需用も、悉く外國から借金をして輸入したものか、大切な日本の物貨を持出し勞力を持ち出して購ひ得たものばかりであつた。爲替關係からスツカリ輸入ができなくなつて、始めて「不自由」を感じ、それから「入らぬものを使つてゐた」ことを泌々と知るやうになつた。勿體ないことをしてゐた、餘計なことをしてゐたとも思ふ。

金があり物があり餘つてゐるアメリカは、砲火で世界を征服するまでに、映畫や自動車や裁縫ミシンで、かなり甚しく世界の經濟を征服した。自動車は人力車よりも便利であり文化的である、まアよからうと買つて見ると水では走らぬ、ガソリンが入る、それが日本には乏しいからアメリカから買ふ、何のことはない一臺の自動車は一萬圓でもそれを乘り潰すまでには何千圓かの飯がいる、これは大變である。映畫を見て、厄鬼になつて、人氣女優を自分の戀人のやうに吹聽していきつてゐる間に、素晴らしい金が日本から遁げた。こんなものを見なくてもよかつた時代の話をしても、誰も若いものは耳を傾けなかつた、そうしてアメリカに經濟的にしてやられてゐるなどいふことは考へてゐなかつた。今でも或はそんなことを考へてゐぬ人があるかも知れぬが、大藏省では一方ならず氣をもんでゐるのである。

こんなことを數へ立てゝゐると限りがない。つまり「文化」といふものゝあるものは我々を喜ばしたやうだが、結局苦しめたことになる、そしてその苦しみは、一旦うけた惡習慣が清掃されるまで深刻に〳〵と續く。

新藥が外國から這入らぬやうになつて、そのおかげで日本の製劑術は進歩もしたらうが、私の知る限りでは、使ひ馴れて澄してゐた「藥の從僕」でもありさうな醫師たちが忽ち不便を感じてゐるだけのことで、病者の生命にさう著しい勘定の狂ひが出たらうとは思はない。

殊に、健康――興健の問題になると、藥劑とは何の關係もないと見てよい。私は健康は強い信仰、つまり自己の良心の最高度の發露によつてよりよくなつて行くのではないかと思つてゐる。これを解り易くいふと、有難いことに「良心」といふものは「惡いことは惡い」「善いことは善い」と瞬間的に明確に判斷をして、いつも必ず「善につけ」といふことを教へてゐるものである。「朝寢はいけない」「嘘をいつてはいけない」「怠けてはいけない」「清く行動しなければいけない」「正直でなければいけない」「適當の運動をしなければいけない」「飽食、美食をしてはいけない」「萬事に贅澤な眞似をしてはいけない」かういふことを教へてくれる。これが良心」である。けれど現在その「良心」の持主が、自分の「良心」の教へる通りに行動し得ないことが多いのが所謂「凡人の世界」である「煩惱の世界」である。これはまた何といふ不思議なことであらう。

これがため「道德」が叫ばれ「法律」が必要になるのであるが、良心は萬人一樣なのだから、何とかして萬人が「良心」の命令通りに行動することにすれば、この世の中に極樂世界は現出するのである。

しかしこんな解り易い話が、何うしても實現しないのは、現世の「生活」といふものがさう容易なものでないからであり「良心」に服從することは肉體的に苦痛が多く「文化」といふ魔物にとかく幻惑されて「生活の向上」の方向を謬視してゐるものが殆ど凡てゞあるからだらう。

強い信仰――自分の良心の最高度の發露、これを斷じて忘れないで、尊い神明の前において祈誓を凝らす――慾張つたことをお願ひする――それは凡て自分の良心への誓約であると思つて、その祈誓の數々の凡てを自ら實現するやうに努力すれば、その信仰から敬愛、仁慈、健康、財、凡てのものが滾々として生れ出るのではなからうか。

斯う解すると、私は朝な〳〵輝く旭日を拜し、東方宮城を拜した後やがて神棚に柏手を打つ人々の澄んだ氣持を何よりも有難い結構な事だと思ふのである。尊いことだと思ふのである。

されば百の議論よりも「良心」の最高度の發露を希ふて、強い深い信仰を持つことが、一生一番大切なことで、さうした時の清い心の連續が健康を生み、健康から人生の幸福を享受し得ると信ずる。

一七、古器物愛翫―文化と武備

工藝美術の發達如何によつてその國の文化の程度を知ることができる。だが、今日のやうに國際關係が面倒になつて來ると、繪や彫塑で國防國家の強靱性を卜し、判斷してはゐられない。井上河内守正利は笠間五萬石を領し社寺奉行を勤めたが、當時奢侈の風習が上下に漲り、古器物愛翫の弊看過すべからざるものがあつた。正利はそれを忌々しいことに思ひ「上に立つものが人慾を極めて、奢りを盡す時には、必ず一般社會人の生活に何の寄與もしない無益の器物を造る名人が現はれて來るものだ。所謂東山時代に義政が茶事風流を弄んだため、色々な名人が簇出して、金銀漆の類を濫費し、なくてもがなの器物を次から次へと造り出した。それで庶民の生活がどれほど幸福になつたか、足利にしてもこれがそも〳〵衰運に向ふ兆ではなかつたか。將軍が愛翫すれば工人共は、名譽と利慾の爲渾身の工夫を凝らす。本當の盛世にはかういふものが出ない筈だ」と叱呼した。

ついこの間までの世相の一部を二百七十年も前に彼は說破してゐたのである。工藝美術の發達してゐないほどの國に、軍備の精鋭もあるべきではないから、無論この言凡てが傾聽に値する譯ではないが、强い魂、强い精神を第一としなければならぬ時代には、一方の誡めとして肝銘しておくべきではなからうか。つい此間まで行はれてゐた茶會、骨董物の高價入札——事その事よりも、その內面に潛む風流韻事にかこつけての、精神の惰弱弛緩が恐ろしいのである。

◎

尼崎の城主青山幸利は作法の非常にやかましい家風だといふ世間の聞えであつたが廣間の隅に炬燵が設けてあるのを或人が見つけて不審し、その譯を尋ねたところ、人には蔭と日向のあるもので、嚴寒に火の氣一つない所へ役人を詰めさせてゐては、身體冷え、氣屈していざといふ時役に立たぬそれで廣間の隅にも炬燵を置いてゐるのみならず彼の間、この間の悉くに屏風を立て、その中に炬燵ばかりでなく將棋、碁盤の類も置き、書物も備へ、勤番のものが樂しんで出仕し勤務をするやう心がけてゐる、だから誰にも心のゆとりがあつて政務の上に良い智惠も出してくれる。それも濫用さしてはいけないが、程よく樂しませれば決して惡い影響はないものだといつた。井上正利とは逆な言ひ方のやうだが、これにも一理はありさうだ。といつて銀行會社に碁將棋盤を置いたらといふのでは決してない。

◎

堀田筑前守正俊は「日本の唐の學問修養の仕方は逆でなければいけない。日本は義を先にして仁は後に、忠を先にして孝は後に、武を先にして文は後にしなければならぬ」といつた。三惑論を作つて將軍に呈したのも、時代に感じたところあつたがためといはれるが、今日に適應しない言葉でもないやうである。

一八、曲直二つの道——言葉と行ひ

江戸城を築いた太田道灌、幼名を鶴千代といつた。お父さんの資清も一寸手を措いたほどの腕白で、行く先が案じられるため或日膝元に呼びつけて「人間は正直でなければならぬ、たとへば障子のやうに眞直でないと立つてをれぬ」と訓戒した。鶴千代は默つて六曲屏風をかつぎ出し「曲つてゐないと立つてゐませんが、これは何うしたものでせう」といつた。これには資清も頭をかいた。老僧がうつかり戒律を說いたりすると、若い僧は「私はどこから生れたでせう」位言ふかも知れぬ。お寺さんに妻帶論の滅せざる所以、世の中に本當の結論といふものは容易に得られぬものである。

◎

北條長氏が小田原で馬盜人を捕へて責めると「いかにも私は馬を盜んだ、しかしあなたは國を盜んだぢやないか」といつた。統制破りの大物と小物の間に、時々これと似た感を與へられ

ることがある。どちらにしても正しいことではあるまい。

◎

始終閉めつゞけて用心してゐる勝手口を女中などが何かの拍子に、ちよつと忘れて開けてゐると、不思議にじつとねらひつめてゐたかのやうに、ソコから勸誘員、苦學をいふ物賣りなどが這入つて來る。ねらつてゐるのでない限り、さういふ種類のものが相當多く路上を徘徊してゐると解釋するより仕方がない。隙を行くのも大變だらうが、隙をつくらぬやうにするのも大變である。マジノ線でも破れる時には一ぺんに破れた。

◎

この間ある文學青年が來て、いろ〳〵話の末「ある映畫會社からシナリオを賴まれて舊劇物を眞劍になつて書くやうになつてから、忠孝の意義がハツキリ分るやうになりました。高等教育はうけても、德育に缺けてゐて、自由なことばかり考へてゐましたが」と微苦笑した。正直な告白と思ふ。かうした自覺のないものに、時局を說くのは迚もの骨である。首領く下から酒盃に手をかけるやうでは『重大時局』の認識もお座なりといふことになる。

◎

古へを知るのは結構なことだ。多くの教家が祖師の德を讃へるのは何よりもよいことである。けれど、その蔭にかくれて、時代に合うた行ひを濟るのは、卑怯であり、狡猾である。山川跋渉の「難行苦行」は、リュックサックをかついで意中の人とハイキングするのとは譯が違う。眞理の追窮も、人間のあらゆる義務も、責任も、生活も、昔の「難行苦行」今の「緊張と精勵と邁進」の中からのみ闡明せられ、果され、得られるのだ。人を讃めてよろこばれても、己れが讃められるのでなければ空の空だ。

◎

京都の名所司代と呼ばれた板倉重宗はある日茶屋永喜に向つて「俺は公事裁判の公平を期してゐる積りだが、世間は何と申してゐるか」と尋ねた。永喜は言下に「よくお叱りなされるので篤と理非の儀を申上げることもできぬと零してをります」と答へた。

よくぞ申してくれた、廳所で公事を聽く時憎い面をした奴がとかく申すと叱りつけるが成程それでは威に畏れて不辯舌なものは申開きもできまいと、それから神明に誓ひを立て、障子を隔てゝ被告原告の申條を聽くことにしたといふことである。長上にこの雅量と、この用意があれば處世の途は凡て正しく開けて行く。

一九、知らなかつた世界＝鮨詰列車の一夜

「六十餘歳にして始めての經驗、これはありがたい事だ」といつたら私のために莫座の中ばを割いてくれた、富士登山歸りの青年は、水のやうに澄んだ瞳を開いて靜かに笑つた。列車の鮨詰。滿員といふことは聞いてをり知つてゐても、發車の時間を考へたり、日を選んだり、色々工夫を凝らして、今日まで鮨づめ立づめの列車に乘るやうなことは餘りなかつたのである。

それが何うしても決めた時間に乘らねばならぬことになつて、而かも深夜に、始發驛でない、最も條件の惡い中間驛から乘るのだから、空席などあらうといふ蟲のよい希望は持つてゐなかつた。蒸暑い深夜、脛をかむ縞蚊を追ひながらプラットに待つてゐると、長蛇のやうな急行列車が這入つて來た。窓から覗くと何といふ凄さだ。空席どころか、車中立錐の餘地なく、デツキまで身動きもならぬ超滿員である。窓から覗いた私の鼻の先へ人いきれの臭ひがムーと襲ひかゝつてくる。見ると、人は人を踏み越え押しのけ突きのけて、蠢めくやうに動いてゐる。修

羅の巷にもひとしい圖だ。

呆れもしたが恐ろしくもなつて、三十分の後に來る次の急行を待つことにした。その列車が發車の間際に一人のインテリらしい中年の紳士が降りて來て「何といふ餓鬼道だ、非禮も甚しい、人を揉み苦茶にして平氣でをる憤慨に堪へないから降りた」と話しかけて虚ろな笑ひを見せた。間もなく次の急行が來たから、その紳士と一緒に一番どん尻の車に乘つたら、無論この急行も鮨詰だつた。全く身の置所もないので、デツキの僅かな間隙に立つてゐると、そのデツキの隅に金剛杖を扉に凭せ莫座を敷いて蹲つてゐた青年が膝をすぼめて半座を分ち「こゝにお据りなさい」といつてくれた。長途五時間の立往生は足の痛む老齢の私には堪へられさうにもない難行である。「さうですか有難う」と私は恐ろしい敏捷さをもつて、分たれた半座に腰を下した。そして、暫らくしてから「六十餘歳にして始めての經驗、これはありがたいことだ」と思はず口走つたのである。

通風もなく、汗と息との混合臭が、襲ひかゝつて窒息でもしさうだ。車内からヤケ糞に歌ひ出した歌謡曲が聞えて來る。私は鎔金の炎熱と闘ひながら佛印にある將士の苦を思うて、切めてこれ位の苦を舐めることは、私にとつて仕合せだと思ひ返し、實際また、六十幾年にして、始めて知つた列車鮨詰めの體驗。知つた〳〵と思つてゐる世の中に、まだどれほど、身にしめて知つてゐない世界があるか分つたものでないと、私自身の平常の知つたかぶりを痛いほど悔いた。

それから一時間半、N驛に着いて車中の人が三分一以上も下車、やつと腰掛に有りつくと、もう長々と横になつて寢たい欲望が起つて來た。長い間の自由に馴らされた私どもが、統制の窮屈をいふ。全く手に終へない私どもではある。奢侈令が出たりして、法律や規則で叱つてもらはねば自肅のできぬ私どもは、ほんとうに三省せねばならぬと、私は痛む腰と尻を抑へて、苦しさうに、眠りを取らうとしてゐる車中の人々をいつまでも見守つた。

二〇、その日の深き感激

紀元二千六百年、皇都における奉祝盛典の光景を音波によつて傳へられる感激に、歡喜の情をひとしうしながら、私は新らしく清めた卓によつて、八紘一宇の神武天皇建櫪原宮令を日本紀に據り謹書してゐた。筆半ばにして近衛首相の奏上したてまつる壽詞が神々しく耳をうつ、私はしばらく筆をおいて心耳を澄まし拜聽した。

◎

續いて首相が萬歳を三唱し、參會五萬の人々がこれに唱和した時私も起立して、遠くこれに和した。そして再び靜かに謹寫の筆を續けながら、千載一遇の機に生を享け、この尊い二千六百年前の詔勅を精神をこめて謹書してゐる、その半ばに壽詞が奏上され、萬歳が三唱された、この一枚の謹書の絹地、私ごとであるかも知れぬが、一億の民の一人である私にとつては一世一代、もう一枚といつて、絶對にその機會は來ぬのである。

さう思ふと熱い感激の涙が頰を傳うて流れた。私はそれを流れるに任せて拭はうともしなかつた。思ひを二千六百年の昔に馳せて、建國の神々しい姿を眼底に描き、悠久なる天地に、悠久の歴史を且つ編み且つ創造して行く、日本といふありがたい國體を、本當にしみ〴〵體得したまらない歡喜にひたつたのであつた。

◎

眇たる、小さな唯一人の民草で、國のため良き何事の一つもなし得ない私であつても、この歡喜にひたることは許されにゐる。と、恐らく奉祝式典の盛大を目のあたりに拜した人は、音波を通して知つた人は、ひとしく深い感激に打たれたことゝ思ふ。この感激は、決して一時の感激であつてはならない。永久の感激として、新興の途を滿ち〳〵たる勇氣で進んで行かねばならない。

◎

今新東亜建設のため懸命になつてゐて、その前途の遼遠を待ち遠しさうに呵いたりするものが一人でもあれば、二千六百年の昔を顧みよと告げたい。二千六百年といふ長い年月、長い歴史を經て、日本は今日の姿になつたのである。東亜の新建設が一年二年で成るものでないこ

と、而してかすに歳月を以てすればするほどより光輝あり、より力あるものとなり得るものであることが、今日紀元二千六百年に際會して一層ハツキリと認識せられたではないか。

◎

恐らく、この次、紀元二千七百年奉祝の盛典が擧げられる時には一億の民が二億ともなり、山川、更に伸びて、國の力がどれだけ大きくなつてゐるか、測り知れないものがあらう。さう思ふと、世界に比類のない歴史の中に息づく幸福を、たゞ輕やかな幸福とせず、血と汗を流せるだけ流して奮闘努力し、更に歴史の彩りを濃くすることに邁進せねばならぬといふ發奮の精神が雲のやうに湧き立つのを覺える。

二、文人としての菅公と空海

‖詩文の力‖

文章の有つ強い力、言葉の有つ強い力は、いつの時代においても、その時代を教へ、その時代を導き、その時代を覺醒せしめる。宗教的な見方から離れて、平安朝における文人としての二大偉人、菅公と空海の遺業――詩文の力――に職として文筆の一端に携はつた私は、崇敬の念禁ずる能はざるものがあるのである。

×　　×

空海の遺文として殘つてゐる主なるものは文鏡祕府論、遍照發揮性靈集、高野雜筆などで、その外に心經祕鍵、卽身成佛儀、智度論、十住心論など澤山あるけれども、これらは主として密教の教義に關する論議や疏であり、一般には理解の困難な點も多いが、文鏡祕府論は日本における最初の修辭學、文章軌範ともいふべき書で、大師が入唐の當時まで支那(唐)に行はれて

ゐた詩文の法則を書いた「詩格」その他多數のものを請來し、比較研究の上異つた部分の大切と思ふところを選擇摘出編纂したもので今日なほ誦すべく、後にこの祕府論を抄約して「文筆眼心抄」を選述したのが弘仁十一年中夏と序文に明記されてゐるから、祕府論は恐らく高雄山時代の編纂と思はれる。その序にいふ。

それ大仙の物を利する、名教を基となす。君子の時を濟ふ、文章これ本なり。故によく空中塵中に本有(本來具有)の字を開き、龜上龍上に自然の文を演ぶ。時變を三曜(日月星)に觀、化成を九州に察するが如きに至つては、金玉笙簧その文を爛して黔首(人民)を撫す。都たり煥たり、その章を燦かにして以て蒼生を馭む。然れば則ち、一は名の始めたり、文は則ち教の源なり。名教を以て宗とすれば、則ち文章は紀綱の要たり。世間出世、誰かよくこれを遺れんや。故に經に說く、阿毘跋致の菩薩必ず須らく先づ文章を解かるべしと。孔宣いへることあり「小子何ぞかの詩を學ぶことなき、詩は以て興すべく、以て觀るべし、邇くは父に事へ、遠くは君に事ふ、人として周南、邵南(詩經の篇の名)をまなばざれば、それなほ正に面を墻にして立てるがごとし」と。これにて知る、文章の義大なるかな遠いかな。文は五音奪はず、五彩ところを得たるをもつて名を立て、章は事理倶にあきらかにして文義昧からざるによつて號を樹つ。文によつて名を詮し、名を唱へて義を得たり。名義すでに顯はれて以て未だ悟らざるを覺らしむ。三教こゝにおいてくつばみ(轡)を分ち、五乘こゝにおいて轍をならぶ。こゝに、釋經妙にして入り難く、李篇玄にして和することとすくなし。桑籍近うして唱を爭ふ、游夏聞を得るの日、屈宋賦をつくるの時、兩漢の辭宗、三國の文伯、躰韻心に傳へ、音律口づから授く。沈侯、劉善の後、王、皎、崔、元のさき、盛んに四聲を談じて爭ふて病犯を吐く。黃卷、篋にあふれ、緗帙、車に滿てり。貧にして道を樂しむもの、望みを訪寫に絕え、童して學を好むもの、決をとるによしなし。貧道幼にして表舅について頗る藻麗を學びき。長じて西秦に入つて、ほゞ餘論を聽く。然りといへども志禪默に篤くしてこの事を屑にせず。爰に一多の後生あり、閑寂を文囿に扣き、詞花を詩圃に撞る。音響默しがたくして、卷を函杖にひらき、卽ち諸家の格式等をみて、彼の同異を勘ふるに、卷軸多しといへども要樞は則ち少し。名、異に、義、同じく、繁穢尤も甚し。余が癖癒えがたくして、卽ち刀筆を事とし、その重複を削つてその單號を存す。すべて一十五種の類あり。謂く聲譜調聲、八種の韻四聲の論、十七勢十四例、六義十體、八階六志、二十九種の對文、三十種の病累、十種の疾、論大意論對屬等これなり。卷軸を六合に配して、不朽を兩曜にかけたり。

名けて文鏡祕府論といふ。庶くは繙素好事の人、山野文會の士、千里を尋ねずして蛇珠自ら得、旁搜に煩はされずして彫龍期すべし。（原漢文）

卽ち治國の大本は文章にありとなし、この編を著述したのは、書を得る方法のない好學の徒のため、多數請來の詩書を繙き、繁閑よろしきを得るやう編纂したといふのであつて、其結文に「千里を尋ねずして蛇珠自ら得、旁搜に煩はされずして彫龍期すべし」とあるのを見ても、いかに抱負の大なりしかを知ることができる。現在においては文を行るに、難解な漢字の制限もやかましく、凡て達意を旨とし、平易に平易にといふ風になつてゐるけれども、平易には冗長が伴ひ易く、强い壓力を感じ得ない一面のあることも忘れてはならぬ。祕府論中にある名句で、文章に携はるものが知つておいてよいと思ふ二三を試みに拔いて見る。

詩はもと志なり、心にあるを志となし、言にあらはすを詩となす。情中に動いて言に形はる。然して後にこれを紙に書す。

それ文章を作るにはたゞ多く意を立つ。左に穿り、右に穴り、心を苦しましめ智を竭さしむ。必ず須く身を忘れて、拘束すべからず。思ひ若し來らずんば卽ち須らく情の放まゝにすべし。却つてこれを寬かにして境を生ぜしめよ。然して後に境を以てこれを照すときは思ひ則ち來る、來れば卽ち文を作れ。もしそれ境思來らざる時は作るべからず。

それ文章の興作は先づ氣を動かす。氣心を生じて、心言に發し、耳にきゝ、目に見えて、紙に錄す。意、萬人の境に出で、古人を格下に望み天海を方寸にあつむ。詩人の心を用ゆるまさにこゝにおいてすべし。

それ詩は入頭に卽ちその意を論ず、意盡るときは則ち肚ひ寬かなり。肚ひ寬かなるときは則ち、詩容顏を得て、物色下に亂る。尾に至れば則ち却つて前意を收む、節々として、かさねて須らく分付あるべし。

凡そ文を屬するの人は常に須らく意を作すべし。心を天海の外に凝し、思ひを元氣の前に用ひ、巧みに言詞を連ね、精しく意魄を練れよ、作るところの詞に古語を用ゆることなかれ、今に及んで字の舊意を爛かす。他の舊語を改めて、頭を移して尾に換ふ。かくの如きの人は終に長じ進まず。自性なきがために心を專すること能はず、思ひを苦しめ、見をいたしてならず。

凡そ詩人は夜間床頭に一盞の燈をおけ。若し睡り來らば睡に任せよ、睡さめては卽ち起きよ。興發して意なる、精神淸爽にして了々明白なり。

凡そ詩を作るの人は、皆自ら古人の詩語の精妙のところを抄して隨身の卷子となし、古を寫すを以て能となさず。意ひを衆人の先に立て、詞を群才の表に放つ。獨り創めて取るといへども耳目をして接がざらしむ。終に倚傍の手を患で、或は全章を引き、或は一句を挿む、以て古人の二字三字を相黏すを以て力となし、麗玉を瓦石にまじへ、芳芷を敗蘭にうゆ、たとひ善くとも亦他人の眉目なり、己が功にあらず。況んや善からざるをや。

或人曰く、詩は苦思することを要せず、苦思するときは則ち天眞を喪ふと、これ甚だ然らず、まことに須らく慮ひを險中にぬき、奇を象外にとり、飛動の句にかたどり、冥奥の思ひを寫す。それ、希世の珠は必ず驪龍の頷より出でたり、況んや幽に通じ變を含むをや。但し章をなして以後、その易き良ちあつて、思ふて爲さるがごときなるを貴ぶ。行行重ねて行行たり。君と生きて別離すと、これ易きに似て到り難きの例なり。且つ文章はその本性に關る。識高く、才劣なるものは理あまねくして文窒がる。才多くして識すくなきものは句よくして味少し。これにて知る、情に溺れて語を廢すれば則ち語は朴にして情暗く、語を事として情を輕んずれば則ち情かけて語淡し。巧拙清濁以て賢人の志を見ることあり。

それ詩の工は心に創まり情を以て地となし、興を以て經となし然して後に清音その風律に

凡そ詩を作るの人は、皆自ら古人の詩語の精妙のところを抄して隨身の卷子となして以て苦思を防ぐべし。文を作るに興もし來らずんば即ち須らく隨身の卷子を看て以て興を發すべし。

詩は意好く、眞にして、今に光り、古に絶れたるあらば即ち須らくこれを紙に書すべし。對と不對とを論せず。たゞ意を用ゆること方便しく、言語安穩なる、即ちこれを用ひよ。若し語勢は對あつて、言また安穩ならばます〳〵まさに善しとすべし。

凡そ文を作らば必ず須らく古人及び當時の高手の意を用ゆる處を看て新奇の調あらばこれを學べ。

凡そ神ひ安からざれば人をして暢びずして興なからしむ。興なければ即ち睡に任せよ。睡れば大に神を養ふ。常に須らく夜、燈を停めて自ら覺むるに任すべし。强ひて起くるを須ひず、强て起るときは即ち惛迷して覽るところ益なし。紙筆墨は常に須らく身に隨ふべし。興來らば即ち錄せよ、若し筆紙なければ、羈旅の間に、意ひ多く草々たり。舟行の後は即ち須らく安眠すべし、眠足るの後まことに清景多し、江山懷ろにみちて合て興を生ず。須らく事務を屏絶して、專ら情興に任すべし。これによつて若し製作あれば皆奇逸なり。

韻し麗句その文彩を増す。

凡そ製作の士、祖述門と多く、人心同じからず、文體各々異り。較べてこれをいはゞ博雅あり、清典あり、綺艶あり、宏壯あり、要約あり、切至あり（中略）凡そこの六事は文章の通義なり、苟もその宜きにあらざればこれを失ふこと遠し。博雅の失は緩なり、清典の失は輕なり、綺艶の失は淫なり、宏壯の失は誕なり、要約の失は闕なり、切至の失は直なり。

凡そ文章をつくること、須らく對屬すべし。誠に以れば、事、孤り立たず、必ず配疋あつて成る。上と下と、尊と卑と、有と無と、同と異と、去と來と、虛と實と、出と入と、是と非と、賢と愚と、悲と樂と、明と闇と、濁と清と、存と亡と、進と退との若き、此の如き等の狀ちを名づけて反對となす。これを除いて以外、ともに須らく類を以て之れを對す。一二三四は數の類なり、東西南北は方の類なり（中略）故に筆を援けて辭を措には必ず先づ對を知るべし。物を比するには各々その類に從ひ、人に擬するには必ずその倫においてす。これをこれ明めずんば未だ以て文を論ずべからず。

この祕府論は故内藤湖南博士が深く研究せられ、この中に引用された詩書も亡失して現在では支那にも日本にも求めることができず、僅かにこの祕府論中に片影を止めるのみのものが多

數あり、文獻上からいつてこの上もない貴重なものであることを高唱されてから漸く學界の注意を惹くやうになつたのである。

次に、「遍照發揮性靈集」は空海入定後、多數の遺文を高弟である高雄山神護寺第二世眞濟が撰集したものであるが、その序に空海の全貌を窺ふに足る讃辭がかゝげてある。曰く、

余（眞濟）わかゝりし時、頗る先氏の風を貴ぶ。志學の後、寂歷を樂んでこの事を屑にせず。幽人の幽行を仰ぎ、大道の大妙に耽る。ひとりの上人あり號して大遍照金剛空海といふ。青襟にして槐林（學界）の春秋を摘み、絳帳にして山河の英萃に富めり。遂に則ち域中の近智を陋んで超然の遠猷を慕ふ。俗を出でゝ眞に入り、僞を去けて貞を得たり。夐巖谿の美、神木靈草の區、耳目の經るところ未だ嘗て究めずんばあらず。毎に歎じて曰く、提葉凋落（佛教衰微）して久し、龍蛇何れの春をか待たん。吾が生の愚なる、誰れによつてか源に歸せん。但し法のあるあり。予を起すは天なり、天その願に隨つて果して求法に擢んでらる。去し延曆の末に命をふくんで入唐す。適々京城青龍寺の大德慧果阿闍梨に見ゆ。卽ち南天竺大辯正三藏の上足の弟子、代宗皇帝の師とし供するところなり。和尙始めて一ぴ目て以て喜び、待すること已に厚うして曰く、吾汝を待つこと久し、來ること何ぞ遲かりし、生期まさ

におへなんとす、精勤して早く受けよと。即ち二部の大曼荼羅の法、百餘部の祕藏を授く。上人の性たらく善く聲をきいて意を知り日に經て口に止むることを得。積年の功、旬時に學び得たり。大師も亦奄然として化に從ふ。故に付法していはく、今日本の沙門あり、來つて聖教を求むるに兩部の祕奥壇儀印契を以てす、唐梵差ふことなく、悉く心に受く瀉瓶の如し。よいかな汝、傳燈了んぬ。吾が願ひも足りぬと。金剛薩埵、大日の寂を扣きし後、いはゆる。第八の析負（眞言第八祖）たるは吾が師是れなり。故に命を傳ふるに唐梵の式を以てし、恩に答ふるに祕密の寶を以てするを得たり。眞言加持の道此日來漸し、曼荼羅の風この時彌布す。これ則ち我が上國の聖、聖運より出でゝ大化兼徹せるを以て、印度の新教をしてかくの如くの人に授けて來者を安んぜしむ。あゝ迷方に津を問ふ、何ぞ千里の即目なることを得ん。弟子久しく清塵をねがつて、恭しく下風に到る。鐘籟相響いて、新たに扣くこと舊の如し。事を執ふ年深く、いまだその淺きを見ず。まことに知りぬ、二氣龍に變じて雲雷音をなすといふことを、まことに虛言ならず。和尙（空海）昔し在唐の日離合の詩を作つて土僧惟上に贈る。前の御史大夫泉州の別駕馬惣は一時の大才なり。覽て則ち驚き怪んで因て詩を送つて曰く、何ぞ乃ち萬里より來れる、その才を衒ふにあらざるべし、增々學んで玄機を助けよ士人子が如きは稀なりと。その後籍甚邦に滿ち、緇素仰止す。詩賦往來やゝもすれば篋笥に剩れり。遂使んして絶域に憂を寫し、殊方に心を通す。詞翰俱に美にして誠に東方君子の風を興せり。故に毗陵子胡伯崇が歌に曰く、四句（いろは歌となりし四句の喝）を說て毗尼を演ぶ、凡そそれ聽くもの盡く歸依すと。天吾が師に假して伎術多からしむ。就中草聖最も狂逸なり。不可得にして再び見がたし。是を以て啄鷄奔獸の點ひとり九州に留り、涌雲廻水の畫盛んに八紘を變ず、或は煙霞に臥してひとりうそぶき、意に任せて賦詠し、或は天問にこたへ以て獻納し、手に隨つて章を成す。仙を慕ふ詩に高山に風起り易く、深海水量り難しといふ。又神泉に遊ぶに高臺は神の搆へ、人力にあらず、池鏡泓澄として日暉をふくむといふが如きに至つては比興爭ひ宣べて氣質衒揚す。風雅の勸戒煥乎として觀つべし。それその詩賦哀讃の作、碑誄表書の制、遇ふところにして作り、草案をからず、纔かに了るに競ひとらざれば再びこれをみるに由なし。弟子、金玉の谿谷にまじらんことを憂へ、蘭桂の秋の艾に壓れんことを憂へ、侍坐して集記するに五百以來の紙を得たり。兼ねて唐人の贈答をひろつて稍々警策を舉げてこの帙中に雜ふ。編みて十卷となして名けて「遍照發揮性靈集」といふ。その餘の調文卷別なるものは今の撰せざるところ。願くは吾が黨の好事、永く師迹を味

はんもの、禪餘の憩來をして時々このに文に披き對かはしめん。唯一菴の遊目に備ふ、誰か他人にうらしめんやと稱せん。

金玉の遺文、蒐めて五百枚になつたといふのである。恩師を思ふ眞濟のこの努力があつて、空海一生の文も詩も、その行ひも、今日に知ることができるのである。篇中の文、相當難解の字句も、我々が假名を用ゆるやうに極めて無造作に驅使されてをり空海の文に對する造稽のいかに深かつたかを思はしめる。非常に浩瀚なものだが、片鱗を知るため二三を拔く（原漢文）文の調子がよいので靜かに三讀四讀すれば興味深く分つてくる。

山に入る興　雜言

問ふ、師何の意あつてか深寒に入る、深嶽崎嶇として太だ安らかならず、上るに苦しみ下る時にも難む、山神木魅是が靡となせり。君見ずや君見ずや京城の御苑の桃李の紅なるを、灼灼芬芬として顏色同じ、一たび雨に開けば一たび風に散り、上に飄り下に飄つて園中に落つ、春女群がり來つて一たび手に折り春の鶯翔り集まつて啄んで空に飛ぶ。君見ずや、君見ずや、九州八島無量の人、古へより今來無常の身なり、堯舜禹湯と桀紂と、八元十亂と五臣と、西嬙嫫母支離の體、誰か能く萬年の春を保ち得たる。貴人も賤人も惣て死し去りぬ。

死し去り死し去つて灰塵と作りぬ。歌堂舞閣は野狐の里、夢の如く泡の如し電影の賓。君知るや否や、人此の如く、汝何ぞ長からん。朝夕に思ひ思へば腸を斷つに堪たり。汝が日は西山に半ば死せる士なり、汝が年は半ば過ぎて尸の起てるが如し。住らんや、住らんや一も益なし。行け、行け、止まらされ。いざや、いざや大空の師、住ることなかれ、住ることなかれ乳海の子。南山の松石は看れども厭かず、南嶽の清流は憐むこと已まず。浮華名利の毒に慢ることなかれ、三界火宅の裏に燒るゝことなかれ。斗藪（さつぱりと）して早く法身の里に入らん。

山中何の樂しみか有る　雜言

山中に何の樂しみかある。遂に爾永く歸ることを忘れたり。一の祕典、百の衲衣、雨に濕ひ雲に霑うて、塵とゝもに飛ぶ、徒らに飢え徒らに死して何の益かある。何れの師かこの事を以て非なりとなさん。君見ずや、君聽ずや、摩竭の鷲峰は釋迦の居、支那の臺嶽は曼殊の盧なり。我をば息惡修善の人と名づく。法界を家となし恩を報ずる賓なり（中略）子として貧に安んず。澗水一杯朝に命を支へ、山霞一咽夕に神を谷ふ。懸蘿細草體を覆ふに堪え、荊葉杉皮是れ我が茵なり。意ある天公は紺幕を垂れ、龍王は篤信にして白帳を陳ぬ。山鳥時に來つ

て歌うて一たび奏し、山猿輕く跳つて伎倫に絶たり。春華秋菊笑んで我に向ひ、曉月朝風情塵を洗ふ。一身の三密は塵滴に過ぎたり。十方法界の身に奉獻す、一片の香煙、經一口、菩提の妙果以て因となす、時華一掬讃一句、頭面一禮して丹宸に報ず。八部恭恭として法水に潤ひ、四生念念に各々眞を證せん。慧刀揮斫して全き牛なし、智火纔に放つて灰留まらず、不滅不生にして三劫を越たり、四魔百非憂ふるに足らず、大虛寥廓として圓光遍し、寂寞無爲にして樂しみなりやいなや。

以上二篇の雜言詩、空海何年頃の作か不明であるが、無常觀と大自然を愛する深遠な思想を知ると同時に、その文章において陰鬱でない、寧ろ強い華々しい勇氣を知ることができる。

勅賜の屏風書了つて卽ち献ずる表并に詩

沙門空海言す。去し六月二十七日、主殿助布勢海（トノモノスケフセノアマ）、五彩の吳綾錦（クレアヤニシキ）の緣の五尺の屏風四帖をもて山房に到り來れり　聖旨を奉宣して空海をして兩卷の古今詩人の秀句を書かしむ。忽ちに天命を奉はつて、驚悚たとへがたし。空海聞く、物類形を殊にし、事群體を分ち、舟車用をことにし、文武才ことなる。若しその能に當るときは事則ち通じて快く、用その宜しきを

失ふときは勞すといへども益なし。空海もと觀牛の念にふけつて久しく返鵠の書を絶つ。よもすがら數息す、誰か穿被に勞せん。終日修心す、何ぞ墨池にたえん。人曹喜はあらず、謬つて漢主の邸むにかへり。辭せんと欲すれども能はず、强ひて龍管を揮ふ。古人の筆論に云く、書は散なり、たゞ結裏をもつて能くすとするにあらず、必ず須らく心を境物に遊ばしめ、懐抱を散逸して、法を四時にとり、形を萬類に象り、これをもつて妙となす。是の故に蒼公が風心は鳥跡に擬して翰を揮ひ、王少が意氣は龍爪を想ふて筆を染む。蛇字は唐綜より起り、虫書は秋婦に發す。軒聖雲氣の興、務仙風韭の感、垂露懸針の體、鶴頭偃波の形、騏驎鸞鳳の名、瑞草芝英の相、かくの如きの六十餘體は、ともに皆人の心物に感じて作れるなり。或人の曰く、筆論筆經はたとへば詩家の格律の如し。詩はこれ聲を調へ病をさくるの制あり、書もまた病を除き理にかなふの道あり。詩人、聲と病とをさとらざれば誰か詩什に編まん。書は病と理とを明めざれば何ぞ書評に預らん。又詩を作るものは古體を學ぶを以て妙となし、古詩を寫すを以て能となさず。書も亦古意に擬するを以て善しとなし古跡に似たるを以て巧みとなさず。ゆへに古へより能書百家體ことなり、蔡雍大に笑ひ、鐘繇深く難ず、まことにゆへあるなり。空海たま〳〵解書の先生に遇てほゞ口訣を聞けり。然りといへども

志すところ、道別にして曾て心に留めず。今　聖雷の震響によつて心地の蟄字を拔く。六書の萃楚を折り八體の英華を摘む。轉筆を鼎態に學び超翰を草聖に擬す。山水を想ふて擺撥し、老少に法とつて終始す。君臣風化の道、上下の畫にふくみ、夫婦義貞の行、陰陽の點に藏めたり。客主揖讓し、弟昆友悌あり。三才變化し、四序生殺す。尊卑愛敬し、大小次第あり。隣里和平し、寰區肅恭す。これらの深義悉く字々に縕めり。功を書池に謝すといへども、ひそかに雅趣を庶幾ふ。またそれ右軍功を累ねてなほ未だその妙を得ず。衆藝沙を弄して始めて己にその極にかなへり。自外の凡庸何ぞ點畫の奥を解らん。いかに況んや空海、耳にその義を聞いて、心に理を存せず、空しく筆墨を費して、忝く珍屏をけがす、一たびは悚き一たびは懼れて心魂飛越す。ときに堯曦光を流して葵藿自ら感ず。山に對して管をとるに物にふれて興あり、自然の應覺えずして吟詠す。すなはち十韻を抽て敢て後へに書す。伏して乞ふ　天慈その罪過を宥したまへば幸甚幸甚。謹んで書くところの屏風及び秀句の本、表にそへて奉進す。輕々しく　聖覽をけがして伏して流汗をます。沙門空海、誠惶誠恐謹言。

弘仁七年八月十五日

沙門空海上表

蒼嶺白雪觀念人　等閑絕却草行眞　心遊佛會不レ遊レ筆　不レ顧揚波爾許春　豈謂明皇交染翰　鵲頭龍爪爲レ君陳　祥雲濃淡御邸出　瑞草秋冬感帝仁　青山翠岳見翔鳳　華苑瓊林望走麟　更有懸針與倒韭　切思相伴竭丹宸　龍管臨レ池調漆墨　烏光忽照點豪賓　暴風驟雨莫來汗　此是君王所愛珍　松巖數霧菴中濕　恐レ汗望レ晴經月旬　畫虎畫龍都不似　心寒心暑幾逡巡

筆を奉献する表

狸毛筆四管　眞書　草書　一

行書　寫書　一

右伏して昨日の進止を奉はつて、かつ筆生坂井名の清川をして造り得て奉進せしむ。空海海西において聽き見しところ此の如し。その中に大小、長短、强柔、齊尖なるものは、字勢の麤細に隨つてすべて取捨するのみ。毛を簡ぶの法、紙を纏ふの要、墨を染め藏め用ゆること並に皆傳へ訖ぬ。空海自家にして試みに新作のものを看るに、唐家におとらず。たゞ恐らくは星の好み各別にして　聖愛に允はざらんことを。このほか八分小書の樣、蹋書臨書の式、いまだ作ることを見ずといへども口授を具足するのみ。謹んで清川に附して奉進す。不宣、

謹んで進つる。弘仁三年六月七日、沙門空海進つる。

この二篇によつて空海の朝廷に對する忠誠を知ると同時に書道に對する抱負をも知ることができる。

表、書、願文等、摘錄すれば限りもないが空海の時代の教育、學問といへば上層階級に限られてゐた。空海はこれを遺憾とし綜藝種智院といふ普通教育機關を設け、一般民衆の教育に資し周到なる校則をも定めた。これは我が國の教育史上特筆すべき施設であつて、大師滅後經營難に陷り遂に東寺傳燈會の資金を賣るため院は賣却されたが(東寶記)校則を見て、理想に走らず實際に則した教師生徒の生活問題まで明記してあるのは注意すべき點だと思ふ。

綜藝種智院の式並に序

辭納言藤原大卿(中納言藤原三守)左九條の宅あり、地は二町に餘り、屋は則ち五間。東は施藥慈院に隣り、西は眞言の仁祠に近し。生休歸眞の原(死人を燒く原)南に迫り、衣食出內の坊北に居す。涌泉水鏡の如くにして表裏に、流水汎溢して左右なり。松竹風來つて琴箏の如く、梅柳雨催して錦繡の如し。春鳥哢聲あり、鴻雁ゆき飛ぶ、熱渴、臨めば卽ち除き、清

涼、憩へば卽ち至る。兌には白虎の大道あり。離には朱雀の小澤あり。緇素逍遙する何ぞ必ずしも山林のみならん。車馬往還すること朝夕に相續く。貧道、物を濟ふに意あつてひそかに三敎の院をこひねがふ。一言響きをはけば千金卽ち應ず。永く券契(地券)をすて、遠く冒地を期す、給孤の金を敷くことを勞せずして忽ちに勝軍の林泉を得たり。本願忽ちに感じて、名を樹て、綜藝種智院といふ。試みに式をつくつて記して曰く。もしそれ九流六藝は代を濟ふの舟梁、十藏五明は人を利するの惟れ寶なり。故に能く三世の如來兼學して大覺をなし、十方の賢聖綜通して遍知を證す。いまだあらじ一味善膳をなし、片音妙曲を調ふるものは。身を立つるの要、國を治むるの道、生死を伊陀に斷じ、涅槃を密多に證すること、これをすて、誰ぞ。是をもつて前來の聖帝賢臣、寺を建て、院を置き、これを仰いで道を弘む。然りといへども毗訶(寺僧)の方袍はひとへに佛經を翫び、槐序の茂廉(茂士孝廉卽ち優れたる士)は空しく外書に耽る。三敎の策、五明の簡のごときに至つては壅泥通ぜず。かるがゆへに綜藝種智院を建て、普く三敎をおさめて、もろ〳〵の能者を招く。冀ふところは三曜炳著にして、昏夜を迷衢に照らし、五乘くつばみをならべて群庶を覺苑に驅らん。或人難じて曰く。然れども猶事先覺にもれて終に未だその美なるを見ず、何となれば備僕射の二敎、石納言の

荒亭、かくの如き等の院、ともに皆始あつて終りなく、人去つて跡穢たりと。答ふ、物の興廢は必ず人に由る、人の昇沈は定つて道にあり、大海は衆流に資て、以て深きを致し、蘇迷（蘇迷盧、須彌山と同じ）は衆山に越えて以て高きをなす。大厦は群材の支持するところ、元首は肱股の扶保するところなり、然れば則ち類多きものは竭きがたく、偶すくなきものは傾き易し。自然の理然らしむ。今願ふところは一人恩を降し、三公力をあはせて、諸氏の英貴諸宗の大德、我と志を同ふせば百世繼ぐことをなさん。難者の曰く、善し。或は人あつて難じて曰く、國家廣く痒序（學校）を開いて諸藝を勸め勵ます。霹靂の下には蚊響何の益かあらん。答ふ大唐の城には、坊々に閭塾を置て普く童稚を敎へ、縣々に鄉學を開いて、廣く青衿を導く。この故に才子城に滿ち、藝士國にみてり。今この華城にはたゞ一の大學のみあつて閭塾あることなし。是の故に貧賤の子弟津を問ふにところなく、遠方の好事往還するに疲れ多し、今この一院を建てゝ普く童蒙を濟はん、亦よからざらんや。難者の曰く、もし能く果してかくの如くんば美を盡し善を盡せり、兩曜とともにして明を爭ひ、二儀とともにして久しきを競はん、國を益するの勝計、人を利するの寶州なりと。余不敏なりといへども一簀を九仞になげ、涓塵を八埏に添へて四恩の廣德を報じ三點の良因となさん。

一、師を招く草　語に曰く、仁を美となす、擇で仁にをらずんば、いかんぞ智を得ん。また曰く六藝に遊ぶと。經に曰く、初の阿闍梨は衆藝を兼ね綜ぶと。論に曰く、菩薩、菩提を成ぜんがために先づ五明のところに於て法を求むと。是の故に善財童子は百十の城を巡て、五十の師を尋ね、常啼（ジョウタイ）菩薩は常に一市に哭して切ろに深法を求む。然れば則ち智を得ることは仁者の處にあり。覺をなすことは五明の法による。法を求むることは必ず衆師の中においてし、道を學ぶことは當に衣食の資けにあるべし。四者備つて而して後に功あり。是の故にこの四緣を設けて群生を利濟す。處あり法ありといふといへども、若し師なくんば解を得るに由なし。故に先づ師を請ず。師に二種あり、一には道、二には俗、道は佛經を傳ふる所以、俗は外書を弘むる所以なり。眞俗離れずとは我が師の雅言なり。

一、道人傳受の事　右顯密二敎は僧の意樂なり、兼ねて外書に通ぜんとならば住俗の士にまかすべし。意に內の經論を學ばんことをこのむものあらば、法師、心に四量四攝に住して勞倦を辭せざれ。貴賤を看ることなくして宜しきに隨つて指授せよ。

一、俗の博士敎授の事　右九經、三玄三史、七略七代、若しくば文、若しくば筆等の書の中に、若しくば音、若しくば訓、或は句讀、或は通義、一部一帙、童蒙をひらくに堪た

らんものは住すべし。もし道人、意に外典をこのまんものは、茂士、孝廉宜しきに隨つて傳授せよ。若し青衿、黄口の文書を學ぶ志あらば、絳帳先生、心慈悲に住し、思ひ忠孝に存して、貴賤を論せず、貧富を看ず、宜きに隨つて提撕し、人を誨て倦まざれ。三界は吾が子なりとは大覺の師吼、四海は兄弟なりとは將聖の美談なり、仰がざるべからず。

一、師資糧食の事　それ人は懸瓠（垣根にさがつてゐる瓢）にあらずとは孔丘の格言なり、皆衣食住とは釋尊の所談なり。然れば則ちその道を弘めんとおもはゞ、必ず須らくその人に飯すべし。若しくば道、若しくば俗、或は師、或は資、學道に心あらんものには、ともに須らく給すべし。然りといへども道人素より清貧を事とす。いまだ資費を辨せず、しばらく若干の物を入る。若し國を益し人を利する意あり、志、迷を出で覺を證せんことを求むるものは、同じく涓塵をすてゝこの願ひを相濟へ。生々世々に同じく佛乘に駕して共に群生を利せん。

天長五年十二月十五日

大僧都空海記

空海の詩文の力とその味、その魅力は以上で了知できると思ふが後の學者、殊に佛教を嫌厭した徳川期の儒者、國學者は、四六駢驪體の文を形容に過ぎ、華麗と誇長に過ぎるといひ、字句に捉はれて實質を離れたやうに批評したけれども、空海一代の遺業を見るとその所懐を述べたところに一致してゐないものはないのだから、文の華麗を以て單なる文飾となすは斷じて當らない。惟ふに空海の文は爛熟した唐の文藻を、空海自身の持つ天性の才で立派に日本化して、櫻の花のやうな華麗と明朗性を加えたものであらう。殊に青年時代の空海はさういふこだわりのない濶達にして朗かであり、しかも極めて敏俊な、意志の强固な人であつたらしいことが詩文によつて想像され、中年を過ぎてからも、强固な意志がまま〳〵强固になつて行つたことが、遺業のあとを見て知ることができるのである。

×　　×

菅公の文章は菅家文章、菅家後草等によつて知ることができる。菅公の文章は空海と異り、重厚にしていかにも學者の家の出らしい言はゞ消極的な公の性格がよく詩文の上に反映してゐて、年を積むに隨ひ、詩文に、月が謠はれ花が歌はれてゐても、公一生の最後を支配した愁はしい運命觀が底の方にいつも潜やかに流れてゐるやうな感じがする。或はこれは讀むもの〻先入主からかも知れず、恐らくは時代精神の反映といふこともあらうけれど、天分性格に違つた

ところがあつた爲めといふのが正しい見方であらうと思ふ。

菅公は右大臣にまでなつて、國政運行の首班となつたけれども、元來が政治家肌の人でなく、殊に博士の家の出で、久しく門地を誇つて來た藤原と、權を逆にするやうな地位に置かれたのだから、君恩に感激し、歡喜滿悅の情を抑へることができぬと同時に、相當な苦悶もあつたことゝ想像される。

歷年體に編纂された菅家文章菅家後草を讀んで行くと、まだ十一歳の少年時代「月は耀いて晴雪の如く、梅花は照る星に似たり、憐むべし金鏡轉じ、庭上玉芳馨し」と讀まれたやうな可憐な作は別として、貞觀十年二十四歳文章得業生時代には圍碁を見て「一死一生道を爭ふて頻なり、手談厭却口談の人、殷勤愧ず相嘲弄し、漫りに說く當家積薪(積薪碁經のこと)あり」といつたやうな洒落も讀まれてをり、その時代の碁客が今日と同じく手の方はお留守にして口ばかりで鬪ひ、諧謔的な罵聲を交して樂しんだありさまが目の前に甦つて來るやうだ。七月六日の文會に「秋來つて六日未だ全く秋ならず、自露珠の如く月鈎に似たり、一たび流年を感じて心最も苦しみ、詩酒に困まずして愁ひを消さず」なども文會の席の吟詠だから輕い氣持の諧謔も含まれてゐるのだらうが、青年にして早くも「流年を感ずる」あたり、公の單なる修辭とは解されまいと思ふ。

菅公は空海と違つて、朝廷奉仕の人であり、四十二歳牧民官として讚岐守となり任地に赴くまでは、民衆と接して事を行ふ機會などなかつたのであるから、大した波瀾もなく、詩文によつて、思想感情の傾向を知るのみであるが、三十八歳大學寮の講座で諸生教授の任を負ふに當り、「博士難」の古調詩を讀まれたのを見ると、その榮達を嫉んで相當迫害も加はらうとしてゐたことが想像される。曰く、

五家の老將にあらず、儒學を歸耕に代ふ、祖父の位は三品、慈父の職は公卿、已に知り稽古に力め、當に施して子孫榮ゆ。我れ秀才に舉らるるの日、箕裘の勤成らんと欲し、我れ博士となるの歳、堂構幸ひに經營、萬人皆競ふて賀せり。慈父獨り相驚く、何を以ての故か、曰く汝の孤惸を悲しむと。博士の官賤しきにあらず、祿輕きにあらず、吾れ先にこの職を經て之を愼み、人情を畏れ、始めて慈誨を聞いてより氷を履んで安行ならず、四年朝議あり、我をして諸生に授けしむ、纔か三日にして耳に誹謗の聲を聞く。今年舉牒を修め取捨甚だ分明なり、才なくして先づ捨つるものは纔ロし、虛名を訴ふ。教授するに我に失なし、選び舉るに我に平あり。誠なるかな慈父の令、我を未だ萠さゞると誡む。

結局公の愼み深い眞面目さと弱さが窺はれるが、しかし職の神聖を守つて試驗における優劣の判定取捨に公平を期しあらぬ讒訴を耳にしながらも讓らなかつたところに、文人としての公の尊さがあり清らかさがある。

元慶七年、三十九歳の年には朝議により治部大輔として、渤海より來朝の使節裴頲の接待役を命ぜられ、鴻臚館において島田忠臣とゝもに禮儀のとても難かしい接待を勤めた。四月二十、九日から五月十一日までの間に贈答同和の作詩五十八首に及んだといふから公の文藻の豐富であつたことが知られると同時に、恐らく漢音(支那語)も出來たことゝ思ふ。使節は公の詩文を見て「白樂天に似たり」といつたといふことであるが、白氏の詩を慕つた當時にあつて公に比肩しこれだけの詩作が出來るものは一人もなかつた。

この大役が見事に果されると又誹謗の聲が起つた。使節がほめた詩を悉く惡詩だといつて冷評するのである。その時公は、憂情に堪えず「詩情怨」古調十韻を作つて懷ひをのべた、即ち、

去歳は世驚く、詩を作つて巧みなるに。今年は人謗る詩を作つて拙きことを。鴻臚館裏驪珠を失ひ、卿相門前白雪を歌ふ。顯名賤くして匿名貴きにあらず、先作優にして後作劣れるにあらず。一人口を開いて萬人喧しく、賢者言を出して愚者悅ぶ。十里百里又千里、駟馬龍の如くなれども舌及ばず、六年七年若は八年、一生水の如く穢名滿つ、此名何の水ぞ清潔にすることを得ん。天鑑從來孔だ明かなることあり、人間則ち哲なかるべからず。我を惡み偏にこれを儒翰といふ。去年世驚き自然に絶し、我を呵して終に實落書となす、今年人謗る眞の說にあらず。

博士の家として詩作を惡しざまに罵られることは致命的であり、世相の汚濁を悲しんで出家遁世まで考へられたやうだが、それを以て公の氣の弱さを知るまでに、公の文才が群を拔いてをり、その群衆のため誹謗のいかに意地惡く流布されたかを知ればよいのである。

＝産業の戰士と牧民官＝

空海は産業戰士としての活躍が相當にある。讃岐における滿濃池の大工事、三年を費しても出來なかつた築堤の難工事を、土地の民人よりの請願により朝命をうけて出かけてから百姓たちを動員して、壇を設け修法を行ひつゝ僅か三ケ月にして竣成せしめ、旱魃の憂ひを除き、今にその恩澤を蒙らしめてをり、全國各地を行脚巡錫して石炭を發見し、石油ガスを發見し、道路を作り梁橋を架し、井戸を掘つたといふやうな事蹟は各地に傳說となり文獻となつて相當多

く殘つてゐる。中には尊崇のあまり後人が附會したと思はれるやうなもの、鄉土人や僧侶たちが繁榮策として唱へ出したものがないでもないが、とにかくさうした傳へらるゝ遺業の華々しいのに比し、菅公は、牧民官として直接民衆に接した期間も短かく地方統治の上に殘された文や詩を見ると、藤原一統の嫉視による結果として始めて帝都を離れる左遷にもひとしいこの外任が、或は結局煩悶の多い公の胸中に却つて安易な思ひをさせたらしく推察さるゝのみで、統治の事蹟の目に立つものはないけれども、詩文は圓熟していよ〳〵光りを放ち、地方の古老にも接して、百姓のため雨を祈り山神を祭る等、重厚な菅公らしい四年間の治蹟、民の父母として立つた氣持は十分知ることができる。しかし、「始めて二毛を見る」の詩に「我れ潘に老ゆ一十年（潘とは晋の潘岳のことで三十二歳の時に白毛を生じ秋興賦を作つた、それに老ゆ一十年といふのだから菅公四十二歳といふことである）二毛何處甚だ留連、當初は見ず今初めて見る。是れ愁ひ多く海壖に臥するがためなり」や「秋天の月」に「千悶消亡す千日の醉、百愁安んぞ慰めん百花の春、一生三秋の月を見ず、天下まさに腸斷の人なかるべし」や「秋」の題下に「涯分浮沈更に誰に問はん、秋來つて唔は倍し、客居悲し、老松窓下風凉しきところ、疎竹籬頭月落つるの時、琴を彈じかねて酒を飲むを解せず、唯佛を讃へて且つ詩を吟ずるに堪ゆ、夜深

山に路樵の歌罷んで、殊に恨む隣鷄曉を報ずるの遲きを」など誦し來つて、都を離れたの寂寞感哀愁感が、公の胸中に一ぱいになつてゐることを泌々と思ひ至り、この一大詩人、一大文人の不遇の境涯に一掬の涙なき能はず、眼前に孤獨中年の茫然たる姿をまざ〳〵と見る心地がする。

「路に白頭翁に遇ふ」の長詩がある、これを見れば公が任に在る地の統治上の過去と公の方針がほゞ窺はれる。曰く、

路に白頭の翁に遇ふ、白頭雪の如く面はなほ紅なり、自ら說く行年九十八、妻なく子なく獨り身窮す。三び問ふ茅屋南山の下、農せず商せず雲霧の中、屋裏の資財一栢匱、匱中物あり一竹籠と。白頭說き竟つて我れ爲に詰る、老年の紅面何の方術ぞ、已に妻子なく又財なくして、容體充ち肥えたり具さに陳述せよ。白頭杖を拋ち馬前に拜す。慇懃に請ふて曰く因緣を敍せん。貞觀の末年元慶の始め、政に慈愛なく法に偏ること多し、旱災ありといへども上に言はず、疫死ありといへども哀憐せず、四千餘戶荊棘を生ず、十有一縣爨煙なし。適々明府に逢ふ安を氏となす（今の野州別駕）奔波晝夜鄉里を巡る、遠く名聲に感じて、走る者は還り、周ねく賑恤を施して、疲るゝものは起つ、吏民相對して下は上を尊び、老弱相携へて母

は子を知れり。更に使君保、名あるを得たり（今の豫州刺史藤原保則）臥聽流るゝが如く境内清し、春春を行らずして春過く達り、秋秋を省みずして秋大ゐに成る、二天（日月）五袴（富民）康衢（繁華街）頌へ、多黍兩つに岐る道路の聲。愚翁幸に保と安の德に遇ふ、妻なく農せずして心自ら得たり、五保衣を得て身甚だ溫かに、四隣飯を共にして口常に食す、樂みその中に在り、憂憤を斷ち心に他念なく筋力を增す、覺えず鬢邊霜氣侵し、自然面上桃花の色と。白頭口に陳ぶる詞を聞いて、白頭反覆の思ひを謝遣す。安を氏となす者は我が兄の義保に名ある者は我父慈なり。已に父兄遺愛の在るあり、願くば積善に因つて能く治むるを得ん。就中何事が舊に仍り難からん。明月春風遇はざるの時、奔波を學ばんと欲して身最も懶く、將に臥聽に隨はんとして年未だ衰へず、自餘の政理變なしとしがたし、奔波の間我詩を詠ぜん。

官舍の前に菊を植ゑて樂しみ、近郊に蓮池を尋ねてその根を掘り縣内二十八ヶ寺に分ち、海に釣し、懺悔會に願文をさゝげなどして、その間に例の喧ましかつた阿衡の爭ひに遠く文を送つて和解をなす等、四年の在任は公をして淋しい僻邊に憂苦を重ねしめたのも事實であるが、その一面に著しい心境の變化を喚んだのも事實であつて、感情高い數多の詩篇のうら悲しい吟韻の裏面に、深く悟道に入つた落着きのある公の面影を見ることができる。碎けていへば都をはなれて田舍に苦勞した甲斐があつたのである。果然公は間もなく召し返されて一年の後藏人頭に任ぜられた、異數の拔擢である。

×

空海は延曆十四年、二十二歳の時、入唐求法の決意をして、爾來約十年を準備に費し、漢音卽ち支那語を音博士について學び、旅費を貯へ、三十一歳になつて遣唐使藤原葛野麿の船に同乘、約二十年留學のつもりで玄海黃海の波濤を乘りきり死線を潛つて憧れの長安の都に着いた當時は世界一の文化の都、今でこそ共產軍の巢窟として皇軍の絕えざる攻擊をうけてゐるが、宮殿列び建つて天空を摩し道路は四方に通じ、人馬の往來織るが如く、高位高官、高僧、詩人學者、藝術家が雲の如くに集まり、その華やかさは恐らく目もはゆるばかりであつたらう。

×

けれど學すでに高く、智すでに深い空海には、この世界一の文化の都の文化も强い憧れを抱いて千辛萬苦を重ね訪ねて行つたほどの價値は不幸にしてみつからなかつた。そのため悉曇も僅かな時日で研究を終へ、多數の經卷、經書、詩文の書、繪畫、佛具の類をかき集め、僅か一年半の留學で眞言宗第八祖の傳法灌頂までうけてさつさと歸朝してしまつた。

菅公はこれと反對であつて、遣唐使として渡唐するやうにといふ命をうけたのが五十歳の寬

平六年八月のことで、年齢も空海の入唐時に比べ二十年も違つてゐるが、菅公はその時「在唐中の中瓘といふ留學僧から、最早唐において日本の文化を向上せしむるために學ぶ何物もないばかりでなく、遣唐使を送る度風波の難で貴重な人命を失つてゐる。それを冒して、疲弊の極凋落の一路を辿つてゐる唐を見る必要はなくなつたといつて來てゐる。これは決して自己一身のため申すのではないが、よく朝議を盡して遣唐使は向後止めることにしていたゞきたい」といふ意味の上表をした。結局これによつて、以來もう遣唐使は出さぬことになつた。これは日本の外交史上歴史的な事實であるが、空海入唐歸朝の大同元年から寛平六年まで年數にして八十八年、即ち百年足らずの間に、日本の文物は非常な進歩を見せ、最早唐より學ぶ何物もないところまで推し進んだことを知ると同時に、運命的にいつても入唐については菅公と空海が違つた立場にあつたことを興味深くも感ずるのである。

全體、佛典經書の類が奈良朝時代から日本へ續々傳はるやうになつて、唐より來朝の學者僧侶も多く、朝鮮からも來る、何れも博識の士や高僧偉人ばかりのやうに思つた時代も長かつたのであるが、無論これには買かぶりもあり、中には相當なまやかしものも混つてゐて、それが菅公の時代になり、自然鑑別もつき、殊に博覽强記の菅公にはよく分つてゐたと思ふ。空海は入唐までに支那語がよく熟達してゐたやうであるが、菅公も勿論これが出來、來朝の渤海の使節を京都の鴻臚館に迎へた時も接待役として活躍してゐる。されば菅公ほどの學才文才を持つてゐて、何を態々入唐の必要があるかといふ意見の立つたのは寧ろ當然であり、日本は日本として、起てばよい日本にはすでに日本としての文化が立派に生育してゐる、かう考へて、彼の國に頭を下げるやうな性質の遣唐使を出す必要はなからうといふ確信を廟議にさゝげたのである。

＝天神さま、お大師さま＝

菅公と弘法、一生を通じての足跡を討ねて相當違つた色彩を見る樣に思ふが、菅公にしても空海にしても日本文化の上に築きあげた功績は共に偉大であり、殊に高所と限らず一般民衆の上に及ぼした感化力は全く景仰の外はない。「天神さま」といへば三尺の童子も直ちに菅公であることを知り「お大師さま」といへば、外に大師の賜號をもつた高僧が多數あるに拘らず直ちに弘法、即ち空海を思ふ。私ども小さい時分おやつを貰つて小言をいふと母に「遍照金剛いふな」といつて誡められた記憶があり、九つの時には父に伴はれて丹波の山奥から始めて京への旅に

上り、北野に賽し梅樹を獻じた記憶が昨日のやうに甦る。父は剛直で曲つたことを非常に憎み、村の仕事をしてゐる上でも、厳しいことを言ひ過ぎる自覺があり、自然無實のことを言ひかけられる心配があるとて菅公を念じ寃罪など受けないやう「天神さま」の信心を忘れぬとゝもに讀書力のつくやう字がよくかけるやう、子供たちにも祈願をすゝめた。さういふことから私をつれて態々立願をこめに參詣したのであつたが。獻木の梅は幸ひ根を下して今では相當な老木となり幹に洞ろができるまでになつた。二年前それを見て當年を思ひ出し「獻げたる若木の梅も老ひにきと幹のうつろをなでゝ見つ笑む」の一句を、その老木に手帖の端に書いてさげて見たりした。篠舍漫筆に「京都の俗、妓女の輩、專ら菅神を信仰す。文學筆道のためにもあらず、專ら祈禱の心なるも、考ふるに白木屋といふ淨瑠璃本のおこまが詞に、思ふ男のために梅を一生たつよしいひて、菅神にいもせの緣を祈りしことあり、恐らくはこれらに基くなるべし」とあるのを見て「手習の神さま」として庶人が崇めたありさまを如實に見るやうな氣がしたことである。

×

偉人の德を追慕し景仰するあまり、後人がいろ〳〵の作り話を拵らへ、今日これを見れば荒唐無稽であることを直に知るやうな繪卷の類が澤山あり、却つて德を傷けてゐるやうに思ふけれど、その時代には一般に左樣に信じたことでもあらうから溯つてこれを咎立てする必要はない。菅公が時平一統への恨みを晴らすため天上して雷となり京中を鳴り渡つたといふやうな話も時平を憎み菅公を崇めるあまりの所產であり、空海が五筆同時の運行、流水の上の顯字、雲間指頭の文字の顯現、應天門の投筆等の說話もその流達の筆致を讃へる心持が生んだ說話に違ひないが、庶民敬慕の狀態を知る資料としてはかういふ說話もあながちに棄て去ることはできないのだ。

×

菅公一生の事業中、今日なほその恩惠をうけてゐるのは勅命をうけて編纂された「類聚國史」である。その一部は亡失して傳はつてゐないけれどもカードのやうな樣式が考へられてゐない昔にあゝした類聚を作られたことは創意的な大事業であつて、後の歷史家、學者たちがどれだけ便宜を得たか計り知られぬものがあり、空海の心經祕鑰や十住心論は宗敎界に深い智識を與へた。

こゝで兩偉人の側面的な方面を覗いて見ると、空海が唐から歸つて高雄に入山の時分には京

都の寺院、僧侶、俗人たちの風儀が相當に紊亂してゐて朝廷からは屢次禁令が發せられ「寺を勝手に賣買してはならぬ、寺を質入してはならぬ、尼僧が姿をやつして男僧の寺へ忍び行つてはいかぬ」と嚴しく誡示されたけれども容易にその弊は矯められなかつた。空海はその時「女人はこれ萬性の本、民を弘め門を繼ぐものなり、然れども佛弟子において親厚すれば諸惡の根源、嗷々の本なり、故に女人に親近すべからず、僧房の内に入らしむべからず、もし要言ありて諸家の使至らば、外戸に立てゝ速かに返報してこれを歸らしめ、時刻を廻らすことを得ざれ」といひ、高野山に女人堂を設け奥の院に通ずる別の小徑を設け山内の僧坊に女人の入ることを固く禁じた。五十歳の時、京都の東寺を密教の根本道場として朝廷より賜はつた時も、高野山と違つて都會のことであり、女人との交渉は一層面倒であつたと想像されるが、矢張り嚴重にその親近を誡めてゐる。されば空海の一生を通じて潤ひのあるやうな傳説はあまり殘つてゐない。

けれど唯一つ、元享釋書にかういふ話が出てゐる。眞井御前といふ美しい婦人が空海を景仰して京都をぬけ出で今の六甲山の東にある甲山の延命寺のあるところに菴を結んで行ひを澄した。招かれて空海も三度ばかりこの菴を訪ね、密教の教義を説き灌頂を授け、遂に山中を探つて大きな櫻の木をみつけ、それで眞井御前の像を彫つた、ソレが現在本尊になつてゐる國寶如意輪觀音だといふことで、不思議な暗合とでもいふか、深い佛緣とでもいふか、空海が高野山において金剛の大乘に入つた承和二年三月十五日、眞井御前は高野山の方を向つて合掌したまゝ示寂したといふのである。これがあらはに書かれた空海と女性との交渉の唯一のもので、元享釋書は相當作り話の多い書だから、少しドラマチックに出來過ぎてゐると思ふけれども、當時空海に對して人々の信仰の熱度がいかに熾烈であつたかを知ると同時に情味もある清らかな佳話だと思ふ。

菅公は大臣であり、儒者である。類聚名物考によると、北の方は吉祥女といひ、京都の西南吉祥寺村に菅家の別業があつて、その趾が社になつてゐるとあり。また一説には西園寺家の娘であつたがお名も傳記も分らない、花園大明神として祀つたさうだとある。江戸龜井戸の天滿宮の社寺には北の方と公達が相殿に祀つてあるが、公達は十四方だとあり博多太宰府の方では二十餘人の公達と傳へてゐるが、何れにしても子女は男女を合して相當多かつたのが事實のやうである。これらのことがよく分らないのは藤原時平が菅公左遷の後何もかも記錄の凡てを燒きすてゝしまつたからであらう。現に眞蹟にしても空海の方は東寺の風信帖、七祖像の行狀記、

仁和寺の三十帖策子、醍醐寺の狸毛筆奉獻表、高山寺の玉篇、灌頂記、高野山の三敎指歸と隨分澤山殘つてゐるが、菅公のは京燒けの關係にもよらうが全く絶無といつてもよい。德川期に出來た隨筆「異說まち〳〵」には筑前安樂寺に離レ家三四月、落涙數千行の眞蹟ありといひ、「雲錦隨筆」には近江餘吳の庄菅山寺に直作の眞像あり世にありがたき尊像也とあるけれども、何れも眞蹟でないといふ。恐らくは楠公千早城の壁書と同樣、後年公を崇拜する何人かによつて擬作せられたものだらう。

これらのことゝ關係があるやうでないかも知れぬが不思議なのは、空海があれだけ華やかな文を書き、また汎く信仰の對象となつてゐるに拘らず、後年戲曲に書かれたりしたものは殆んど稀であるのに、菅公の方は近松の筆による院本天神記があり、竹田出雲、並木手柳卽ち並木宗輔、三好松洛、竹田小出雲合作の菅原傳授手習鑑があり今に度々上演されてゐる。何故かういふ違ひができたか？。これは恐らく菅公の讒によつて左遷されたといふ傷ましい事實が深く人心に喰ひ入り、自然多感な文人たちの筆を動かすやうになつたのではないかと思ふ。だから戲曲の上でも菅公に對する敬虔な氣持が筆の調子で失はれたりはしてゐない。

‖溫かい光り‖

平安朝の二大偉人、文人としての菅公と空海、性格も、歩んだ道も違つてゐるが偉大な遺業と景仰には甲乙なく、天滿宮、高野山、ともに賽者絶えず、我々の胸の奥にいつも溫かい光りを與へてもらつてゐるのである。

二二、天明綺談『紅緒の箱』

天明八年京の大火から數へて昭和十五年が丁度百五十年。
この一小話を書いて見る氣になつた。

（一）朝鮮松

京都御所の西、上長者町の興元寺の廣い庭、秋も過ぎて、堆高く降り積つた落葉を、要助は曲つた腰に熊手を杖つくやうにして丹念にかきあつめてゐた。何羽かの雀が淋しさうに啼いては木枯の波に乘つて、塀越しに隣りの庭へ飛んで行く。

泉水のほとりに、一本の朝鮮松が、いゝ枝ぶりを見せてゐた。

隣の店の錢を盜んだ十三の一人息子の七之助を、年が十五に滿ちてないため勘當する譯にも行かず「暫く預つて嚴しい躾をして見るから」といふ大阪の親類に託し、それが苦の因で間もなく妻は世を去り、ほんとうの一人ボッチになつたので、慾い家を持つてゐるため、こんな煩ひもできるのだと、一念發起、家財一切を人手に渡し、少しばかりの緣を賴つて、本名治良兵衛を要助と改め、この興元寺の寺男に住みこんだ十何年か前には、朝鮮松も弱々（よは〳〵）しい姿をしてゐた。

要助は朝な夕なの掃除ごと、珍らしい朝鮮松のいた〳〵しい生長を見て、不思議に心を惹かれ、何としても立派に育てゝ見やうと、人知れず苦心した。

その甲斐あつて朝鮮松は勢ひよく伸びて行つた。枝ぶりも面白くなつたし、葉並もよく揃ひ、よく茂つた。

それを見て要助は、大阪の親類に預けた倅の七之助が、この通りになつてゐてくれゝばと何度も思つた。非情の草木でも心をつけてやれば斯うなるのに、親としての子に對する愛と敎への力が足らなかつたのかと、悔ひたいやうな氣持にもなつた。

一腰伸して、ホッと息ついた時、和尙の禪惠が納所の方から出て來た。

「要助」

「はい」と要助は尻からげを下して這ひつくばつた。

「お前は一度、將軍さまのお膝元、花のお江戸を見たい〳〵といふておつたが、好い機會があれば本當に行つて見る氣かの」

「はい、かやうに上人さまのお情に救はれましてから早や十六年、ご覽なさりませ、小さか

つたこの松が、このやうに大きくなつて參りました。今も初めて參つた時のことを思ふて、腰も曲る筈ぢや、白髪もふへる筈ぢやと、上人さまのご恩のほどをつくづくありがたく思ふてゐたところでございます」

「それはそれとして、本當に江戸へ行く氣なら、今からそろ〳〵支度をしておいて、この正月に出立しては何うかと思ふ。丁度今日五條坂の六兵衛さんが來て、商用の都合で、來春早々江戸下りをしやうと思ふ。供の衆二人は決つてをるが、モ一人ほしい、實着なものが見つからんで困つてをるといふことであつた。それなら納に心當りがあるコレ〳〵だといふと六兵衛さんも、それなら誠に結構で。年が年だから少し心配にはなるが、十六年一日も病氣をしたことがないとなれば大丈夫だらう。まだ間もあることだし、能く聞いておいて下されと、今し方歸つて行かれた。納は打つてつけのこと〻思ふがの」

と禪惠は慈眼を細くした。

これが要助の六十を五つも越した老の運命に思はぬ悲しみと歡びとを、めまぐるしく齎す因果綯ひ交ぜの序幕であるとは、和尚の禪惠も、愚直一遍の要助も思ひ及ばぬことであつた。

「お上人さま、ありがたうございます。暫く留守にいたしましても、小僧衆が少し氣をつけて下されば、お庭に塵もたまりますまい。お慈悲に甘へた申條でございますが、それでは來春お暇をいたゞきまして六兵衛さまのお供をさしていたゞきます」

と要助は筋の高い拳で目頭を擦つた。

「それがよい。路銀も多くは要るまいが、お前の蓄へだけで足らねば、納がお布施を分けてやる」

「滅相もない、それまでのご心配は決しておかけいたしませぬ。家を疊みました時の銀子、まだしつかり腰につけてをりまする」

「さうか、ではまア暇々に草鞋でも造つておきやれ」

(二) 江戸の旅

天明八年申正月二十九日、要助は旅裝束も甲斐々々しく、五條坂の窯元六兵衛に伴なはれて、二人の若い供の衆と〻もに京の街を立つた。

京に生れて、京の水に育つて、六十五年、一歩も洛外へ踏み出したことのない要助である。旅といふものが樂しい中にも恐ろしかつた。寺男の友達に聞いた胡麻の蠅の話、追剝の話、飯

盛女の話、川止めの話、江戸へ出てから辻斬の話、火事の話、どれもこれも老いさらばうた自分の身一つに降りかゝつて來るものゝやうにも思はれて、路銀と一緒にしつかり懐中に入れた觀世音菩薩の守札を何度上から撫でたことか。

それに引かへて旅馴れた六兵衛は呑氣なものだつた。供の衆に持たした瓢箪を、時々肩から卸さしては、立呑みにキユツと呑んで、すた〳〵と歩いて行く。嘲弄うやうなことをいつては要助に糟臭い息を吹きかける。それがまた要助には心配でならなかつた。こんな調子で呑み續けて行つたら、宿では何なことになるかも知れぬ。胡麻の蠅、飯盛女、危いことだ、和上さんもあまり話がウマいと思つたが、こんなことを隱してござつた、罪なことだと、まだ逢坂をやつと越したばかりだのに、スツカリ憂鬱になつてしまつた。

勢多の唐橋を渡つて、比叡颪が寒く水面を吹きまくる琵琶湖の漫々たる大水にびつくりしながら、その夜遲く草津に着いて、鍛冶源といふ宿に泊つた。

出て來る女中も出て來る女中もみな怪しい飯盛女に見えて、要助はできるだけ物をいふまいと、隅の方に堅くなつて、働きさかり男盛りの六兵衛と若い供の衆二人の擧動を監視してゐた。間違つて女が手でもかけたら飛びかゝつてやらうといふ身構へである。

けれどさういふ機會も來なかつた。機嫌よく飲んで、機嫌よく飯を食つてしまへば、あとは弱法師の謠曲である。要助は謠曲の中でも弱法師だけはよく知つてゐた。禪惠上人に毎夜のやうに聞かされてゐたからである。

供の衆二人の若いのが、いつの間にか姿を消した。要助はさア來たぞと思つた。けれどそれも間もなく何所からか歸つて來た。

とう〳〵何のこともなくて枕につくやうになつた。旅枕、興元寺の男部屋よりはズツと心持がよい筈だが、要助は眠られなかつた。薄暗い行燈の火に天井板の紋樣を眺めては胡麻の蠅、追剝と恐ろしいことばかり考へてゐた。外は物凄いやうな風の唸りである。

急にもう江戸下りをやめて、元の興元寺へ歸りたくなつた。泉水のほとりで辛苦をして育てあげた朝鮮松を眺めてをりさへすれば無事である。今更この年になつて大江戸見物をして見たところでソレが何になる。後學のためといふのも、これから先の長い人生の旅に何か役立つことがあればこそだが、六十五にもなつて、命數の盡きるのも最う目の前に見えてゐる、餘計なことを考へたものだつた。一生の思ひ出にと思つたが、全く詰らぬことだつたと、ソコまで來ると、十六年養つてもらつた禪惠上人が懐かしくて堪らなかなつた。勘當をした息子のことも、

亡くなつた女房のことも思ひ出しはしなかつたが、和尚の慈愛に滿ちた痘の圓い顏が暗い天井の隅にちら〳〵してならなかつた。

隣の部屋に臥した六兵衛は、豪傑のやうな高い鼾をかいてゐる。臥床を並べた若い供の衆も快い白河夜舟である。

落ちこむやうな疲れに、諦めが出て、何か知ら恐い夢を二つ三つ見た間に、夜が明けたといつて、女中が起しに來た。

要助は龜山のチョン兵衛のやうに跳ね起きた。胡麻の蠅は助かつたと、一ぱいの感謝で、臍の上の守札を抑へたことである。

舌を灼くやうな熱い飯を味噌汁といつしよに掻きこんで、四人は鍛冶源を出た「またお歸りに」といふ女中たちの笑顏は寢不足の血の氣のない、白粉のとろ剝げのした笑顏であつた。

その笑顏が西の空をじつと見あげて「けふの明方の赤さは大變だつた」といふ呟き聲が要助の耳に陰に響いた。

ハツと思ふて問ひ糺して見やうとした時「さア行かう」と六兵衛は元氣よく歩き出した。

要助は糺して見る機會を失つた。

(三) 京の大火

正月の朝の冷たい空氣が、要助の重い氣持をいくらか爽かにした。

「寒いなア」といつては、出立ち早々からまた瓢箪の口にかぢりつく六兵衛の所作も、元氣な賴もしいものに思はれた。

草津の町を靄の中に離れて一里、守山から愛知川、日が大分高くなつた頃篠原に着いた。その昔木曾義仲が齋藤實盛の首を洗ふたといふ鏡の里の小さな池は、水も涸れて萎れた赤い草が一ぱいかぶさつてゐた。

「關ケ原は寒いぞ、今夜は高宮泊りにしやうなア」

と六兵衛は若い衆にいつた。

「要助さん、お前、大丈夫歩けるかェ」

と若い衆の一人がいつた。

「何の、これしき」

と要助は、喘んでくる息を嚙み殺して答へた。

「ヤツ、ヨツ、ヤツ――」
突然、後の方から早駕籠の掛聲が聞えて、疾風のやうに、恐ろしい速力で迫つて來た。
四人は默つて立ち竦んだ。蟲の知らせといふやつである。六兵衛の目がキロリと光り、要助の目がキョロ〳〵と動いた。
駕籠は道をよけて立ち竦んだ四人の傍を通りぬけやうとして、何うした事か、垂がさつと捲しあがり、中から大きな聲が怒鳴つた。
「六兵衛ではないか」
駕籠は途端に停まつてしまつた。
「オヽ、萱島さま」
六兵衛は走りよつて駕籠の前にピツタリ跪づいた。
「知らぬか、今朝寅の刻建仁寺のあたり團栗の辻の小屋から火が出た。恐ろしい嵐、忽ち八方に飛火、禁裏も如何と氣遣はれ、公家武家のお屋敷も、今では何うなつたか。神社佛閣千餘ケ所、凡家十萬、恐らくは助かるまい。火はまだ洛中を狂ひ廻つてをる。何をこのやうなところで愚圖々々してゐるのぢや」

「何と仰せられます、京洛中の大火？」
「このわたりにも今朝火の光りが見えた筈ぢや。公方様へ知らせの早駕は、もう俺で三臺目ぢや。五條坂、清水、あの高見は風下になつて無事と思ふが、愚圖々々してゐるところぢやない、早く歸れ、左らば――」
萱島は駕籠の垂を下した。
野尻三位の仕人萱島三太夫、妙法院宮さまに、六兵衛が黑藥を獻じて、六目の印を拜領した時に、三位の命によつて、しば〳〵使に立たれ親しくなつた人であつた。
要助の足はぶる〳〵慄へ出した。蒼白な顏になつて唇をかんでゐる。
「要助、歸るか」
六兵衛は、萱島の駕籠が遠く向ふの山の出鼻を曲つて見えなくなつた時、要助に向つて靜かに尋ねた。
「定めし興元寺も燒け失せたことでござりませう、これはまた大變な時に留守にいたしました」
慄ひが止まらないので、要助は路傍に蹲まつてしまつた。

「悪い時に出たが今更仕方がない。洛中隨分な騒ぎであらう。だが、俺は歸らぬぞ」
六兵衛は腕を拱いて暫く默つた。
「お歸りなされませぬか」
若い供の衆は聲を揃へて心配さうに主人の顏を見た。
「ム、、歸らぬ」と六兵衛は瓢箪の口を撮んで「燒けてをればそれまでぢや、今更歸つて見たところで何うなるものか。父親さまもお母も元氣ぢや。滅多なことはあるまい、若い者もおることぢや、窯元が火に怖氣て何とする。俺は、早く江戸へ下らねばならぬのを今日まで延してゐた。公方さまの御用、諸大名方からの矢の催促、せねばならぬ大事なことがウンと溜つてゐる。
「ぢやと申して、それはまた餘りに」
要助がいふと、
「イヤ、思ひ立つて途中で挫けては男一生の恥にもならう。偶〻萱島さまに見つかつたればこそ火事も知つたが、誰にも追ひぬかれず歩いてをれば、江戸に行きつくまで分らなんだ筈ぢや」

六兵衛、この行には或る野望を抱いてゐた。火事を他所にやつて來た豪膽を買つて貰はう性來の洒落氣が或はその時ムク〳〵頭を擡げもしたらう。とう〳〵東に向つてスタ〳〵歩き出した。
「五條坂の旦那さまア――」
要助はへたばつたまゝおど〳〵叫んだが、要助行かうとも言はれなかつたのは「歸れ」の謎と悟つてゐたから「五條坂の旦那さまア」も、呼び止めたのではなく、別れを悲しむ聲なのだつた。

（四）猛炎

脚の力の續く限り、息の喘ぎの續く限り、道を急いで草津、瀨田の唐橋、逢坂山を元に、要助が立戻つて見たその夜の京の街は、一面の火の海、凄しい火と煙はまだ渦を卷いて、八方外廓に燒け擴がつてゐた。
火が出たのは萱島が話した通り、加茂川の東、建仁寺に近い團栗の辻の小屋からであつた。まだ明けきらぬ七ツ刻、いつも曉を告げる千に近い寺々の鐘が時ならず消魂ましく鳴り響い

て辰巳の風がヒュー〳〵唸りを立てゝゐた。どつと揚つた凄しい火の手、東山を眞紅に染める。この風、大事にならうぞと、町から町、家から家、一度に裂帛の叫びをあげて騒ぎ始めた。火の粉は大きな塊になつて、忽ち川を越えて西に飛んだ、北にも飛んだ、南にも飛んだ。飛んだ先で龍卷のやうにパッと火の手が立つと、そこから又八方に飛んだ。飛んでは飛び、飛んでは飛ぶ。碁盤の目の京の街は猛煙渦卷く火の海である。

遁げ惑ふ老若男女、運び出す家財、投げすてた家具、衣服、まだ、火の氣の及ばぬところは、そんなもので一ぱいになつて足の踏み場もない。

禁裏なれば恙もなからうと、御所の築地垣に頼みよつた幾千の避難民、公家武家の六十に餘る廣い邸も、禁裏御警衛の準備とゝもに鼎の沸く騒ぎ。烏帽子を逆さまに着たり、鎧の胴の脊を腹に着けて手鎗の穂を鏃にする狼狽へ方も、眞劍なれば見咎めて笑ふものもない。

重い戸襖を群集の中へ擔ぎ出して、煙と風によろけながら加茂の磧に急ぐ男があり、箪笥長持挾箱、ワッショ〳〵と掛聲の喧ましいのも多く、猛煙空に擴がつて晝か夜かも分らぬほど薄暗い。

あの寺も燒けた、この神社にも火が移つた、せめて一雨さつとくればといつてをると、夥しい雨が雷鳴とゝもに瀧を流すやうにやつてきたが、遁げ惑ふ人々の着物を濡らし、火勢を強めるばかりで、廣い京の街、舐め盡さねばやまぬ猛火の力を少しも殺いではくれなかつた。

二條の御城にも火が入つた。あの御城が燒けるやうでは禁裡もいよ〳〵心許ない、何うなることかと煙の中に土下座をして、まん字巴に遁げ廻る人の足に踏みにぢられながら觀世音普門品の偈を唱へてゐる爺さんもあつた。

丹波龜山の城主松平紀伊守信孝、山を隔てゝこの火を知り、火事羽織の裝束いかめしく、何事の候ぞといぶかる家臣どもを尻目に、唯一騎、栗毛の駿馬に鞭をくれて、老の坂を一跨ぎ、鐙掛の松、桂の橋、乘り切り乘り切り、千本通りを、御所を目がけて一目散に馳せつけた。

既に夜に入り、何れがどの街とも、火と煙と群集とで見分けがつかない。上立賣まで乘り過ぎて脚をとゞめて「御所は何れへ參るぞ」と聲高に呼ばゝつた。天晴れの武者振り、救ひを求むる人々の目にはそれが一層健氣にも凛々しく映じた。「こちらでござります」と口を揃へて指さす方を屹と見やり鬣を立て直してサッと一鞭、漸く烏丸中長者町の公家邸の外に辿りつくと門の横に下馬の建札、火急の場合、お許しを蒙る、氣がつかなかつたのではない證據にと、馬上ながら火事羽織を脱いで下馬札に打かけ、目禮、白砂を蹴つて、紫宸殿、永明門の前、ホッ